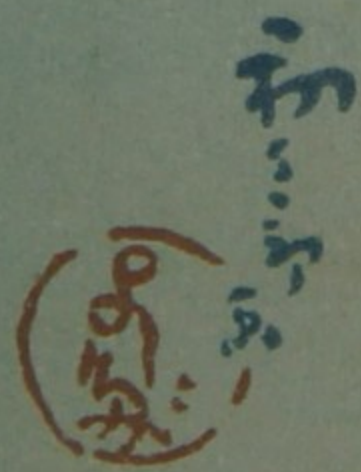


内案秘

勝奇大二外峽門長

(大正14年)



玉珠
一貫

甲子啓

素心款



三井政一氏保管

大正四年三月十五日特旨以從二位追贈らる



天樹公(毛利輝元)



忠正公(毛利敬親公)

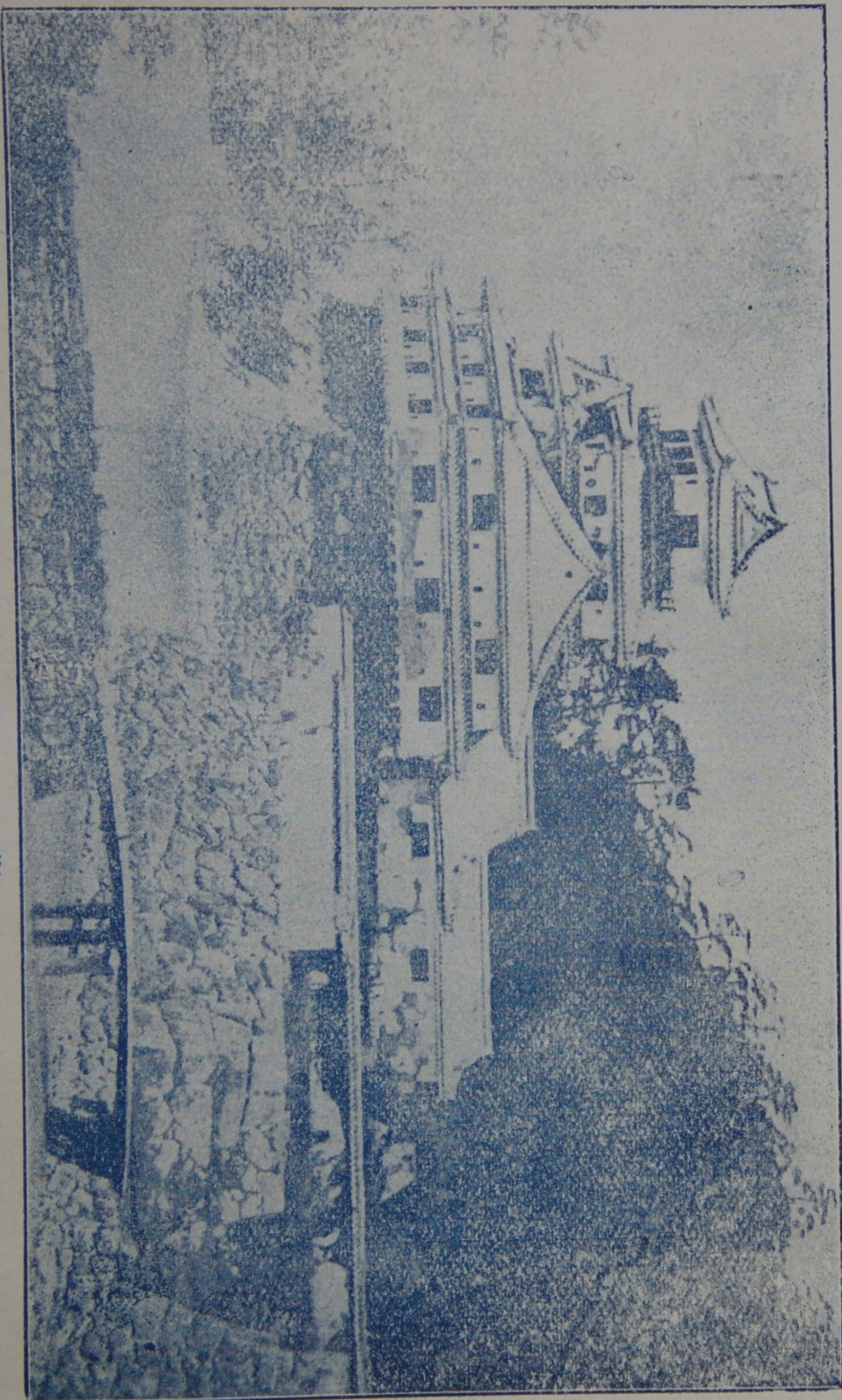


志都岐山神社

三針出處皆諸易已矣夫一身入洛可貴也亦在哉
 心師黃高而無素立名志御魯遜可遜之擇難才
 讀書無功可操學三十年成賦失計可猛氣世一四
 人激狂補寫柳食衆不容身許家國兮死生吾久荷
 至誠不物兮自古亦之有人正志兮垂賢教從陪
 已亦五月昔有開友之邑時暮秋深重復歸難爾
 固以永林告撰文謀使浦無窮昔昔像非自贊之韻
 此詩知昔者其時不香鏡而己哉况昔之自贊子諸
 友長深歲之昔御釋亦必隨乃有生也也
 二十一四強士森廣撰書



吉田松陰先生



城 隍 舊

一	三行	誤	一〇〇	十七行	誤
二	十三行	正	一二五	十四行	誤
三	十五行	誤			
四	四行	正			
五	十行	誤			
六	三行	正			
七	三行	誤			
八	三行	正			
九	三行	誤			
十	三行	正			
十一	三行	誤			
十二	三行	正			
十三	三行	誤			
十四	三行	正			
十五	三行	誤			
十六	三行	正			
十七	三行	誤			
十八	三行	正			
十九	三行	誤			
二十	三行	正			
二十一	三行	誤			
二十二	三行	正			
二十三	三行	誤			
二十四	三行	正			
二十五	三行	誤			
二十六	三行	正			
二十七	三行	誤			
二十八	三行	正			
二十九	三行	誤			
三十	三行	正			
三十一	三行	誤			
三十二	三行	正			
三十三	三行	誤			
三十四	三行	正			
三十五	三行	誤			
三十六	三行	正			
三十七	三行	誤			
三十八	三行	正			
三十九	三行	誤			
四十	三行	正			
四十一	三行	誤			
四十二	三行	正			
四十三	三行	誤			
四十四	三行	正			
四十五	三行	誤			
四十六	三行	正			
四十七	三行	誤			
四十八	三行	正			
四十九	三行	誤			
五十	三行	正			
五十一	三行	誤			
五十二	三行	正			
五十三	三行	誤			
五十四	三行	正			
五十五	三行	誤			
五十六	三行	正			
五十七	三行	誤			
五十八	三行	正			
五十九	三行	誤			
六十	三行	正			
六十一	三行	誤			
六十二	三行	正			
六十三	三行	誤			
六十四	三行	正			
六十五	三行	誤			
六十六	三行	正			
六十七	三行	誤			
六十八	三行	正			
六十九	三行	誤			
七十	三行	正			
七十一	三行	誤			
七十二	三行	正			
七十三	三行	誤			
七十四	三行	正			
七十五	三行	誤			
七十六	三行	正			
七十七	三行	誤			
七十八	三行	正			
七十九	三行	誤			
八十	三行	正			
八十一	三行	誤			
八十二	三行	正			
八十三	三行	誤			
八十四	三行	正			
八十五	三行	誤			
八十六	三行	正			
八十七	三行	誤			
八十八	三行	正			
八十九	三行	誤			
九十	三行	正			
九十一	三行	誤			
九十二	三行	正			
九十三	三行	誤			
九十四	三行	正			
九十五	三行	誤			
九十六	三行	正			
九十七	三行	誤			
九十八	三行	正			
九十九	三行	誤			
一百	三行	正			

序

是まで案内書のなかつたのは、萩で物足らぬ一つのやうに思はれ、何時か書いて見たいと、思つて居た。

恰も本年は、萩の大恩人毛利輝元公の満三百年祭并に開府三百年式が行はれ、更に鐵道開通式も行はれるので、簡單なものがよいとの一般の希望を標準に、作つたのが、此の一書、意に満たない所も多々あるが、若し萩研究の手引となり他郷の人も此郷の人も自ら研究の歩武を進め他郷の人が他山の石とし、此郷の人が國家の爲め今日を萩町の第二紀元として、新たに昔以上光榮ある歴史を作る一助ともならば、著者の光榮は固よりかの大恩人に酬ひ且つ汽車開通を有意義ならしむる所以になるであらう。

大正十四年一月
粟屋芳亮しるす

目次

緒言

胞 一

總説

土地の沿革 一

名稱の起り

はぎと書く字の色々 三

行政区劃の沿革

名所舊蹟 四

一日旅 七―三六

中央部(萩區)

志都岐山神社 志都岐公園 舊城址 花江御殿の茶室 東園址 本丸橋 有倉松 天樹院址 春日神社 阿武松原 ▲菊ヶ濱及外警の臺場 忠魂碑 金毘羅大權現社 蓮池院

南部(椿區)

金谷天満宮 古川筋 茶白山 椿八幡宮 南明寺 大照院 鑄造場の跡 六本松 螢火山 源松遺跡 有名な人物の墓の所在 勤王家の誕生地 住宅地

西部(山田區)

梅屋敷 觀音院 佛山 有名な人物の墓

萩八景

名山と名川 三六―四一

指月山 笠山 田床山 橋本川 松本川

瀧 四一

清遊地 四一

花の名所 四三

公園及銅像 四三

略史 四四―八四

人

流行誌 美術工藝略史 刀鏢書畫 著作 陶器 織物 勤王烈士 明治維新功勞者 國學者 儒者 醫者 寺僧

官衙公署

學校及圖書館 一〇五―一〇七

中等學校 實業補習學校 小學校 幼稚園 圖書館

傳習所 一〇八

會及組合 一〇八

銀行及會社 一〇八

演藝と活動寫眞 一〇八

玉突 一〇八

産物 一〇九

名物 一一〇

交通 一一二

鐵道 汽船 自動車

外胞

蹟 一三―一三五

羽賀臺 三隅山莊 澤宜嘉

名勝 一一五

長門峽 一一五―一二二

長門峽 佐々連洞 阿武川

下り 探勝方法

四大鐘乳洞 一二一―一二三

瀧穴 中尾洞 景清穴 大

正洞

青海嶋 一二三

相嶋及大嶋 一二四

萩の生命 一二四―一三〇

末尾添附

萩辯護士醫師及び實業家案内

廣告

東部(椿東區)

品川子の出生地及花月樓

松陰神社 松下村塾 松陰幽

囚室 大筒の製作所の跡 松

陰先牛誕生地 東光寺 唐人

山 ▲入磨神社 姥倉新川 戎

が鼻 砲臺の遺跡 龍藏寺

中津江製煉局址 長添山及招

魂場 城の腰及千人塚 二孝

子の碑 反射爐 澤宜嘉の避

難所 越ヶ濱 勤王家其他の

誕生地及住宅地 有名な人物の墓

毛利氏の略系 朝廷と毛利

氏の關係 天樹公の略事蹟

歴史の大畧 毛利氏以前

毛利氏時代 培本時代 輝

元公時代 秀就公時代 綱廣

公時代 吉就公時代 吉廣公

時代 吉元公時代 宗廣公時

代 治親公時代 靖恭公時代

齊源公時代 齊元公時代 齊

廣公時代 發現時代 敬親公

時代 準備 中心人物 密勅

降下 逆境 内憂外患 長州

再討令 藩籍奉還 剩餘軍用

金の献納

餘録及明治時代 工藝略史 六

來萩せる他藩の勤王志士其

他 洋學の研究始 最先の洋

行者 萩地に於ける最初の蒸

氣車運轉 明治時代 前原の

變 御來萩の殿下 文久頃の



例言

- 一、普通案内書は歴史を省くを例とす本書は寧ろ要件として畧史を載す。
- 一、萩町の特徴は偉大な人物の多数輩出と各人物の言行悉く美を盡し善を盡せるに存す、然れども其紹介は本書の能ふ所にあらずれば他日の著作に期す。
- 一、本書の記す所長短一ならず又文体を一にせず。
- 一、史蹟地圖は別に發行せしを以て本書に重複せしめず。
- 一、本書に引用せる書大畧左の如し
毛利氏十一代史、防長回天史、忠正公勤王事績、吉田松陰、萩古實未定之覺、虛實見聞記、山田原欽先生事蹟、羽賀壺御狩の記、防長志要、もりのしけり、勤王烈士傳、中島聿德傳、阿武郡教育五十年史、明倫教育沿革、志都岐廻麓、萩志要、八江萩名所圖畫、長門國誌長門金廣、品川子爵傳、洞春公畧譜、常榮公畧譜、天樹公畧譜、大照公畧譜、椿東村郷土史、椿村郷土史、防長史談會雜誌一號乃至三十七號古語拾遺、日本外史、瀧鶴壺先生及其家庭、萩の名王、新論、弘道館記述議、松陰先生武教講議、和漢年契、連繫篇、三の逕、其他刀劔、陶工に關する書等
- 一、意に満たざる所は他日の補修に俟たんと欲す



緒言

昔、萩と云へば、天下に鳴り渡つて居た。而て、萩は、勤王を代表し、長州候を代表し、勤王と長州候は、又萩を代表して居た。嘗て土州の志士小畑孫三郎は、東西戎虜逞^ニ深謀。正是神州危急秋。三百諸藩盡觀望。君臣殉^レ義獨長候。と喝破した如く、王事に力の限を盡し果てたからか、今は、荒寥寂寞、文明的設備は數ふるに足らない。若し、萩を問ふ者あらば、何と答へう。曰く歴史、曰く舊蹟、曰く名所、曰く神社、曰く佛閣、而て多少の産物、之は見せたい。特に歴史は、萩の骨子で、名所も舊蹟も産物も、皆これが説明の本になるから、特に歴史の大略を述べ、更に、彼の三大偉觀と歌はれる長門峽、鐘乳洞、青海島は、萩の環境否萩の自然の一部であるから、之も述べねばならぬ。

内胞

総説

阿武郡の西北端、東西約六里南北一里、三面山連り、北は日本海に面す。阿武川

の下流、橋本松本の二川は市街を夾み、指月山は、北に聳へ、土地概ね平坦。現時戸數六千四百七拾八、人口參萬壹千四拾七、(大正十二年未現在)

防長名所雜記に

阿武郡椿木郷 都波木

西限^リ玉江坂^ナ坤^ニ至^ル雲雀山、周防國堺^ニ巽^ニ川上源水^ナ東松本坂、長猪隈^ナ乾海也

昔は、毛利氏累世の城市として、全國に有名なものであつた。維新前、藩治を山口に尠され、漸次衰頽に赴きしも、猶ほ舊觀の存するものがある。此地は柿本人丸、今川了俊、細川幽齋などの諷咏游賞をしたもので、幽齋が「道の記」の中に

浦小畑と云ふ湊に、唐船の著てあるよしを、船人の内に語りければ、さらば見物せんとして、遙に船を寄せ、しばしとめて

我もまた浦つたひして漕さめぬ唐船の寄りし湊に

又萬葉集に

をさめ等が、をけに垂れたる、うみななす、長門の浦に、朝なぎに、満來る汐の、夕なぎに、寄來る浪の、波しほの、いやす^くに、その波の、いやく^くに、わきもこに、戀つ^くれば、阿胡の海の荒磯の上に濱菜つむ、あま乙女等が、まつひたる、ひれもてるかに手に、まける、玉もゆら^くに、白たへの袖振見せつ、相思ふらしも。

十四小島^ニ反^テ歌^ハ

あこの海の、ありその上の、さ^らら浪、吾戀らくは、息む時^もなし

明人陳元贊は、長門都誌に於て、識者以爲^ニ仁聖之棲址^也と云つて居る、蓋し萩は尋常の地ではない。

土地の沿革

長門金匱に依ると、毛利氏築城以前は、川上村から指月山までは、竹木茂り、堀内より濱崎までは、松原で、阿武の松原と歌われて居た。田町通から、南東は、沼で東北の方を、萩村と云ひ、後總名を萩と云ひ、本の名所を古萩と云ひ傳へるので、其れが、毛利氏築城以來、漸次に、開作整頓せられて、今日の萩を成したやうである。

名稱の起り

萩と云ふ名の起りは、審でない。或は梅松論に、長門國椿浦と見ゆるが萩浦の古名で、津波木浦の津の字、何時の世にか、次第に省かれて、萩浦、萩と云ふに至りしならんとの説がある。萩津と記せる記録の古きものは、川島善福寺所藏天文十九年の大内義隆華押の文書に、萩津浦にて一丁云々とあるものと、下瀬頼直のも

のせる吉見元頼朝鮮日記に、萩浦とあるものであらう。又龍藏寺縁起に、萩を堀田の庄、後に牛舖の庄とも書いてある。更に、當島と云ひ、河島の庄とも云つて居た。但し當島及び河島の庄は、萩の中の所謂川内丈を指したものである。

はぎと書く字の色々

はぎは、萩と書くが正則で、別に、巴城、瀨城、八岐、波沂、波磯とも書く。

行政區劃の沿革

慶安三年始めて、封内を十八宰判に分ち、各所務代官を置いた。其の時、元萩の内、川島莊土原、川島、河添、江向、中津江、沖原を含む、椿郷東分、椿郷西分、山田福井上、福井下、紫福、大井、黒川、三見、川上、明木、佐々並と共に、當島宰判に屬し、濱崎は、船舶出入の要津なるを以て、鶴江、越ヶ濱等を合せて濱崎宰判を建て、後之を廢した。又萩城内を除き右二宰判の治下に屬せざる市街地及椿町は特に町奉行を置いて商政を管掌せしめた。明治四年廢藩置縣の際、本縣下を二十一大区に分ち、更に各小區に分つた。當島宰判の所管を、二十六區とし、區長一人を置き、勘場を扱所と改稱。其の管内を十四小區に分ち、各副區長後に戸長と改むを置いた。萩に於ける小區は

第六小區

椿郷東分村

第七小區

萩川島、土原

第八小區

萩古萩、東田町、上五間町、下五間町、吉田町、熊谷町、濱崎町、同裏町及六島

第九小區

萩西田町、瀬戸物町、古道具町、津守町、鹽屋町、友貞横町、米屋町、惠比須町、相首町、瓦町、吳服町一丁目、同二丁目、八百屋町、油屋町、紙屋町、古魚棚町、北片河町

第十小區

春若町、細工町、鍛冶屋町、樽屋町、今魚棚町、南古萩、堀内、北古萩

第十一小區

萩河添、平安古、南片河町

第十二小區

萩唐樋、橋本町、御許町、江向、八丁

第十三小區

椿郷西分村

第十四小區

山田村(及三見村)

で、明治十二年郡區改正大区は郡に合し、小區は町村に併せ、始て郡役所、戸長役場が設置され椿郷東分村、同西分村、山田村に各一戸長役場、川内に七戸長役場が出来た。川内戸長役場は

戸長役場位置

管轄

平安古本町

萩平安古町、河添村

御許町

江向村、萩橋本町、御許町、唐樋町

春若町

堀内村、萩南片河町、北片河町、古魚店町、吳服町一丁目、吳服町二丁目、南古萩町、

瓦町、油屋町、春若町
 米屋町 萩西田町、米屋町、今魚店町、檀屋町、北古萩町、惠美須町、細工町
 今古萩町 萩濱崎町、濱崎新町、東濱崎町、熊谷町、今古萩町
 上五間町 萩濱崎町、濱崎新町、東濱崎町、熊谷町、今古萩町
 土原山中町 土原村、川島村

で、其後更に戸長役場を併合して左の四役場とした。

江向村 江向村外四ヶ町一ヶ村役場と稱す
 吳服町一丁目 萩吳服町一丁目外十六ヶ町一ヶ村役場と稱す
 土原村 土原村川島村役場と稱す
 今古萩町 今古萩町外十ヶ町役場と稱す

明治二十一年市町村制實施に依り、四役場を併合統一せる舊萩町となり、川外三ヶ村は従前の區域で、新制の村を形成し、後椿郷東分村は椿東村に、同西分村は椿村に改む。大正十二年四月一日舊萩町舊椿東村舊椿村舊山田村を併合、以て舊藩時代の萩に復舊した。

名所舊蹟

一日旅

歳經ては、山も姿の變るらむ。水に映らふ面影を、磨く玉江の秋の月。露置き添ふる草の葉に、集く聲々松蟲の、嶽の麓の潮見坂。曇らぬ御代の例には鏡の岩の動きなき、和泉式部の歌枕。筆染川は名のみにて、雪の花散る櫻江や、御影の峯の大悲閣。遙かに拜し奉り、小松の江にし君か代に、八千代を置めし玉垣の、椿に鎮座ましますは、鶴ヶ岡なる八幡を、佐々木四郎高綱の、勸請ありて末永く、武運を祈り給ひしも、今に赫たる神の徳。郭公訪ふ黄幡の、森の南に聳はしは、その初昔あこ昔。茶臼の山は大内の臣、岩成豊後の城址と、聞きし長良の繩手より、后の森や南明寺。花の盛の木の下は汁と膾と櫻にて、絲を見せたる風情なり。扇翳して直帆片帆、沖原過ぎて中津江や、故郷の渡龍藏寺、往昔南都東大寺、造營ありし其の時に、牛の綱手の國守の子孫は今に傳りぬ。雲の通路吹き閑ちて、乙女の姿留まりし、三保か崎にはあられども、羽衣野に續く馬鞍峰。誰まつ本の東光寺。心も共に晴れ渡る、月見河原の薬師堂。四季に花咲く華園の市の賑ひ早乙女の、歌ひつれたる雅樂か原馬手は松倉伊賀守の、昔の城の址さかや。千本松は颯颯の千代に羽を伸す鶴の江に、太しく立てし宮柱。内外の神の隔てなく、和光の影の明けき、萩城擁護まじませり。阿胡の海つら漫々も、岸打つ濤の音聲寺。棹さし渡す初雁の、書の便のきくが濱。日も西山に傾けば、隈なき夜半の指月山。愛てたき御代に住吉の、神すしめの神樂歌。萬歳萬歳筆をこめめし一書に「初雁」の次を「聲に花さく

菊ヶ濱、世々に久しき住吉の岸の連理の松が枝に霜は置けども色は猶。柩の蔓長き世に、語り傳へむ、言の葉を筆に任せて書さむ」に作る

中央部 (萩區)

志都岐山神社

指月山の東南麓、即ち舊萩城本丸内山麓を拓きし處にある。

明治十二年二月舊藩士民が、舊藩主毛利諸公を崇敬追慕の餘りに建設せしもので造營の始め、地を拓きしは、多く萩城内の老幼男女の勞力寄附によつたものである。而て同十五年七月縣社に列せられた。

祭神 毛利元就公、全隆元公、全輝元公、全敬親公

配神 同秀就公、全綱廣公、全吉就公、全吉廣公、全吉元公、全宗廣公、全重就公、全治親公、全齊房公、全齊照公、全齊元公、全齊廣公

春祭は四月十四、十五日例祭は十月十四、五日

仰徳大明神社 祭神は土地神天穂日命で、慶長築城の時から、城の鎮守社として崇敬せられた。寶曆年間重就公、毛利氏の始祖天穂日命及元就公の靈を合祀せられ、後に隆元輝元秀就三公の靈をも合祀せられた。邦憲公の時、天保元年正一位仰徳大明神と勅額を賜はつた。例祭は、九月晦日から十月一日までにて、神前に

連歌或は舞樂あり。此の日は、殊に、庶民の參詣を許された。この社もと御城二の曲輪西門外にて、山の傍であつたが、後東麓の宮崎八幡に合せられた。敬親公の時、元就公以下の靈は、山口野田に移された。

宮崎八幡宮 大江廣元公の曾孫毛利時親公安藝に下り、吉田に居られた。其曾孫元春公相模鶴ヶ岡から、靈を分ち同國宮崎に本宮を祀り、毛利氏の軍神とせられた、慶長九年安藝から更に分靈して、指月山の東麓に本宮を建てられたが、今は仰徳大明神社と共に、志都岐山神社内に移され、其の攝社となつた。

志都岐公園と舊城址

公園は、明治十年十二月、舊城址に、山口縣之を開設

し同四十二年四月萩町の管理に移つた。舊城の遺址、諸所に存して其の昔を偲ぶべく、且陽春の候、爛熳たる櫻花は、鬱蒼たる山色に映して、景趣佳絶。東は白砂青松の菊ヶ濱に接して、山海の風色二つながら弄すべきである。園内に左の建設物がある。

萩城址碑 大正八年十一月、毛利氏の建設に係る。

前田孫右衛門碑

近藤元統終焉の碑

馬嶋春海碑

花江御殿の茶室

昔花江御殿と云ふのは、毛利家の別邸で、敬親公の新設せられた有名な江風山月書樓は、此の邸内にあつた。而して、其の茶室は、公が夜中茶事に托して、藩の志士を會し、國事を密議せられし所で、一大記念の室である。後志都岐公園に移され、今尙存して居る。近藤芳樹のものせる、花の江の記がある。

東園址 指月公園内にある、昔毛利氏の園圃で、六景二十勝があつた。山縣周南の東園の記に悉してある。惜むべし、今は廢朽して居る。

本丸橋 本丸門前、堀に架る橋で、始め極樂橋といひしも、後に幸橋と名をかへられたと云ふ。

有倉松 その位置、本丸門前である、古昔有倉某^吉族當所に居住せし時、一株の小松を栽置きしが、數年の年月を経、周圍六圍に餘れる大樹となつた。舊藩中作事方より、毎歲根肥料を施すなど、手入せしが、廢藩後其の事止みて枯れた。現今あるものは、其の遺種である。

天樹院址 山號沙籠山、平安寺と號し、京師南禪寺派の禪窟で、萩臨家三箇

寺の一字であつた開山は前南禪言如圓遵大和尚と云ふことである。もと輝元公の隱居所であつたが、公薨去後、遺命に依り、菩提寺とし、天樹院と名づけ文久年中廣巖寺と改稱、明治に至り廢寺となつたが、輝元公の墓は、其の遺跡に存してある。

春日神社 祭神は、天兒屋根命、武甕槌命、經津主命、姫大神、磬筒之男命で、大同年中大和國奈良の春日神社を國守勸請せしもので、はじめ土原に創建、後江向に移し、慶長十二年天樹公堀内の今の地に、移されて爾後萩川内の總鎮守となつて居る。例祭は古は春秋兩度二月は十六日から十八日まで、九月は五日夜度から、六日の晴れの夕まで、秋祭には藩主名代奉幣使ありて其の式殊に嚴格であつた。今は、春は四月の五六兩日、秋は、十月五六兩日、昔に比し、稍々衰へたる形ありしが、近來神苑を擴張し、春秋兩度の祭日には、種々の賑ありて、漸次盛大に向ひつゝある。

配 祀

伊豫八幡宮 江向の中程にあつた、當社は、もこ萩五社の一で、祭神は、應神天皇、三女神、仲哀天皇神功皇后、相殿岩見天神。洞春公伊豫國新居郡金子邑合戦の時、社に火を放ち、後或る事情に依り、若し此の一戦に勝利を得ば、城中の守護神となさんと、此の社に祈誓を立て、果して勝利を得たるに依り、社をも

この如く建替し、崇敬せられたのを、慶長の末頃、大照公、洞春公の心を繼ぎ、當所へ勸請せられた旨を八江菽名所圖畫に傳ふ。昔例祭は九月十八十九日であつた。明治六年四月春日神社に合併

相殿

日吉神社、祭神、大山昨神、御靈神社、祭神、崇徳天皇、伊豫親王、藤原天人、文屋宮田丸、橘逸勢、藤原房嗣、吉備大臣、火雷神、住吉神社、祭神、底筒之男命、中筒之男命、表筒之男命、多賀神社、祭神、伊邪那岐命、八坂神社、祭神、須美之男命、平野神社、祭神、今木神久度神、古開神、比賣神、巖島神社、祭神、市杵島、姫命、瑞津、姫命、思姫命、賀茂神社、祭神、別雷神、大宮八幡宮、祭神、應神天皇、松尾神社、祭神、大山昨神、木之花咲也姫神

阿武神社、川島樋ノ口、御山路神社、川島巖島神社、二ツ森、須賀神社、二ツ森、稻荷神社、土原鷲神社、江向、古春日、稻荷神社、東田町、阿呼神社、下五間町、惠比須神社、吉田町、諏訪神社、川添、大己貴神社を合併明治四十三年十月五日鎮座式舉行

阿武松原 松原口御門外より菊ヶ濱に連なる松原を云ふと博へらる。或は、當郡大井村、湊といへる濱邊に、つゞく松原を云へりと云ふも信じ難い。

誰が爲か阿武の松原名をよめて

我につれなき色をや見すらむ
きて見れば阿武の松原小夜ふけて

大納言 良教

指月の山に残る月かけ

治まれる御代は忘るな春風に

枝をならさぬ阿武の松原

讀み人知らず

毛利敬親公

菊ヶ濱及外警の臺場

萩町の北面松本川口より、指月山に至る間の、白砂青松の濱を菊ヶ濱といふ。昔平家の殘黨、此の地に上り、菊を作りたるに依り、其の名ありと傳へらる。此の砂濱は、面積頗る廣く、東、鶴江臺の奇勝を望み、西指月山の翠容、舊城壘壁の殘存せるものを眺め、北漂渺たる大海に對し、相島、櫃島、大島、久島等の諸島指顧の裡に在り、風光明媚、春秋の散策、夏期の海水浴、又好適。濱の南に、一條の砂丘がある、維新前外備の爲め築きし砲壘で、俗に、臺場と云ひ來れるものである。

遠近のあい島見しま行かへりかもめ妻よふ浪の夕ぐれ

よし樹

忠魂碑 春日神社馬場の傍に在る。

金毘羅大權現社 新堀江戸屋横町にある、眞言宗圓政寺之を管する。祭神は

天狗の木像。二孝子の日參せしは、此の金毘羅社である。

蓮池院 重砂山と號す、浄土宗で瓦町にある。開山は、吞雪和尚、和尚は、

大友氏の家臣、護摩津留大藏之丞といひ、大照公に愛せられたものである。後、當地に來り、一艸舎を結び、正保年間蓮池院と號くるに至つた。

本寺に、山田原欽の墓がある、古より當地の男女、其の智徳を敬慕して、墓參する者が多い。

孝女園

萩町南河片、孝女明石くくの追表碑のある所を云ふ。碑は、大正八年秋明倫校出身女學生及特志婦女等の建設に係る。

明石くには、天保四年萩に生れ、其父を明石彌十郎、母をもと、云ふ。明治孝節錄に載せられてある程の孝女で、性質溫良且つ清廉で、幼よりよく父母に事へ、幼妹を育て病母を看護する事、四十年、嘗て倦厭の色なく其名遠近に著れ屢旌表を蒙たさ云ふ事である。其墓は、蓮池院にある。

本願寺別院

萩西田町に在る。輝元公室清光院殿の遺言により、山口に創建元和年中今の地に移る。規模雄大、萩一の巨刹で、維新後本願寺別院となつたもの、門前の筋屏は、延享二年其筋の許を得て築かれたのである。

弘法寺

眞言宗で寄舟山といふ、土原の内、浮島に在る。大傳に依ると、大同二年、弘法大師の創建せられたものである。

境内に、浮島辨財天女堂、文珠堂、日限地藏堂がある。

本寺の在る所は、元池沼中の一洲であつた爲め、浮島と稱へて居る。古松參差と

御舟、其の他出しもの夜見世等大賑ひで、他に類例はない。

南園

今の萩高等女學校の所在地であつた、又藥園屋敷と云つて、毛利重就公の代、明和三年初めて藥草栽培の爲めに出來た。同五年南園御茶屋と云ひ、後又八丁御殿と改稱せる藩主の別邸であつた。安政三年、製藥所を、萬延元年に硝子製造所を、構内に設け、又文久元年八月寫眞術を試み、同三年受銅所を設置せられた。今は、萩高等女學校の敷地となつて居る。然し舊建物の一部が、保存せれて居て、藩主儉素の狀が、其儘窺れる。

橋本大橋

橋本町と椿町の間にある、世俗橋本大橋、金谷大橋、或は青苔橋銷魂橋と云ふ元和二年初て架く。長さ四十八間、依つていろは橋と云ふ。

瀬岸長橋起。南通金谷村。牧童吹笛去。樵者負薪蹲。臘酒一茅店。春花碧樹園。往來休戀賞、寺磬報黃昏。

南溪

三千坊

元古萩に創建、今は吉田町にある。眞宗にして、山號古萩山、本願寺の本派である。大同元年、平城天皇の御宇、傳教大師の弟子天壽坊といふもの開基で、後、吉見氏の菩提所となり、又天正六年眞宗に改め、慶長三年八月今の地に移されたものである。

して、境域幽邃、月明の風光は格別である。毎年四月八月の各二十一日は、弘法大師の縁日で、種々の餘興を催し、參詣人織るが如しである。又境内の東、松本川の清流に臨む小丘には、南園隊（後に振武隊）の墓地がある。

多越神社 鹽屋町の北に在る、祭神は、菅原道真公で、周防山口に在りしを慶長年中、今の地に移した。今新堀の圓政寺、本社が舊社坊で、同寺に建長六年六月防州山口天神宮の銘ある金鼓をもと藏して居たより見れば、古社なることが判る。本社は高地に在つて、境清淑、何となく壯嚴の思がある。例祭は、昔は、九月廿三廿四日、今は、十月廿四廿五日である。

住吉神社 濱崎町にあり、祭神は、表筒男命、衣筒男命、中筒男命、天照太神、神功皇后の五座、承應年間この地の舟人等、泉州堺の住吉宮に、誓願し海上の危難を免れ倍々崇敬の結果、勸請して建立せし社で、海上安全守護の神である。始め、鶴江臺夷森の傍にありしが、明暦三年今の地に遷宮し藩主青雲公信仰ありて、釣殿、拜殿等結構を備へられた。祭禮は萬治二年に始まり六月の二十七日二十八日、元禄年中は八月四日五日萩市中第一の大祭で其の賑ひは言ひ切れぬ。現今は、七月三十日から八月三日までの五日間で、昔に稍々劣るも、踊車、

端坊 眞宗で、松林山といふ。惠美須町にある。開基は、明源、元、北面の武士で、高祖親鸞上人の直弟である。十三世明善に至り萩に來り藩主の免許を得て、本寺を建立。本寺に鐘樓がある、此の樓は、貞享三年毛利吉就公が創建せられたもので、當時藩主の登城時刻を報じ、又出火洪水等の非常を警むる事に用ゐて居た。今も朝夕の六時晝夜の十二時を報じて居る。

常念寺 長榮山といひて、淨土宗なり。今古萩にある。京師智恩院に屬し長州鎮西派一派の頭であつた。當寺は、天文年間、古萩にあてつ、阿部藤兵衛家貞といへる人の開基である。初めは、いささかな草庵なりしが、西阿和尚と共に佛法を廣めんとて、今の地に移し、伽藍を建立し、阿部氏の菩提所となつた。輝元公萩打入の始め、本寺に假偶せられて居た。

海潮寺 總源山、曹洞派、魚店町筋、東の角にある。慶長年間の草創。開山は、不見妙見大和尚。

本行寺の稻荷社 本行寺内にある。參詣人が甚だ多い。

享徳寺 山號吉運山、曹洞派、享徳年間の創建、慶安中、火災にかゝり、寺傳詳ならず、承應元年再建大正九年又火災にかゝる、もと禪堂ありて、元禄年間僧

大愚の作と云はるゝ達摩像がある。此の達摩像だけは、火災を免れ今に存じて居る。境内に稻荷社ある。

保福寺の地藏 元保福寺に屬せし禪堂にある、本尊地藏は石像で、古より參詣人常に絶へず、特に昔は、三月七月今は、四月八月の各廿四日が縁日で、頗る賑ふ。

獄址と石碑 舊藩時代、上牢下牢の二つあつた、上牢を野上獄、下牢を岩倉獄と云ふ。昔岩倉孫兵衛狂氣して、野山清左衛門宅へ切り入り、死傷を多く出したので、兩家共沒收せられ、其の後、獄舎となつたものである。野山獄は、吉田松陰其の他數多勤王家の或は幽囚或は刑せられたので、有名である。大正十三年十二月十九日原田貞男氏其の他有志の發起で、其の址に、十一烈士の碑を建てた。岩倉獄は、勤王の志士金子重輔が憤死した處で、大正十三年十一月二十三日其の址に、土地所有者吉田潤一氏、金子氏の石碑を建てた。

明倫館址 日本三館と稱せられ、水戸弘道館、岡山閑谷巒と共に盛名を競ひ明治維新の大業を翼賛するに至りしは、實に此の館の力と云つてよいのである。

明倫古館 享保三年藩主毛利吉元公之を萩城第三郭内追廻に創建し、享保四年一月十二日、開校の式を擧げられたに始る。聖廟、講堂、禮式場、劍術場、鎗術場、兵書算術場、手習場等整備し、講堂には、孔子顏曾思孟子の木主を安置してあつた。當時創建に功勞ありし名臣は、毛利廣政、桂廣保、坂時存。明倫新館 弘化嘉永の際、學館狹隘を告ぐるので、藩主毛利敬親公、新に地を江向に卜して、學館を重建され、嘉永二年正月の二十六日に落成した。正門は、南面し仰止門と稱へ、門を入りて中央に、聖廟あり、聖廟に並ひて、講堂あり。東は、武藝稽古場西は、文學の寮である。地坪一萬五千八百八十四坪餘で建物總坪數二千七百三十四坪餘と云ふ。現在の明倫小學校の地がそれである。重建に、盡力せし者は、益田元宣、村田清風、中谷貞章等である。

附屬諸館

好生館 醫學を授くる處で、今の醫會場が、其の舊跡である。

敬身堂 卒族の學館で、城下江向船廻の處にあつた。

博習堂 洋學所で、館内にあつた。

小學舎 幼年兒童の教育場で館内にあつた。

學校御殿 藩主敬親公が、世子廣封を徳山より迎へられてから、特に學事に熱心の餘り、館内に居館を建てられたものである。

現存遺物

木主 孔子及顏曾思孟の四賢の木主は昌平大學頭林鳳岡の書で、今は、明倫校内聖賢堂に藏してある。又別に聖像もある。

他國修行劍槍場 舊藩時代の劍槍他藩仕合場で、維新後館全部解除せらるゝ時、此の一棟を江向小學として残存し、改めて有備館と名つけ今明倫小學校の東方に現存して居る。

聖廟 は現今北古萩海潮寺の本堂となり、新館正門及聖廟の觀徳門は、西田町本願寺別院に傳へられ。新古兩館碑 舊明倫館碑は元文六年建立、水練池及容衆、明倫館(以上草場居敬書)講堂(山縣墨儷書)の三額は、明倫小學校に存し

練兵場碑は、萩區裁判所内に、聖廟前の萬歳橋及水盤は、堀内指月山神社に傳られて居る。

教養精神 嘗て敬親公は、明倫館教官に「神州の國体大に外國革命の風儀と同じからず、故に萬古一系の天朝を翼戴すること、亦異邦自立の主を奉ること大に異れり」と諭せられた。是れ毛利家の祖法で、館の教養精神である。

有名な人物の墓(寺院の部に記るしたものは除く)

山縣周南の墓 元保福寺墓地、瀧鶴臺及夫人世良氏の墓、享徳寺莊地

原采蘋の墓 大字東田町元光善寺墓地にある采蘋は、秋月藩士原震平、宇古處の女で、作詩に巧な學者であつた。遊歴の爲め、萩に來たものである。伊藤百五郎の墓、河添信行寺、河上彌市の墓碑、長壽寺前原一誠の墓 弘法寺境内、佐世一清の墓 全、山田頼太郎の墓、享徳寺莊地

本區に清水清太郎、高杉東行、久坂玄瑞、廣澤兵助、木戸孝允其他勤王家の延生地及村田清風其他勤王家の住宅地が數多ある。

東 部 (樺東區)

品川子の出生地及花月樓

品川彌二郎氏の出生地は松本橋の東に在る。今は當時の建物はないが、子が明治二十年に移した、英雲公の花月樓と、氏の母の遺愛の橙の木、鳥もちの木が、残つて居る。

氏國事に奔走の當時、英雲公の事蹟と、其の遺物を見、忠正公をして、維新の大業に翼賛せしめた原動力は、英雲公にある事を深く感じ、其の遺物を得たいと志して居た處、公の花月樓が、武田休和に與へられ、平安古にあるを知り、種々奔走して、手に入れ、明治二十年移築落成した。それが、今存する花月樓である。

松陰神社

松本の船津に在る。祭神は、贈正四位吉田松陰先生で、神社は、

伊藤博文、野村靖の名を以て明治四十年九月十五日建設及縣社列格を出願し、同十月四日認可を得、直に起工、同四十一年十一月落成したものである。其の二十一日を以て、祭典を行はれた。此の日は、先生の神あがりたまひし安政六年十月二十七日を、太陽曆に湖算したるもの、落成の年は、正に五十周年に當つて居た。以後十一月二十一日を、例祭日と定め、又毎年五月二十五日を以て、神社恒



松陰神社

例の春祭に相當する祭儀が行はるゝ。此の日は先生が萩の地を永訣せられし安政六年五月二十五日を記念する爲に用ふるのである。

神殿 には、先生の使用したまひし、硯一面と、先生自筆の文一篇とを、御靈代としてある。その由來左の如し。

神硯は、嘉永二年先生二十歳の時、藩主より外寇御手當方御内用掛を命ぜられたまひ、七月に命を受けて長門國大津豊浦兩郡及び赤間關の海岸の防備を視察したまひし時、赤間關にて求めたまひしものにて、長さ五寸五分、幅二寸五分五厘厚さ五分。

神文は安政五年先生二十九歳の時、幕府の老中間部氏を刺さむ爲に、上京せんと企て、父兄に訣別を告げたまひし、十一月六日付の漢文体の書牘で字數八百十字、具に平生の抱負と當時の決心を述べられたもの。

米搗臺

本社境内に保存されてある米搗臺は、先生屏居中、杉氏の家事を手傳はれ、飯料米を搗かれた記念物である。先生米搗の時は、鳥居の上に、見臺を拵へ、門人を助手として、書を授けられ、又先生一人讀書しつゝ搗かれた。

祭器圖書庫

境内にある庫中、左の種類の物がある。先生自著、先生手抄の書、先生手澤の本（自筆の記入あり）先生眞蹟の書幅、先生自用の衣服、刀劍類、知友門人に關する書籍幅物、神社創立に關する書類。

松下村塾

（中蹟として指定のもの）

維新革命の人材を、養成した、松下村塾は、八疊の室と十疊半の室土間一坪を添ふとを連ねた一棟である。八疊の室は、元瀨熊氏の家の一部に残り、先生の實家杉氏隣家にて、之を併有することとなりしが、安政三年七月屏居の身ながら、家傳の兵學を教授することを許され、この處を學舎に用ゐられた。

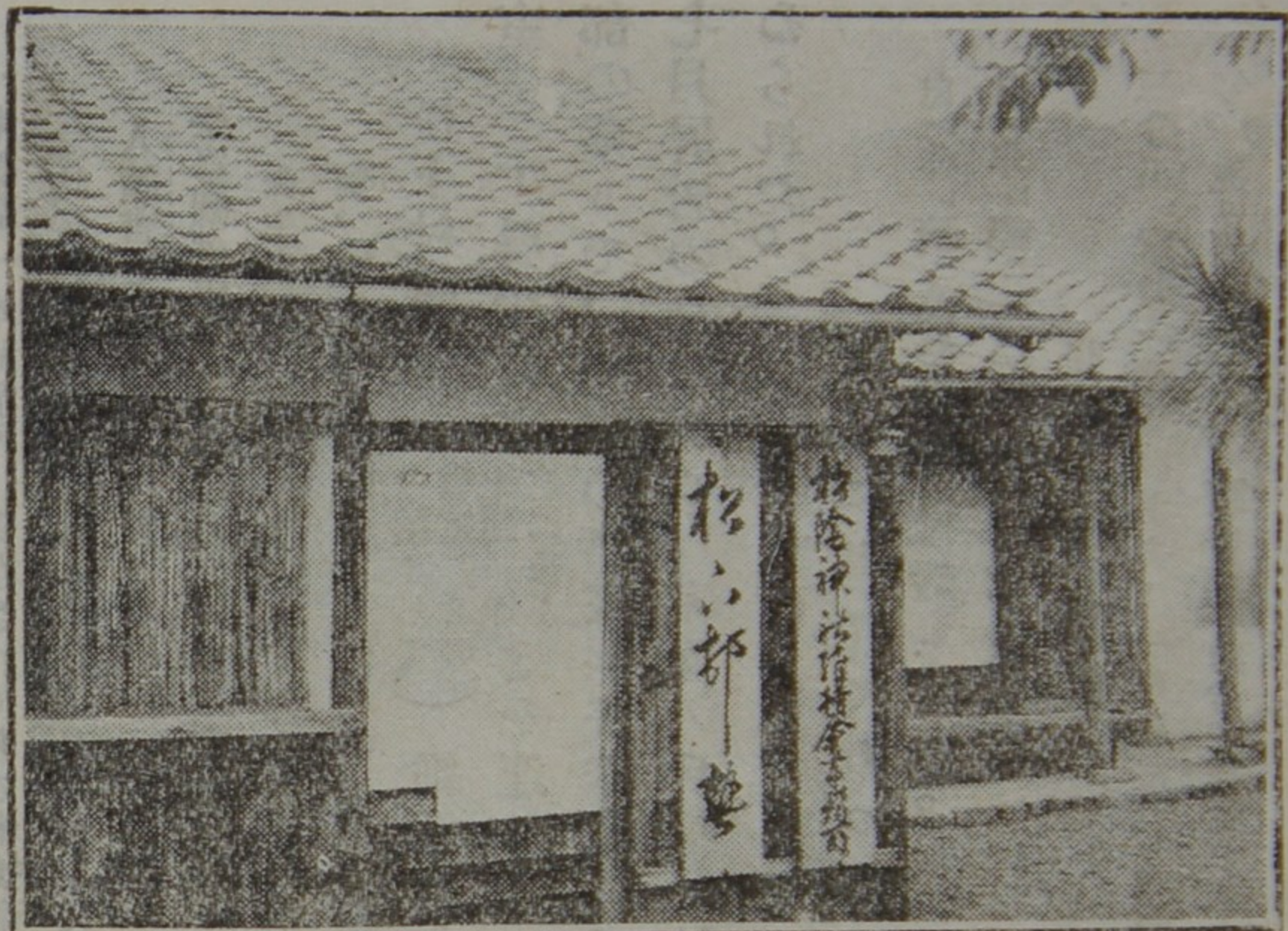
塾中に掲げてあつた聯

自レ非レ讀ニ萬卷書ニ寧得レ爲ニ千秋人

自レ非レ輕ニ一己勞ニ寧得レ致ニ兆民安

松陰先生肖像自贊

三分出レ廬兮。諸葛已矣夫。一身入レ洛兮。賈彪安在哉。心師ニ貫高一兮。而無ニ素立レ名。志仰ニ魯連一兮。遂乏ニ釋難才。讀書無レ功兮。撲學三十年。滅賊失レ計兮。猛氣廿一回。人譏ニ狂頑一兮。鄉黨衆



松 下 村 塾

不レ容。身許ニ家國一兮。死生吾久齊。至誠不レ動兮。自レ古未ニ之有。人宜レ立レ志兮。聖賢敢追陪。
松下村塾の稱は、先生、家叔玉木正繼（文之進といふ先生を教へし人）の天保十二年に開きし家塾に用ひたるもの、其の官仕の後、先生の外叔久保久成、村の子弟に素讀筆札を授けし時、其の稱を襲用し安政二年乙卯の十二月先生野山獄を許されて、杉家に銅せられ、翌年七月許されて教授を始むるに及びて、久保氏と塾を共にし、この稱を用ゐられた、實は共用てなく専ら先生の教授所であつたが、屏居の身憚る所あつて、殊更に久保氏に託して記されたのであらう。
先生は家學教授の傍時勢を論議し尊王愛國の大義を講明し大に志氣を鼓舞せらるゝので、弟子日に増加し、塾舎狹隘を告げ、安政四年に六坪二合五勺（十疊半と土間一坪）の増築をせられ十一月五日に完成した。

伊 藤 博文
道德文章叙彝倫。精忠大節感明神。
如今廊廟棟梁器。多是松門受教人。

松陰幽囚室

（史蹟として指定あり）

松下村塾舊蹟の東にある。松陰先生の實家杉氏舊家の一室で、先生が國事に奔走中、幽囚せられた紀念の室、今現に保存されてある。

大筒の製作所の跡

沼田ヶ原にある。寶文の頃、郡司讃岐藩主に召され、三田尻より此の地に來り、御細工人となり、椎原區で、大筒其他の武具を調製し始めた。

享保三年、讃岐より三代目權助、藩の大筒役となり、文久四年五貫の大砲を鑄造した事がある。降つて嘉永安政の頃、攘夷論沸騰するに及び、大砲製造の急を要し、藩命を奉し、鑄造せしが、其の地が、狹隘なので、讃岐より七代目、右平次信安、沼田ヶ原の地に移り、廢藩に至るまで、大砲及砲彈を鑄造した。

松陰先生誕生地

松陰先生の誕生地は、椿東椎原臺、團子巖なる杉家の舊宅で、護國山麓にある。宅址に、二つの石牌がある。一は誕生地の碑、一は先生産湯の井の碑。境、廣豁にして靜閑、近く山河城邑開き、遠く海天萬里に連る。之を望めば氣宇忽ち伸張、先生此に生る、豈に偶然ならん哉の想がある。春夏秋冬、凡て風色に富む。

東光寺

護國山と號し、黃蘗宗、宇治萬福寺派の禪林。元祿四年二月毛利吉就公の開基で、開山は惠極道明。宇治の黃蘗山を摸擬して七堂伽藍等を備へ結構壯麗、寺領八百五十石、寺格は開堂抱とし、末寺二十三、雲衲及法僕、常に五十名、奥州の大年寺、因州の興禪寺と鼎立し、日本三叢林と稱せられた西國の一大巨刹であつて、大照院と共に毛利氏累代の菩提所であつた。寺は、後に、青山を負ひ、前に清流を控ゆ。山は三峰屹立、中を馬鞍、左を千秋、右を萬歳の尾と稱す。明治の初年廢藩の際、樓殿、堂塔、大半解除せられ、明治七年八月十七日伽藍一圓寺有となり毛利家の管理を離れ、獨立の一寺となつた。建築の今尙存するもの総門、山門、佛殿、鐘樓、經堂等で、昔日の壯觀を知るに足る。本堂の後森嚴な山麓に毛利吉就、吉元、重就、齋房、齋元、五公の墓がある。

明治二十二年十月、甲子殉難十六士外三士の招魂碑を同境内に建設せられた。

唐人山

中の倉の東に、高く聳ゆる山を云ふ。天樹公、朝鮮征伐凱旋の時、朝鮮國の陶工師李勺光、李敬と云ふ兄弟隨ひ來り、其後、鼓の嶽の麓に、第舎を結び、土器を造らしめられた。其れより此の山を唐人山と稱するに至つたと云ふことである。今の陶業家坂高麗左衛門は、李敬の十代目の孫である。

人麿神社

中の倉にある。祭神柿本人丸朝臣、天正年中石見國高津より、靈を分ち祀つたもので、明治四十二年に、諏訪神社、全四十三年に、下山神社を、合祀せられた。例祭、昔九月朔日二日、今は十月一二日で、參詣人が甚だ多い。唐人山は、近く其の東に聳へ、溪流は其の下を流る。境内一点の蘆なく、壯嚴又清淑。

姥倉新川

姥倉新川、鶴江臺、前面の堀割を云ふ。毛利敬親公、萩の水難を除くため、有司に命じ堀らせられたもので嘉永五年十一月起工、安政二年六月竣成、幅十五間、全長四百九十九間、役夫凡三十三萬、用船凡二萬六千餘隻を要した。後水害の患なく、且船舶の出入又頗る便を得た。河側に宍戸璣の撰文にかゝる、石碑がある。

戎が鼻

幕末に當り、我長藩は、當時の軍艦製造所を、小畑戎が鼻に設け、安政三年スクーネル形一隻を造つた、是が、丙辰丸である。此の工場設置に就ては、山田亦介、御船手の船工長尾小右衛門が盡力したものである。尋て又工を起し、山田亦介、主監となり、一年有半の日子を費し、經費も丙辰丸に比し、約五倍を要した、之を庚申丸と稱し、萬延元年五月朔日出來上つた。

砲臺の遺跡 外警に注意する頃、藩主、武備を嚴にし、海岸に砲臺を築造した。其跡鶴江、中の臺、孤島に遺つて居る。築造は弘化元年。

龍藏寺 山號、白牛山、中津江にある。臨濟派の禪林で、天樹院に屬して居た。昔天平年間聖武天皇勅額の舊跡である。大同年中 平城天皇の御宇、創建の伽藍で、萩一の古刹、開山は、行基菩薩であるといふ。寺傳に 聖武天皇天平年間南都大佛殿建立の時、諸國の牛車を徴さるゝ中に、長門國阿武郡堀田庄、今の萩川島の郷より、率出たる白牛は他國の牛に勝りて、よく大木大石を運びたりとて朝廷より、その褒賞として、此の牛に耕作の勞を免し、且牛飼には、飼料の地、また國守といふ號を下し賜はりぬ。是より、己降、長門國中の牛には、竹木にかざらず、よろづのもの負する事を止む。又朝廷より、白牛山龍藏寺と勅額を賜はり、堂宇伽藍、新に建營せられ、其の後、かの牛の像を彫刻して、南都東大寺の境内、淨土堂に安置せられたと、傳へられて居る。

中津江製煉局址 火藥製煉局を、中津江阿武川畔に設けられたが、慶應二年六月二十七日爆發した、當時製造に用ゐた石臼は、現に水車米搗臼に使用して居るといふ事である。今の中津江水車は、其の址に出來たものと云ふことである。

長添山及招魂場 椿東の小畑と、香川津との境にある、勢のいよ青松が、密生し頗る趣のある山である。頂に登ると、足下に、洋々たる小畑灣の碧波を瞰下し、木の葉の様な、小舟が是所彼所に撒き散らしたやう、浮て居て、心廣く体胖かな想がする、春秋の登山は、特に快絶、頂上に招魂場がある。

明治維新の際、邦家の爲め、忠勤した長藩の干城隊第一大隊第四大隊等戦死者の招魂場で、三隊の經歷と戦死者の姓名を刻した石碑三基がある。

城の腰及千人塚 城の腰と云ふのは、尼子氏方の松倉伊賀守の居た古城と云ふとの事である。其の麓北の方、田中に首塚と云ふものがあつて、伊賀守塚といふ。此の首塚は、大正三年堀り崩して、田にした。

二孝子の碑 香川津にある。山縣太華の撰文を刻す。(歴史大略参照)墓は前小畑舊墓地にある。

香川津なる二孝子が事をきゝて感泣の餘に

はらからの屍を雪に埋みてそ埋れぬ。名は世に残りける

澤 香 川

反射爐 (史蹟として指定されたもの) 前小畑に在る、爐は、玄武岩及鍊瓦をもつて築き、基底は長方形で上方漸次狭小となり、分れて二本の煙筒となつて居

る。明治年間頂上の一部崩壊されたが、今に舊態を存して居る。

澤宣嘉の避難所 大字椿東字城の腰山の東北麓にある。元の毛利隱岐の別宅で、文久三年八月朝議急變の際、七郷の長門に下り澤卿は、阿武郡大井村にありしが、後轉じて本村に避難せられた、當時其の邸宅にあつた下駄磨石、庭前の鶴龜の池、公孫樹等現存して居る、卿のこゝにて著述せられた二孝子傳は、世に傳はつて居る。

越ヶ濱 萩市街の東北、海中に突出する半島にある漁浦で、山海の風色秀麗である。昔は、藩主遊豫の處で、茶邸もあつた、辨天池といふ池中に海魚多數生棲し、天然の一大水族館とも云ふべく、今は、萩の一名勝となつて居る。毛利綱廣公の時、藩祖元就卿の敬仰厚かりし嚴島明神を此の池畔に分祀せられた。今又浦人の崇敬する所で、舊七月十七日には管絃祭が盛に行われ、舟にて濱崎港に御神幸がある。爲に菊ヶ濱の人は夥しい。

勤王家其他の誕生地及住宅地

本區には吉田稔麿、松浦龜太郎、三浦梧樓、山田顯義、堀潜太郎の誕生地、松島剛義、揖取素彦、穴戸磯、伊藤博文、來原良藏、林友幸等の住宅地がある。

有名な人物の墓

東光寺墓地にあるもの 吉田松陰、高杉東行、堀潜太郎、玉木彦介、久坂玄機、久坂義助、弘新次郎、佐久間左助、長尾兵馬、駒井政五郎、杉百合之助、玉木正靄、通心寺墓地にあるもの 松浦松洞、安達章造、廣巖寺墓地にあるもの 金子八五郎、金子喜代七、明安寺墓地にあるもの 松田清造、田村誠輔、和田小傳次、阿武鞆輔、小畑觀音山墓地にあるもの 戸倉音五郎

南部 (椿區)

金谷天満宮 文治二年の春、佐々木四郎高綱長門國守護職として、當地に下向せし時、人民安全の爲め、同七月十三日太宰府より勸請、一國一社の總鎮守となせし神社なりと云ふ。後、廢頽せしが、享保年間、本社回廊を、修造せられた。始め、古天神にありしを、元祿年間、今の地に移されたものである。社殿宏壯、老松鬱蒼として、天空に聳へ、境地自ら幽邃、諸民の崇敬厚く、御祭は、住吉神社と共に古より有名な大祭で、當日は、踊車や大行司、小行司、手廻備の行列、其の他種々の賑ものがあつて、遠近よりの參詣人が頗る多い。祭日は古は、十月十五十六日、今は、十一月十五十六日である。

古川筋

八江萩名所圖書に依ると、大照院繩手に架る小橋の流を云ふ。源は

川上河で螢火山の麓から、霧口をよぎり、南明寺の下水溜に入り、大谷長敷の中をついて、濁淵より、小松江通り大照院の前に流れ落ちる川を云ひ、今の太川出来ざりし以前よりあれば、此の稱ありと云ふ説あれど、確かならず。

茶臼山 大内家旗下、岩成豊後守城砦を構へた所で、其の城跡がある、又明治九年前原の亂に、官軍此の附近の山に據り、賊軍を砲撃したと云ふ事である。

椿八幡宮 萩廓外の総鎮守今の大字椿區椿東區、川上村の産土神である。祭神は應神天皇、神功皇后、仁德天皇、住吉大明神、諏訪大明神、守治若皇子

仁治四年二月十五日佐々木四郎高綱宇治先陣の賞として、長門國守護職たりし時相模國鎌倉鶴ヶ岡八幡を移し奉りて、一郡一宮の守護神として、舊椿村に勧請せしものと云ふ。後阿武郡の十八郷皆分社を勧請したが、椿郷は、本宮であるから當社に、春秋兩度、諸郷の神司を集め、國家安全の御祈禱を奉りて、二夜三日にて終ると言傳へて居る。萬治年中泰嚴公の時、修營を加へ本殿樓閣彌備はつた。

祭禮は昔は九月十五日より十六日まで、式壯殿市中は勿論近郷近村より參詣人多く今は十月十三日十四日が祭日である。

當社舊記に依ると、孝徳天皇の御宇、大化五年正月、穴戸の國草壁連醜經椿郷の南谷麻山より、白雉を獲て

陛下に獻す、即ち白雉は祥瑞の物なりとて、年號を改められ、國司にも、賞として、三年の調役を免された。此の麻山と云へる山、當社南谷にあつたと云ふ事である。麻山は、美禰郡の麻山なるべしとの説もある。

椿てふ里の名こそは嬉しけれ八千代と祈る我君のため

牧 田

本社に合祀の神社、櫻江、須賀神社、霧口、須賀神社、香川津、赤崎神社、上野、高田神社、大谷、日吉神社、南明寺、日吉神社、川上村立野、日吉神社、目代、稻荷神社、後小畑、大年神社、三島神社、元椿村木部、山祇神社、川上村京床、水門神社、全村足山、河内神社、全遠谷、遠谷神社、無田ヶ原、日隅神社、香川津、嚴島神社、浦小畑、惠美須神社

南明寺

(國寶あり)山號は日輪山、天臺宗の禪刹で、明應永正兩度の棟札を

藏する古寺である。中興は權大僧都師源康で、大同年間の創建と云ふ。本尊は聖觀世音菩薩(國寶)脇士千手觀音(國寶)四天王等は、行基菩薩の作と云ふ。又藤細工の不動明王の像がある。之は、有名な萩の藤細工の名残で、益田家の寄進にかゝる。當寺は、初め直言宗で、優婆塞修驗の山伏等交々住職せし道場である。後、慶長年中宗風を改めて、冰上山に屬した、堂宇は、竹田番匠の造れるものと傳へて居る。昔、南明寺の糸櫻と云つて有名な櫻があつた。今は、残るもの僅に數本の老樹のみ。其の後植へられた櫻も、昔の糸櫻に劣らぬ風情がある。又昔は七月十九日今は八月九日の晩から十日に亘り、善男善女の參詣絶間がない、本

寺は本國三十三ヶ所の一番札所で登臨の勝に富む。

大照院

(國寶あり)山號靈椿山、櫻江にある。境内に、秀就、綱廣、吉廣、

治親、齊熙、齊廣六公の墓及大照公に殉死した者の墓がある。境趣幽嚴にして、俗塵を離る、前面遙かに、萩市街を一眸に收む、庭内梅多し。元月輪山觀音寺といひ、桓武天皇の御宇、延暦年間の創建勅額道場の佛域であつた。開山は、義翁傳等大和尚で、後大椿山觀喜寺と改む。爾後久しく廢頽せしが、承應年間、大照院殿の菩提所と定められ、寺號を大照院、山號を靈椿山と改められた。延享四年回祿にかゝり、暫く天樹院の地に移されたが、又寛延に當所へ、再建。本寺に、木造赤童子の立像がある、之は、今國寶になつて居る。

鑄造場の跡

沖原、荒地氏の所有地にある。維新前藩主敬親公、此處に鑄造

場を置き、大砲小銃を鑄造せしめられた。荒地氏、山口素臣氏の父、惣右衛門氏北條瀨平氏之が司であつた。

六本松

沖原にある。老松六株、雲に聳ね、阿武川の本流に臨んで居る。維

新前、此にて、兵式訓練をしたと聞く。

螢火山

大内氏支族の城跡で、螢の名所。

涙松遺跡

千坊師の路傍に在る。昔、此處に老松があつて、萩より、旅立つ

ものは萩城を見おさめとして、惜別の涙を流し歸るものは、萩城を望み得てうれし涙を落せしより、誰れ云ふとなく、涙松と稱へ出した。又安政六年五月二十五日、吉田松陰の檻輿、江戸に送らるゝ時、松陰樹下に於て

かへらしさおもひ定めしたひなれば ひさしほゆるゝ涙松かな

と詠せられた事がある。是より、涙松の名、世間的になつた、此の松、一二年にして枯死したが、大正三年椿村青年會の事業として、遺跡の保存を圖り、大正四年四月建碑した。

有名な人物の墓の所在

小倉尚齋及全鹿門の墓、大谷和泉寺にある、奥平謙助の墓、大照院墓地、和智東郊の墓、大照院墓地

勤王家の誕生地住宅地

本區に阿上彌一郎、御堀耕助の住宅地及北條源藏の誕生地がある。

西部 (山田區)

梅屋敷

大字山田村今の白水小學校の背後の山麓、今前田氏の別莊のある所にあつた。維新前東久世卿等、此に、偶居せられたと傳へられて居る。

観音院

玉江浦の中程にある。山號、潮音山、臨濟宗の禪刹、大同年間不見別當の創建と云ふ。眺望、偉大絶美。觀月納涼共に絶好。

俣山

一に、面影山と云ふ櫻江の西に位して居る。容姿常に水に映り、風趣殊に掬すべきものがある。

有名な人物の墓

雲谷等顔の墓、大字山田村禪巖寺墓地にある。本區に時山直八の誕生地中村九郎の住宅地がある。

萩八景

人に無名の偉人ある如く、地に無名の靈地がある。全國から言へば、萩の地は正に無名の靈地である。萩八景は、古き郷人の撰んだもので、天下稀有の勝地である。

舊八景

慶安、承應の間頃から、八江萩八景と云ふ名が起つた。それは

兼江夕照(鶴江) 鐘江秋月(玉江川尻) 藤江落雁(佐世屋敷ノ所) 萩津江暮雪(今濱崎浦ある脇) 得江歸帆(御藏元の所) 三江晴嵐(金谷古天神) 二江夜雨(渡リ口橋の邊) 柳江晚鐘(濁淵)

であつた。

新八景

元祿の頃、藩主、部山田原欽安春貞雲谷等藩三人に、城下の奇勝を撰ばしめ、等璠に圖を原欽に詩を、春貞に歌を、命せられたものが、今の八景である。其の景勝は左に掲ぐる原欽春貞の詩歌に盡してある。

上津江晴嵐

上津江上斂秋霖。度嶺嵐光浮即沈。旋與扁舟傍灘落。日登丈五翠猶深。

山川の瀬々の朝霧絶々に江の水みわて行嵐かな

中津江夜雨

雲氣四山横。渡頭雨暗生。蕭然不能寐。一夜打簾聲。

更くる夜の雨のふる江の賤が家に残るも細き燈のかけ

下津江落雁

旅雁秋高停不征。一汀水氣接天清。問渠縁底漫來去。不耐雲江萬里情。

有明の入江の蘆のほのくと明る空より落る雁がね

鶴江夕照

斜陽宜曬網。一半鶴江紅。鳥影委波水。寒潮湧遠空。鶴のゐる入江の村の松原に残る夕日のかげのさやけき

倉江歸帆

地挹遠天三面開。水浸數島一帆廻。倉江風熟潮生駛。疑是仙查銀漢來。遠島や波もひとつにみこりなる空より出でて歸るつり船

玉江秋月

玉江一片秋。明月入清流。夜靜人回首。漁村煙霧收。江の水の志つく影さへ白玉を琢くばかりの秋の夜の月

櫻江暮雪

雪滿櫻江更問津。晚來舟子訝行人。風回偏惜入波碎。楫轉何妨厭笠頻。白雲の夕べの色はやまさくら江の波かけてあるかどぞみる

小松江晚鐘

斷霞夕竹峯。深寺度疎鐘。漫々春江水。平吞樓外松。山の端も霞渡りて遠き江の松よりつたふ入相の鐘

萩八景

夕風の涼しさつれて釣小舟、是ぞ倉江の歸帆かな、みなどの夏を越來れば、岩にゑぼしの名の有りて、馬手は遙に五鬼のみや、はやうすくと灯かげ、うつろふ波も清淨の、玉江の浦の秋の月、蘆の葉を吹かせの音ものさわがしく秋過て、白櫻山の白妙は、花の比かをとをはれて、小松江よりぞひびき來る、其晚鐘に散かけて、實に櫻江の暮雪なり、つめたき夜をば振捨て、跡に沖原過行けば、春めき渡る上津江に、下る薪の船の棹、瀬にあしらひを晴嵐と、いひつゝ拜む嚴島、神の恵も代々かけて、はこぶあゆみも中津江の、よるの雨より人繁く、はや下津江の落雁も、又立歸る幾春を千本松と壽ぶきて、千代もかはらぬためしには、目出度鶴江の夕照かな。

名山と名川

指月山 萩町に足を投ずる者の、必らず先づ其眼に映せざる能はざるものがある、明の陳元賛か、聳教養頭。拔地勢。宛然天造金城と云へる指月山が其である。實に萩町の一大偉觀で、彼の長門峽、鐘乳洞、青海島等天下の奇勝は、勿論此地方に於ける地靈人傑の總起源であり、總歸結であり、更に又萩町の頭腦である。

數百年來の老樹、鬱蒼として、四時色を改めず、三面海に臨み、山背の斷崖絶壁は屹として中空に聳へ、山麓は、大小無數の奇岩怪石点々起伏し、眺望に、跋涉に將た釣魚に、天下随一。

笠山、越ヶ濱の西に聳ゆる圓錐形の山を云ふ。成層火山で、頂上に往時の噴火口がある。山麓に、風穴があつて、盛夏の候、冷氣を吐く、人之を稱して夏知らずと云つて居る。

田床山 椿東區上野臺の東にある。わらび柴栗(小さき栗)が多い。春秋の登山に適す。其他長添山、唐人山、茶白山、俣山(以上名勝舊蹟の部に記せり)白水山等がある。

橋本川 阿武川の下流分れて、二となり、一を橋本川、一を松本川と云ふ。橋本川は、萩八景中の小松江、櫻江、倉江、玉江の四景に亘り、萩風景の第一位である。其下流は、水洋洋として、湖水の如く、北は常磐島の松林を隔て、指月の翠黛を眺め、東南は松林連續遙かに層々たる山峯を望み、南は面影山屹として眼前に聳へ、西は玉江漁浦に接す。風光描くが如く、詩情湧て盡きず。此川の一大特色は橋本大橋以下には、鮒鰻等の川魚は勿論いささ、ぼら、ちんだい、其

他の海魚蛤蜊牡蠣多く、隨て、舟を浮べて、釣によく、網によく、更に納涼其他舟遊によい。

松本川 上津江、中津江、下津江、鶴江の四景を連綴し、風色橋本川と其趣を異にし、而かも橋本川に劣らず。水清冽にして鮒鰻白魚其他川魚最も多く、蜆又鮒からず釣に網に舟遊に頗る快適。

瀧

如意ヶ瀧 大字椿東村の小畑にある。

紅葉の瀧 上津江と中津江との境目邊にある。昔紅葉屋敷と呼ばれた藩士の下屋敷のあつた處で。紅葉が澤山あつたさうだ。

清遊地

前に述べた、名勝舊蹟は、全部清遊地と見る事が出来るが、特に

散歩 によいのは、海邊で、菊ヶ濱、西の濱、其の他で、指月公園、河島土

手、上津江、中津江、下津江、鶴江臺、上野の臺、椎原臺

眺望 によいのは、松陰先生誕生地、長添山、鶴江臺、中の臺、南明寺、嶽

音閣、玉江觀音院、都波岐神園、大照院、松洞、上野、椎原臺、倉江。

舟遊

によいのは、橋本川、松本川の全部と太鼓灣の上流、指月山背の海上

釣

によいのは、橋本川、松本川、指月山の背後、鶴江臺。

綱

には松本川、橋本川何れもよい。更に上津江のゴリ引は、格別の味。

觀月

によいのは、金谷天神、弘法寺、雁島橋、橋本橋、玉江橋、玉江觀音

院等である。

登山

には、長添山、田床山、笠山、茶白山、東光寺山、南明寺山、嶽觀音

山等。

右の中、前に述べなかつたもの、一二を述べやう。

椎原臺及上野臺

共に背に山を負ひ、萩市街を一陣の裡に望み、田あり、畑あり、閑雅清淑、四季風

色に富む。

三つの臺

萩の東北海岸に、鶴江臺、中の台、孤島の三つの臺がある、鶴江台は八景の一で、東及南

は萩市街を瞰下し、北は日本海に臨み、散步眺望に最も佳。中の台及孤島も亦何れも風光明媚、

川島土手及太鼓灣

土手の長さ約二十丁、兩側を縫ふ櫻は、青草萌ゆる長堤に咲き續き、橋本、松本

兩川の清き流と、相映して、美しく、椿東、椿の田圃は、青紅緑の色に燃へ、花中の家、山中の花、趣を添へ、天下の春を獨占するの想がある。夏日の朝暮、秋の紅葉、冬の雪景又逸すべからずである。土手の曲り

角で、阿武川が橋本松本二川に分岐の所を、太鼓灣又帯虹灣と云ふ。昔六本松當りに、太甲庵と云ふ庵室ありたるによるこの説がある。此所は、八景の一上津江に属し、風景佳絶、花時杖を引く者甚多い。

花の名所

櫻 指月公園、春日神社、弘法寺、南明寺、川島土原堤、鶴江神明社

梅 大照院、埤天神社、金谷天神

躑躅 南明寺下の寺、楞嚴寺、都波岐神園

藤 住吉神社、埤天神社、春日社、大照院、香雪園

燕子花 指月公園、明倫校

萩 明倫校

公園及銅像

指月公園

(名所舊蹟の部に記す)

都波本神苑

椿八幡宮の後にある。大正二年椿村青年會が今上陛下御大禮

の紀念として、建設せるもので、凡千人の力を費し、全三年竣成した。苑を登れ

ば、萩市街は一陣に收り、風光明媚、春秋の清遊に好適

山縣元帥の銅像

川島土手下、元帥の誕生地に在る。全地には、誕生地の石

碑もある。

藤田傳三郎氏の銅像及香雪園

吳服町と片河町との角にある小公園が香雪園で、園の西南部は全氏舊宅地の跡で氏の銅像は、園の東部にある。

賀田金三郎氏の銅像

椿東上野臺麓にある。大正十年十一月十三日除幕式が行れたものである。

全氏は、安政四年九月十六日萩米屋町に生る。後藤新平氏は賀田金三郎氏の小傳に序して台湾に於ける賀田君の事業の功績を擧ぐれば、未開不便の地に率先して、諸種の事業を興し、台政の施設を幫助するに力を致され、中にも驛傳社を設けられたことは、最も著しきものの一つである云つて居る。

略史

歴史は、萩の骨子、歴史を抜けば萩の研究は出来ない。精讀を煩す爲め、記述の順序に拘はず、畧史を此に挿入する。萩史の中心は、毛利氏である。そこで、豫め毛利氏の事項を述べた。

毛利氏の略系

一、輝元公以前

毛利氏の系は 天穗日命から出て居る、命は 天照大神の御子で、其の御子を武夷鳥命と申し御父子共 大神の勅を受けられて、豊葦原の中つ國の平定に、偉勳

を建てられた。此の命の後裔に、野見宿禰と云ふがあつて 垂仁帝の御宇、埴輪を作り殉葬を止められた爲め、土師の姓を賜はつた。宿禰の十六代目が毛受宿禰で、河内の國毛受の庄に居られた爲め、毛受の宿禰と言はれたのである。宿禰に一男一女がある、男の御子を祖麿と言ひ、女の御子を眞妹と呼ばれて居た。眞妹と云ふ御方が贈従一位和乙繼と云ふ方の奥方となられ、新笠と云ふ娘を御産みになつた。此の新笠と云ふ御方が 光仁帝の后に御立になされ 桓武天皇を御産みなされた。後年御崩れになつた時、大枝の山陵に葬られた 桓武天皇延暦九年に外祖母土師眞妹を追尊正一位を贈り、土師宿禰を改て、大枝朝臣とせられ、祖麿の孫の諸士に大枝姓を賜り、朝臣と稱せしめられた。諸士の子本主と云ふ方があつて、それが阿保親王の侍女を娶られて音人を御産みになつた。此の御方は、嘗て我忠を國家に致す後世必ず大に起る者あらん抑々枝大なれば其の本を害すと云はれ、奏請して大枝を大江と改められた。音人は、博識洽聞 清和天皇の侍讀となられ、參議に任し從三位に叙せられた。それが代々菅原氏と共に文學を以て朝廷に仕へられ、菅江二家と世に稱せられて居た。それから八代目が權中納言兼太宰權師大江匡房卿で、此の方は、學者で兵學にも達せられ源義家に兵法を授け

られた事もある。

それから四代目陸奥守廣元公に至り始めて武家となられ 後白河法皇の院宣を受け源頼朝を佐けて天下を平定せられた。

廣元公の御子が左近衛權將監秀光公で、相模國毛利の庄に居住なつたので毛利と名乗られた。其の子に經光と云ふ方が越後の南條と藝州吉田の庄を保たれた。經光の子、時親の時、吉田に移り郡山の城に居られて以來、代々藝州に住はれる事になつた。時親公の九代目が弘元公で、興元元就の二子があつた。長子興元公弘元公に嗣ぎ、元就公は出て猿懸城に居られた。興元薨せられて其の子、幸松丸嗣がれたが、幼てあるから元就公外から之を輔翼せられた、幸松丸夭折せられたので、老臣議して、元就公を迎へ、其の後を嗣がしめた。元就公幼にして、大志があり且つ祖先傳來の勤王心最も強く常に心は 王室に存して居た。天文十二年大内氏の驍將陶隆房其の主、義隆に叛き義隆克たずして自殺し元就公に遺屬して仇を報せしめんとした、元就公遺書を覽て流涕し 天朝に奏し詔を請けて隆房を誅して以大義名分のある事を天下に明らかにせられた、時に海内其の義を稱し、其の威、關西に震ふた。其の後東征西伐 大友氏を西海に尼子氏を山陰山陽に破

り、親ら戦に臨むもの二百二十一回、僅か三千貫の地より起つて、永祿九年吉田に歸る時其の略有せる所、安藝周防長門備後因幡伯耆出雲隱岐石見の十國及び豊前讃岐の一部の大に及んだ。是より先從四位上に叙し、陸奥守に任じ、元龜二年六月吉田に卒す。日頼洞春と諡す。其後三年特に從三位を贈られ明治四十一年四月正一位を贈られた。公に九男あつた皆智勇長子隆元二子元春三子隆景最も著る。隆元天文十六年家を嗣ぎ父を輔けて軍國の事に従ひ一日も寧處せず。嘗て父公病む時、公、神に告げて其の身を以て代らんと請れた事がある。性仁孝勇敢將士悦服す。從四位下に叙し太膳大夫に任ず。永祿六年不幸父に先て薨去せられ、明治四十一年四月二日正三位を贈られた。輝元公は其の子である。

二、輝元公以後

一天樹公 自天穗日命五十四代(略事蹟に譲る)

二大照公 諱は秀就、幼名は松壽、後稱、藤七郎天樹公の長子文祿四年十月十八日廣島に誕生慶長四年十二月八日從四位下に叙せられ慶安四年正月五日卒去五十七

三泰巖公 諱は綱廣、幼名千代熊丸、大照公の七子、寛永十六年閏十一月二十日江戸櫻田邸に誕生、承應二年十二月十一日從四位下に叙せられ元祿二年四月十七日卒去享年五十一

四壽徳公 諱は吉就幼名元千代丸、泰巖公の長子、寛文八年二月二十一日麻布邸に誕生、天和二年四月六日
 從四位下に叙せらる、元祿七年二月七日卒去享年二十七

五青雲公 諱は吉廣、幼名千之助、泰巖公の第六子、延寶元年一月十二日麻布邸に誕生、元祿七年八月十二
 日從四位下に叙せらる、寶永四年十月十三日卒去三十五歳

六泰桓公 諱は吉元幼名又四郎毛利甲斐守綱元の長子延寶五年八月二十一日日ヶ窪邸に誕生、寶永三年十二
 月五日從四位下に叙せらる、享保十六年九月十三日薨去享年五十五大正六年十二月二十八日從三位を贈ら
 る

七觀光公 諱は宗廣、幼名百合助吉元公の第七子享保二年七月六日萩城に誕生嗣立年十有五享保十五年十二
 月二十八日從四位下に叙せらる寛延四年三月四日卒去享年三十五

八英雲公 諱は重就幼名光之允元房、毛利讃岐守匡廣第十六子享保十年九月十日日ヶ窪邸に誕生、寛延四年
 六月十三日從四位下に叙せらる寛政元年十月七日薨去享年六十五明治四十一年四月二日從三位を贈らる

九容徳公 諱は治親幼名岩之允英雲公の第九子寶曆四年六月十五日櫻田邸に生る、明和五年三月十九日從四
 位下に叙せらる寛政三年六月十二日卒去享年三十八

十靖恭公 諱は齊房幼名義二郎容徳公の第三子天明二年十一月二十一日麻布邸に生る、寛政七年八月十一日
 從四位下に叙せらる文化六年二月十四日卒去享年二十八

十一清徳公 諱は齊照幼名保三郎容徳公の第四子寛政六年五月二十七日從四位下に叙せらる天明三年十二月
 九日櫻田邸に生る天保七年五月十四日薨去享年五十四大正六年十二月二十八日從三位を贈られた

十二邦憲公 諱は齊元幼名豊之允定次郎親著君の第二子寛政六年三月二十四日萩八丁邸に誕生天保六年十

二月十六日從四位上に叙せらる天保七年九月八日卒去享年四十三

十三崇文公 諱は齊廣幼名保三郎清徳公の長子文化十一年五月十六日萩城西殿に誕生、天保元年三月十三日
 從四位下に叙せらる天保七年十二月二十九日卒去享年二十三公職に在る二旬

十四忠正公 諱は敬親幼名猷之進邦憲公の長子文政二年二月十日江戸麻布邸に誕生明治四年三月二十八日
 薨去享年五十三明治三十四年五月十六日正一位を贈られ大正四年十一月十日別格官幣社に列す

十五忠愛公 諱は元徳幼名驥尉徳山毛利兵庫頭廣鎮十男天保十年九月廿二日徳山に誕生明治二十九年十二月
 二十三日薨去五十八明治二十八年六月十七日從一位に叙す

十六元昭公幼名興丸 元徳公の長男慶應元年二月七日萩八丁邸に誕生大正五年七月十日正二位に叙す

朝廷と毛利氏の關係

元就公は、英雄で、先祖傳來の勤王心は、最も厚く、尋常の武士と異り 王室が衰
 へさせられた時、天勅を請ふて、逆臣陶晴賢を誅戮し、以て天下に大義名分のあ
 る所を明らかにし、益々 皇室の尊きを知らしめられた。

其の後 正親町天皇御踐祚の時、朝廷は、御即位の式を行はせらるゝ事がむつか
 しいから、元就公は、國清寺の住職惠心と云ふ僧を便にして、御即位料を朝廷に
 献納された。そこで 朝廷は、大禮を擧げさせられる事が出来た。其の後も石州
 の銀山を朝廷へ献納せられた。それは、毛利家が探掘して、其の收入を精算し、

献納せられたのであるが、それでは、私有物を献納するやうでいけないと云ふ所から、綸命で代官職を銀山に置いて下さいと、願つた書面が今に存して居る。元就公薨去後も、隆景君と元春君とは、其の志を継ぎ銀山の収入は、一文も私せず、盡く献納せられた。

前に述べた、御即位料を献納せられたとき、勸修寺家(公卿)の手を経て献納せられたものだから、其の以來奏聞でも、献納でも、何事によらず、総べて勸修寺家の取次を願ひ、献納物に對しては、即日女房奉書と云ふものを賜はる事例となつた。徳川の世となつても、毛利家よりは、毎年歳末歳首には、必らず物を朝廷に献して、即日女房奉書を賜はる例が存して居た。當時武家傳奏と云ふ役目が、朝廷にあつて、武家が何事か申上る事があると、武家傳奏の手を経なければならぬそれを、毛利家は、武家傳奏の手を経ず元就公以來の特例で、勸修寺家の手を経て、何事も、出来たのである。又徳川時代には、諸大名が 朝廷と直接の關係を持つ事は、嚴禁であつて、入京は、無論出来ぬ處が、毛利家丈は、右の通りの特例で、歳末歳首の献上物を爲すのみならず、江戸往來の途中、京都に入ることが出来た。是れは、他家にない毛利家の特例である。隆元公の子、輝元公も心を

王室に存せられて居たが、關ヶ原の敗北で僅か二州の領主とされた爲め 朝廷への奉仕は困難で、昔日の如くなることは出来なかつたが吉凶の大禮年末年首に献上するを恒例とし、其の恒例は二百有餘年の間續いて來たもので忠正公の勤王事業も偶然ではなく先祖傳來のものである。

天樹公の略事蹟

梅かかは雪にむもれぬ梢かな

天 樹 公

天樹公、幼名、幸鶴、諱は、輝元、常榮(隆元)公の長子、元就公の孫である。天文二十二年正月二十二日吉田に生れ、一歳の時、父を失ひ、元就公に育てられ、元就公薨去後は、元春、隆景二叔に佐けられた。

公は、勇武忠直、頗る父祖の風があつた。長ずるに及び、諸將群臣庶民皆其の政に悦服。十三才の時、保傳に向ひ、吾幼弱と雖も定省の志を展べ、且つ先鋒となり、諸將を激勵せんと語られた。其の初陣は、永祿七年四月又始て獨り軍事を總へられたのは、元龜元年正月。元龜元年から慶長二年迄、大小戦陣百有餘度、尼子氏滅亡後、信長と雄を争ふ數年、終に屈せず、其の裨將羽柴秀吉も頗る逡巡の形があつた。天正十年高松の役、信長、秀吉をして兵八萬を率ゐ、高松城を圍ま

しめ水を城に灌く、偶々霖雨連日濁波熾々湖海をなし、城の没する旦夕にあらんとするに際し秀吉、僧惠瓊をして、清水宗治を自裁せしめば速かに和を講せんと説かしたるが、義に依て肯せず、僧直に宗治に説く、宗治義に依り自裁した。是に於て、和議成る。秀吉兩軍對峙の現形に依り、北は伯州馬山、南は備中甲部川を境とし、毛利氏の領域とした。其が安藝、備後、周防、長門、石見、出雲、隱岐の外、伯耆及備中の一部に涉り、百十二萬石と稱せられたのである。其の後、信長弑せられたと聞き、諸將は秀吉を疾撃せんと云ひしが、公は盟を守り却て秀吉を援く、秀吉其の信義に悦服し、以後交益厚く、力を併せて、四方を經營せられた。四國征伐には多數の兵を出し、九州征伐には、前軍の總督となり、諸城を破り、更に土賊を平げられた。

天正十七年四月累世の居城、郡山城狹隘に付五箇莊に地を相し、新城の建築を期め、廣島と名け、同十九年竣成入城、同十八年秀吉の北條氏征伐を大に援け、文祿元年の朝鮮征伐には、公其の總督となり、自ら兵三萬を出して大に功を立てられた。秀吉五大老を置くや、公其の列に加はり、關西三十三ヶ國の政令を總べ家康と共に肩を並べ海内封土の大にして家聲の高きこと、毛利徳川兩氏に比肩する

ものはなかつた。

慶長五年六月秀頼急劇の命に應じ、秀吉の遺托盟約を守り、奉行等の請に應じ、大阪西城に入り、秀頼を保護せられた。所謂關ヶ原の役は、此の時点で、公が西軍を援けられたのは全く遺托盟約に本く義の爲めで成敗を以て論すべきものでない。公の

我内府是迄聊かの聲もあらず、且つ去歲神文を取易はし、兄弟を以て交を結ぶ、奈何そ、今更隔心すべき、然れども、太閤の臨レ終て我に托孤の言、今猶耳に在り(中畧)我一日逆名を負ては死して何の面目か太閤に調せん、且時の勢を以て、弱を去て強に就く事は、先公方の爲し玉はさる所なり。(下畧)(一齋留書)

の言は正に義の爲め八州を堵せられた事が分る、而して、其の敗因は、蓋し秀元秀秋約を踐ます、秀秋は反て、西軍を攻撃し、秀元は、望觀して動かざりしに依る。此の役後、家康は、封を僅に防長に削減した。

同年公家督を大照公に傳へ、同八年伏見より國に就き、假に山口に居り、九年正月萩城を築き同年十一月十一日萩城に入られた。處が僅か二州の地を以て、家國を維持し、譜代の士卒を養ふに足らざるは勿論、江戸及大阪城土木の役を課せられ、費多端にして、國計缺乏、而かも、戰爭の餘、士氣剛悍上を恨みて人情大に

安せず、騷擾の勢又察するに餘あり爲に公の苦心焦慮甚しく、其の簡牘、今に傳ふるもの數百通に及ぶと云ふ事である。文祿四年正月六日從三位に叙し、寛永二年四月二十七日薨す、享年七十三、公在職六十年足利、織田、豊臣、徳川の諸世治亂興廢、變遷常ならざるの時元就公の餘烈ありとも一步を誤れば、足利、今川織田、北條、大内、尼子、大友、宇喜田の家國を失ひしが如き虞れありしが、公の拮据經營と容忍の徳は、能く我藩百世連綿有土の藩主たるを得せしめられ、後年忠正公の回天事業も、此に本づくものであるは勿論秀吉を援けて、四方を平定且つ經營せられたのは、秀吉の

普天率土詔勅に違ふは、我得て之を討す、王事に勤勞し、臣節を盡すは、我得て之を存す。(北條氏政に贈りし書)

の尊王に共力盡瘁せられたので又朝鮮征伐に總督として盡力せられたのは秀吉の
余志無レ他。只顯ニ國威於萬里之外ニ而已矣。(天正十八年十一月朝鮮王に答へた書)
 の皇威の發揚の爲めであつた。且つ、公に於て何等求むる所なきは前述の如く九州を賂して迄義戰をせられたので分る斯の如く公の信義は勿論王事に貢献せられた處は誠に大と言はねばならぬ。

輝元公勤王事蹟一斑

畧事蹟に述ふる外左の勤王事蹟がある。

- 一元龜二年六月二十六日石州温泉津銀山は、永祿六年全地を朝廷に献するを以て元就公在世の日は他事に用ゆるを許さず、今後も、此の定制に従ふべく定められた
- 一天正九年七月五日、石州銀山本年貢献の計を録し、之を朝廷に上られた
- 一天正十六年七月廿五日、天皇に太刀一口白銀百枚を献し、女御に、白銀一折を、准后に全一折を献上。
- 一同八月廿八日 天皇に太刀一口、金萬匹を献し、院の御所に、金裝太刀一口金萬匹を准后に金三千匹を女御に金三千匹を献上。
- 一慶長九年八月四日銀子三枚を女院に献上。
- 一慶長十一年十二月二十四日銀子百兩を禁中に、同五十兩を女院に献す。君夫人より銀子二枚廿帖二面を女院に献上。
- 一慶長十六年三月禁宮を造營。
- 一慶長十八年正月元日 天皇に太刀一口を献上。
- 一慶長十八年十二月廿九日白銀十枚を 天皇に、同五枚を女院に、同三枚を女御に献上。
- 一慶長十九年正月元日太刀一口白銀十枚を 天皇に二十帖一面を女御に献上。白銀三枚を女院に献上。
- 一元和二年三月二十一日禁中土木の工あり、金を國中に課し以て献上。

歴史の大略

靈境長門峽を流る、玉の如き水は、晝夜注いで、此の土を養ひ、仙堺鐘乳洞穴から吐き出さる、靈氣は、壯嚴な青海島の海風と、日本海の濤聲と共に來つて、此の地を育つ。更に此の地は自ら樹木に富み、山海の風光佳絶で、縦令これを導く偉人がなかつたとしても、地そのものが、正氣鬱結、必ずや、正大雄偉のものが出來なくてはならぬ。果して、如何なるものが出來たか、以下大要を述べて見る。

毛利氏以前

毛利氏以前は、しつかりした舊記を見當らない。社傳寺記に據ると。

神社佛堂の創建及再興 桓武天皇御宇延暦年間(今より千二百二十年以上前)に月輪山觀音寺、大同年間(千二百數年前)に、春日神社、金峯權現社、玉江觀音院、弘法寺、南明寺、龍藏寺、三千坊弘仁年間(千二百數年前)に、小畑白山權現社、延喜年中(約千二十年前)に永福寺、文治二年(七百五十數年前)に、金谷天神社、仁治四年(六百八十數年前)に、椿八幡宮、建治弘安年間(六百四十數年前)に、與牧權現社、永享年間(四百九十數年前)に、享徳寺、永正年間(四百二十年前)に、永照寺、天正年間(三百四十數年前)に、人丸神社、永祿年間(五百六十數年前)に、光山寺、庚申坊、天正年間、諏訪明神社の再興、天文年間、常念寺、田中荒神社、二ツ森荒神社、鶴江荒神社、長藏寺等が出來た。

勤王事蹟 孝徳天皇御宇文化五年正月椿八幡宮の南谷、麻山から白雉を獲て、朝廷に献上し、(麻山には異説あるも全記に信を置く)又 聖武天皇の御宇天平年間、南都大佛創建の時、當地より白牛を牽出し、大木大石の運送を勤しめたといふ事である。

人物の來往及在住

弘法大師 大同年間歸朝の際、當地に立寄り弘法寺を建て

逆髮皇子 延喜年間御在住、一字造立、逆髮皇子供奉の隸人として、武春、守永、清章、實利、定香、信方な

さいへる家ありと云ふ事で、守永、信方の兩家は連綿子孫繁昌せりと、萩八江圖繪に見ゆ。

佐々木四郎高綱 仁治頃長門守護職として、當地に來り、八幡社等を建立。

北條上野前司直光 萩故實未定之覺に依ると、次に述ふる吉見正頼以前指月山下に、北條上野前司直光

の居城があつたといふ。

吉見氏の別墅 輝元公が、指月山下に築城せらるゝ以前は吉見正頼此の山下に、別墅を構へて居た。吉

見氏は、石見鹿足郡津和野三本城主で其の先は、源範頼から出て居る。

之に依て見ると、毛利氏築城以前は、以ての外の田舎(長門)と云はれて居たに拘らず、著名な社寺でも前述の如く多數であり、且白雉及白牛の事蹟の如き、祭祀の道、孝敬の義に依て、惟神の道に、交通し同化し、勤王精神の萌芽が野芹の誠に顯はれつゝあつたものと思はれる。

毛利氏時代

萩の生命は、大義であつて、終始一貫易る處はないが、其の生命の動き方は、時代の缺陷に對せられて居る。輝元公の防長移封以前は、皇室に對する忠節は勿論、兵亂の鎮靜、逆賊の誅伐、義戰、遺孤の補佐、孝道、等に顯はれて居たが、關ヶ原の戰後即ち萩築城以後は、天下は、先づ大平となつたから、自ら其の趣を異にする。即ち六州削減に依る財政其の他の困難があつたから、其の整理回復、内政の整頓、改革、文武の振興、充實、進で尊王の大義を貫徹する爲に大發動をなし、王政復古の大業を奉賛し得たのである。今輝元公以降崇文公に至るまでを培本時代とし、忠正公時代を發現時代として述べる。

培本時代

輝元公時代

慶長九年から
慶安二年まで

輝元公は、慶長五年隱居せられたか、藩政は其の後も依然見られ、秀就公は、慶長十六年始めて國に就かれた。萩城の開創 慶長九年十一月十一日輝元公始て萩城に入られた、之を慶長の御打入といふ。之が萩の生命が賦與せられた誕生で、萩人の最も記念すべき日である。關ヶ原戰後、毛利氏が、防長二州を領するに至つて、從來の居城を廣島より防長に移さねばならぬ事となつた

そうして、藩主輝元公は、慶長八年八月二十一日國に就き、假に山口覺皇寺に假寓せられた。そして居城を何れの地に定むべきかに就き、三田尻の桑山、山口鴻の峯、萩指月山の三ヶ所が數へられて居たが、家康の許を得て、九年一月要害堅固の萩の指月山に、定められた。そうして三月工を起し十一月輝元公山口より萩に移り、常念寺に假寓せられ、同月の吉辰に、未完成の萩城に移れた。工事は、後尙繼續し、同十三年六月全部落成した。

城は詰丸(指月山の頂上にあつた)本丸(山の南麓東西百十間南北八十間)二の丸(東西百五十三間南北五十八間之より内部を一般に御城内と稱す)三の丸(三の郭の内にて堀内と稱す)より成つて居る、三の丸は、東西九町餘餘南地六町餘で、本丸天主閣は、五重東西十一間北南九間。

爾來萩は、大藩の城下として漸次發達し、遂に戸口も今に倍蓰する大都會となつたが、敬親公の時、攘夷期限が文久三年五月十日と定り、長藩は其の實行を爲す事と爲つたから、萩城は何時大砲を打込まるとやも知れぬと云ふので、忠正公父子は、文久三年四月十六日山口に滞在せらるゝこととなり、後元治元年十月三日又萩に歸城、慶應元年二月二十七日公は山口に行かれ、同三月二十六日萩に歸城、四月二十五日山口の茶館に入り、其の後屢歸城せられたが、慶應三年二月十三日愈山口を以て一藩の根據地と定められ、山口は、爾後二州の中心となつた。萩城は、明治四年解除せられ萩は漸く勢威を失ふに至つた。

寺院建立 慶長九年から同十七年まで 妙悟寺、周慶寺、海潮寺、滿行寺、長壽寺、洞春寺、妙玖寺、秀岳院が出来た。之は我國特有の崇祖の發現である。

檢石 慶長十五年三井但馬守元信藤田豊後守元連をして、防長の檢石をなさしめられた處、五十三萬九千二百八十六石七斗八升五合あつた、閣老本多正純の議を容れ、公稱を三十六萬九千四百一十一石三斗一舁五合とせられた。

神社造立 元和六年伊豫八幡を勸請造立、敬神の發現。

財政の整理 六州削減の結果、財政最も困難となつたので、輝元公父子、毛利秀元及益田牛庵に命せられ、爾後十有餘年を経て、金四千貫の藩債を償却し、更に城中の倉庫に非常軍用貯金を積むに至つたのが、寛永年間で之が毛利家寶藏金の起源である。

又全年間修補金として、諸勘場の不用品賣却金を以て豫算外の支出又は豫算の不足を填補する財源に備へた。

隱居所 元和二年萩城内に輝元公の隱居所が出来、公は益々修養に努められた。殉死 寶永二年四月二十七日長井次郎左衛門元房輝元公に殉死した。

秀就 公 時代 寛永二年から慶安四年まで

寺院建立 寛永四年に、天樹院全八年に清光寺が出来た。

橋本大橋 寛永十六年架設或は元和二年とも云ふ。

宰判設置 慶安三年防長兩國を分つて十八宰判とせられた。併し萩は當島、濱崎の二宰判になつて居た。

戰陣 島原に天主教徒蜂起し、秀就公寛永十四年十一月天草に出兵。

殉死 慶安四年正月六日、小川兵部少輔就克(三十二)信常右京亮就實(三十二)山名内膳正就行(二十五)村上監物就正(二十六)祖式主計就好(二十六)公の逝を悲しみ殉死し、同九日當役梨羽頼母助就云殉死した、就云の死せんとするを聞きて、七日より各組の諸士及商賈等誓紙血判を以て、世子若年故七ヶ年の存命を求むるも、就云は、きかなかつた。(年三十八)就云の家臣山本又兵衛氏忠又就云に殉死した。

屠腹 全年全月十二日久保五郎右衛門宗久故有りて家人を放ち、石州に在つたが公の訃を聞き、立歸り瓦町明圓寺で、屠服した。

有中にわきて仕ふる君なればみの はてまでも頼む行す

宿々三十餘年夢一陣春風一日花

元來無變君臣道死後生前更不離

人しれぬ深山櫻もさけは又はるな

へたてなき君が心にさそはれて

梨羽頼母介就云

小川兵部少輔就克

信常右京進就實

山名内膳正就行

村上監物就正

たかへす花そちりける

明士の供をするそ武士

あさの緒をうむより染て引糸のおもき 情にきる、玉緒
咲時は武士の數にはあられどもちる にはもれぬ山櫻かな
高根より吹來る風にさそはれて 山本までも花そちりけり

祖式主計頭就好
久保五郎右衛門
山本又兵衛

綱 廣 公 時 代 慶安四年から
天保二年まで

寺院建立 承暦三年に大照院建立
神社造立 明暦元年に住吉神社造立
財政整理 榎本遠江老職となりし時は、藩債嵩み、納戸倉の貯藏金殆んど空乏依
つて、遠江は益田牛庵の志を繼ぎ、經營數年遂に明暦三年寶藏を建て、現金三千
三百貫を藏することを得た。
萬治制法 萬治三年九月十四日藩祖元就公以來の遺法を祖述し、藩政の綱領より
士卒の風紀、吏員の規律、民治の体要に至る迄、概括網羅せる藩法三十三ヶ條を
編し、尙細目二十八項を副して、頒達せられた。後世萬治制法と云つて、名高い
のは之である。
鳥居奉納 寶文元年出雲大社に、鳥居奉納。
藩札發行 延寶五年七月藩札發行。

其の他寛文元年に金銀判座を設置し、全二年十二月航海船舶の爲め、燈籠堂を鶴
江臺に建設。

吉 就 公 天和二年から
文祿七年まで

給地附與 貞享四年、藩臣の給祿を給地に替へられた。
新堀堀割 全年二月二十三日、萩平安古河岸端から唐樋町まで、堀割が出来、享
保二年萩江向附近の溝河開鑿。
寺院建立 元祿四年東光寺が出来た。
山田原欽の諫死 僧惠極吉就公の寵を得、公爲に東光寺を開創せらる、規模極め
で大、原欽之を屢々諫めて屠腹した。實に元祿六年七月十四日で、年二十八後其
の忠死を憐み、東光寺の規模を縮せられた。

原欽は、穎悟夙達、藩主に事へて忠勤一日も怠らず、父母に至孝、友に至信。人苟くも、學に志す者あら
ば、欣然之を導き、疑を必ず解く、爲に防長の士大夫競つて之を師とし文化大に行はれた。
世上其の博覽強記穎悟夙達を知るも、誠忠壯烈を知らず。原欽は鬱積せる萩の正氣の代表者であつた。
其の後、防長二州か文武を以て天下に冠たるも、更に二州を擧つて、誠忠日月を貫しも、確かに原欽の
力が大に與つて居たのである。

吉 廣 公 時 代

元祿七年から寶永四年まで

財産整理 元祿八年七月、三年間の節儉令を出し、又日用瑣屑の省略條例數條を發布達磨 萩享德寺の達磨、元祿十年閏二月に出來た。

神社造立 元祿十一年四月、萩城内二の丸に、天神社造立。

松本橋 元祿十一年九月二十六日架設。

寶永の儉政 寶永年間、儉政命を布き、藩主の交際日常の供給に節儉を加へ、士に半知馳走出米を課した。

觀音堂建立 寶永元年、大照院隣接の山巔に、觀音堂建立。

開鑿及築堤 寶永三年濁淵新河開鑿成就し、延享元年萩川島から石屋町に至る數百間の溝渠が出來、寶永三年三月萩橋本川の堤即ち川島から河添に至る長さ百八十餘間の堤が出來た。

吉 元 公

寶永四年から享保十六年迄

救米藏設置 寶永六年十二月吉田町北詰に非常救米貯藏所を設置。

寺院建立 寶永七年頃、青海に、西法寺建立。

儉政 寶永儉政未だ功を收めざるに依り、正徳三年三月又儉政令を布き、藩主自

更に

一、追廻稽古場元又内士にても志有之面々は勝手次第可罷出候事云々

一、百姓町人たり共講釋等承りに參度志有之ものごもは是又勝手次第着着用可罷出候事の定があつた。以て、如何に文武の奨勵に熱心であつたか分る。

閱閲録 享保五年六月から藩臣の諸譜録調査を始め全十年に完成。

辻番所及鐘樓 享保九年辻番所及鐘樓設置。

宗 廣 公

享保十六年から寛永四年まで

元文儉政 元文元年又儉政令を出し、老臣山内廣道諸種の法を講じ、五年にして寶藏の空乏を充たし、銀千貫を貯藏するに至つた。而して軍用若くは國家危急に際する外出さざること定めた。

救恤 享保十六年より十七年に亘り、西國饑饉國中飢民多かつた爲め救恤を施された。

築堤 上利根川(武州幡羅榛澤兩郡より上州新田郡に至る二十二里間)の築堤を宗廣公に於て、寛保二年十一月二十九日から全三年三月二十八日まで、作られた。總費額二千九百八十四貫目

餘。

重 就 公

寶曆元年から天明二年まで

ら膳部を減じ、絹帛を廢し參勤の隨員を減じ、公子姫の供給を削り、士卒の馳走出米を輕減。

唐船砲擊 享保二年及全三年中幕令に依り、屢々唐船を砲擊し、全十一年八月須佐浦に又唐船を砲擊。

文武家業人優遇 享保二年六月十六日明倫館造立を機とし、文武の家業人の班を進め、祿を増加した。蓋し文武家業人は遠近附寺社組位で、祿も少く士よりは僧道巫祝の如く平士を下るものと見做され自ら其の世職を恥づる狀があつたからである。而て其の後は、藩中の少壯競ふて學校に入るやうになつた。

明倫館開校 享保四年正月十二日開校式を舉ぐ、當時文武修業順序に就き訓令せられたる中に、

一、諸藝稽古之事心掛次第たりといへ共諸士として文武之道相學事勿論候就中文學の儀幼少之内より精に入不申候而は維成立候間十歳の前後より素讀の心懸十五歳より專文學に志し身力出來之後は武藝に志し、文武ともに四十歳に至り候よては別而可被相勵事專要候云々又

一、諸稽古共に定日の外稽古場に出合稽古候事勝手次第たるべく候云々

一、於稽古場大小身共諸士中之集會たり云へども、衣類其の外諸事はれかましく一向取締候に不及候云々

寶曆儉政 諸役所用の米銀を半減、士卒に四ヶ年間半知を課す。

均田法施行 寶曆十一年から全十三年に亘り、土地肥瘠廣狹變革せるを檢し、其の餘を擧げて其の失を償ひ、負擔を一にせられた。

日章舎 寶曆年間萩新堀に、心學場日章舎開設。

撫育仕法 寶曆十三年五月十四日均田法によりて、護た所は、別途に蓄へ、軍用の匱缺を償ひ、後又凶荒の賑卹及幕令課出の巨金に備つた。右撫育金の外、江戸の方に於ては、穴藏を設けて、穴藏金を貯へることになつた。

撫育局 明和元年十月に建設。

築堤 明和三年六月濃州、勢州川の築堤を作られた。費額五千百七十九貫目。

藥園 明和三年三月萩八丁南園屋敷内に設けられた。

燔硝藏 享保十年七月萩城内の燔硝藏を除き、玉江に置き、明和七年小畑に移された。

絹織所設置 明和年間八丁南園邸内に設置。

藍座 明和年間藍座を設置。

貯藏倉 安永七年に貯藏倉を設置。

日光山修理 安永七年正月、日光山を修理費額一萬四十三貫餘。

治親公 天明二年から寛政三年まで

築堤 關東伊豆川築堤のため、銀五萬五千三百六十六兩二步永百五十五文五分納金。

靖恭公 寛政三年から文化六年まで

綿種栽植 寛政年間綿種栽植。

日光山修理 寛政十年、日光山修理のため納金六萬九千八百二十七兩。

大砲家招聘 文化三年大阪浪士大砲家萩野隼雄を聘用砲術指南を命せられた。

齊熙公 文化六年から文政七年まで

水軍練習 村田清風の勸により、文化九年九月四日全十二年八月十七日萩海に合

武三島流戦法を演習。

關東川築堤 關東川築堤に代へ納金四萬七千六百四十五兩三分永二百二十文八

分。

二孝子 萩香川津農長七の男權藏利吉の二人其の母湯藥の効なく死に瀕せるを見、共に金昆羅社に七日の期間内に冥助を祈る偶々満願の日大風雪遂に途に斃れ

た。時に權藏二十二、利吉十六。

神器陣習練 文化十四年二月二十六日外寇防禦の目的で、神器陣を萩城下菊ヶ濱に習練した。神器陣と云ふのは、(明の趙子禎の著す所の神器譜の是自衛殺)清風等が名けたものである。総員約三百人、隊列を造り、海上に外艦を擬して演習し、更に海濱に敵兵と接戦を擬して習練した、以後毎年一回、必らず行ふ例となつた。

齊元公 文政七年から文化六年まで

習練場設置 文化九年五月二十八日神器陣習練場を東濱崎に設置。全十年四月十日一日稽古始。

神位記 文政十二年十一月二十日仰徳大明神位記下賜。

上野靈屋營繕 天保三年十二月二十七日上野靈屋營繕のため、納金五萬四千二百三十三兩永百三十三文四分。

和姫入輿 文政十二年十一月二十七日、世子齊廣、將軍家齊の第十八女和姫を娶られた。

崇文公 (天保八年)

天保七年六月十一日大雨洪水で八丁堤破れ市中過半水に没した。

亞聖 林述齊曾て文崇公の住居を望み彼の屋の下に方今の亞聖ありと嘆賞せりと云ふ事である。公、天資聰敏弓馬術に勉め、特に文學を好まれた。天保二年公江戸にあるの日、内書を清徳老公と邦憲公に上り、大に俗吏の弊を論じ、躬ら非常の節儉を行ひ、陪従の士を惠まんとする意を告げ、身綿衣を服し膳を減じられた又公の書懷の詩に、以孝治闔封と云はれ其の死に臨では、特に遺命し、我を高所に葬り長く萩市を眺めしめよ、我死して民福を計らんと云はれたと云ふことである。然るに公早世在職三旬志の萬一も施され得なかつたのは闔藩の痛惜する所であつたが徳化の及びし所は實に多大である。

發現時代

敬親公

天保八年から
明治四年まで

此の時代の萩の歴史は、輝元公以降代々藩の主従が、刻苦精勵、以て養ひ來つた大生命が、百花一時に開く有様で、忠魂義膽の人物が輩出發動して、勤王事業に實を結んだものである。其の間寸毫の間なく大義名分を中心に、血と涙で終始し、しかも其の事蹟は、錯雜して、一日一刻一言一行悉く脈絡を爲して居るから、省

略すれば、萩史の真味は窺ふ事が出来ない。と云ふても此の小冊子では、大略を述ぶる事さへ許さぬから、眞の骨だけ摘む。

準備

眞の至誠は、必然智に於ても、行に於ても、徹底を要求する。藩主忠正公は、此の二つの徹底を謀るが爲め、財政の整理、文武の振興、人材の養成、人材の登庸内政の充實、外警の設備、兵器の獨立製作、其他衛生、産業、工藝等それからこれと遺憾なく力を費された。其一二を擧ぐれば

財政の整理 天下の人傑村田清風を抜擢して清風の所謂八萬貫の大敵を退じ、進んで、勤王事業の資を増大し、文久三年には金壹萬兩を献金せられたのである。節儉 古、大名が襲封後初めて國へ入るのを初入國と稱し、餘程華美を競ふものであつたが、忠正公は、家督繼承後、始めて入國せらるゝとき、木綿の紋付羽織で、萩に入られた如く、自ら絹布を廢し、土服竝に女子に絹布を禁せられたのであつた。

文武の振興 として最も著しいのは、萩町の中央江向に地を撰び、規模を増大にして新に明倫館を改築せられたのである。其の他好生館敬身堂等が設置せられ

た。更に天保十四年萩城より一里東の羽賀臺に、軍勢三萬五千餘人、馬匹二千餘を動かして、大操練を行ひ、二百餘年間の大平の夢を破つた。

外警の設備 弘化元年阿武郡大津郡豊浦郡の海岸に、砲臺を築き、嘉永三年十月十日萩城及封内沿海守備の兵數を三萬三千九百七十人、大砲數五百五十八門、小銃數一萬五百六十九挺其他を定められた。

姥倉堀割 今日まで恩惠を被つて居るのは姥倉堀割で以前屢々被つた水害が堀割後は全くなくなつた。

中心人物

此の時代の歴史の中心は、藩主忠正公で、更に村田清風と吉田松陰が、經緯を爲して居ると思ふ。

忠正公 は純誠純忠常に元治二年一月三日隊長に與へられた「皇國御爲め二州は如何様に相成候共其の職を盡し候積りに付云々」の大決心を以て、其の本を養ひ維新回天事業に傾注せられ、しかも慶應三年九月隊長參謀に與へられた親論文に「功は必二藩に可讓事」とある如く、功は他藩に讓る事を以て念とし、飽迄公明正大であつた。

清風 は其の十八歳の時富士山を見

來て見れば聞くより低し富士の山 釋迦も孔子もかくやあるらん

と詠せし如く、又横井小楠も一言の下に屈服したと云ふが如く、餘程の卓見家で常に皇威を字内に輝すを理想として、藩政の改革、財政の整理、人材の登庸、外患の防備に頗る貢献した。

高千穂峰有三神戟。即是億兆日本魂。武内時宗持此器。築城六十六州藩。

松陰 は、幼時、其の父が文政十年の詔書を拜し、沐浴衣を更め、遙かに、京都を拜し 王室の式微、武臣の跋扈、終に此に至れるかと泣いた程の家庭に教養せられ、「二州は滅亡に歸するとも、尊王の大義を貫かん」と云ふ一心と「至誠にして動かざる人はない」との信念と生きを以て、維れ誠、維れ忠、維れ血維れ涙で一貫し、藩政府及門弟を尊攘に鼓舞振作したるは勿論、闔藩の人士及他藩の志士を尊王に誘導奮起せしめた偉大な勤王家であり、經世家であつた、而て其寸言隻語と雖も悉く至誠の發動で天地を撼がすの概がある、一二を示せば

志

天地大徳。君父至恩。報レ徳以レ心。復レ恩以レ身。此日難レ再。此生難レ復。此事不レ終此身不レ息。

爲二人所不能爲。言二人所不能言。舍余無其人一也。舍是無余事一也。

天下大物也。非一朝奮激所不能動一矣。其唯積誠動之。然後有動耳。

而して清風の没後は、其の系統即ち周布政之助等に於て、藩政に執掌し、松陰の没後は、其の養成した、久坂玄端、佐世八十郎、高杉東行其の他の門弟に於て、尊攘に奔走盡瘁した。高杉東行は勤王の士たるは言ふ迄もなく英雄中の大英雄であつた。

密勅 降下

安政五年八月二十一日密勅が甲谷岩熊に依つて、萩城に齎らせられた。其の密勅は

小子熟天文を推考するに、十一月上旬迄之内、善惡吉凶は不辨と雖も、國中頗騷擾之兆有之、蠻夷覬覦之時節、帝都之警備未全備、事情急迫にして、心中私に深く苦惱す、有沈勇忠烈之人て、事を他事に屬し密に衆を攝州之邊に潛居し、若有急變は、應機而速に内裏を守護し、奉安勸慮者、誠以て可謂天下之忠臣、然に未得其人憂國難て忘寢食る何日か奉休勸念む悲哉々々

南呂初五

署名も宛名もない、夫れは、萬一途中で幕吏の爲めに捕れた時の用心に、態を判らぬやうに書かれたのである。

豫て君國の爲めに盡さんと思ふて居られし處へ、此の密勅が下たので、深く感激せられ一應内奏使を上して、叡慮を安じ奉られた。

忠正公は、密勅に對し、奉答の爲め、周布政之助を京都に遣はす事に決して居れた處へ、又八月二十四日京都留守居役福原興三兵衛急使を萩に馳せ、水藩及我藩以下十四藩に賜ふ所の勅書を齎らし、且鷹司右大臣の密書を傳へられたから一緒に奉答せられたのである。

それから文久元年三月公武一和航海遠略策の方針を定め

公武一和航海遠略策とは、幕府の如く偷安息戰て、開港するのでなく、先づ國內を堅め、開鎖和戰の權は、我に執つて航海萬里五州各國を横行し、神州固有の忠孝を体とし洋夷功利の説を用とし 皇威を宇内に輝す云ふのである。

長井雅樂に朝廷幕府間を周旋させつゝあつたが、藩内勤王黨即ち吉田松陰門下更に諸藩の志士は、攘夷論で、猛烈に長井を攻撃し、更に長州の周旋まで批難したので、公は京都河原町の藩邸で會議を開かれた。其の時色々説が出たが結局君臣湊川の決心で朝廷の御意向に従ひ、即今攘夷の方針と決して、周旋せられ、漸次幕府を矯正して遂に悉く勅命を奉せしめられた。

最も痛快なのは、是迄幕府は、不遜で、臣と書いた事のなかつたのが、臣家茂と書き又是迄徳川氏の制度で 聖上は禁中以外へは玉歩を御出しになる事が出来なかつたのを、文久三年三月十一日下上加茂社

へ、御参拜になり、徳川時代始めて御出し申したので鳳輩を拜んだ京都市民は、感涙に咽び、長州様の斡旋だ云つて居たそうである。そうして將軍家茂も御供をして、君臣の分が十分に立つたから、勤王志士は大に喜んだ云ふ事である。

而して攘夷期限は文久三年五月十日と定つたので、天下に率先して、馬關で攘夷戦を開始した。然るに、他藩では一も攘夷を實行するものはない。そこで天下の人心の向ふ所を知らしむる爲め、朝廷に大和迄、御親征を建議し其の御許諾があつた處が、幕府側で會津藩の者と薩摩藩の者と密議し、勤王黨を朝廷から排斥する運動をした。

逆 境

其の爲め俄に御親征は中止となり、文久三年八月十八日會津兩藩の兵を禁内に繰り込み三條公以下七卿の國事掛を免し、其の參内を停止せられ、且長藩の堺町門の警衛を免せられた。そこで、長藩の勤王黨及他藩の志士は七卿を奉して一應長州に下つた。此の時久坂義助が「世は刈薦と亂れつ、云々」と作つた歌がある。間もなく七卿の官位褫奪、毛利宰相父子の入京を禁せられた。そこで、長藩の勤王黨及他藩の志士は大に憤慨し、是非君側の姦魁を斬て、忠正

公父子の冤を雪ぎ勤王の大義を貫んと云ふ議論が沸騰する。それを、麻田公輔（周布政之助）が時機を待てと押へる。處か七卿迄が、矢も楯もたまらぬ勢である。文久三年十月に澤宣嘉卿は、三田尻を脱走し、騎兵隊の總督河上彌市其の他壯士數十人も従つて脱走、諸藩の同志と共に銀山に義兵を擧げられた。それから、長藩では薩船の砲撃をやる、又來島又兵衛等志士は待遠しくてならぬ、其の内志士は大兵を率いて、遂に近畿に走り、七卿并忠正公父子の冤を雪ぐべく哀訴歎願したが、幕府は却つて撃退を令した。そこで來島又兵衛は大に怒り、姦魁を斬つて君側を清めねばならぬと主張し、久坂玄端、宍戸左馬介は、涙を流して留るけれども聞かず、それから、討賊の檄文（即ち會津肥後守は主上を擁護して忠義一途の三條公等主下さるやうに云ふことを書いたもの）を諸藩と所司代に送つてそれから、京都の變が惹起し、結局敗北に歸した。それが元治元年七月十九日の事である。此の戦で、來島は討死、久坂寺島は忠正公父子に申譯がないとて自刃した。是に於て、幕府は長州征伐の令を發し、尾張大納言慶勝を征長總督と爲し、三十餘藩に出兵を命じた。

内憂外患（征長令）

其の處へ、英米佛蘭四ヶ國の聯合艦隊が馬關にやつて來るとの報があつたが、京都に澤山の出兵をして居る處であるから、外敵を引受けるは得策でない、假りに和を講せんとし議が起つて居る内、京都の敗報が來る、そこで、種々會議の結果忠正公の親書が出た。(其の意味は、是迄天朝幕府の命を受け攘夷をしたが、其の攘夷も、一已から、此の際權道を以て暫く外患を緩るめ、内に) 元治元年八月四日に、英米佛和の聯合艦隊十八艘が馬關に來た。我が藩の各砲臺では、大に勇んで待ち構へて居る、藩政府の方では、使を派して和議をするからと諭すけれども、容易に聞入れず、其内遂にドン／＼大戦鬪となり、我が兵も能く戦つたが、結局敗戦の形であつた。爲め、忠正公は自ら出張兵を指揮すると云はれるのを、忠愛公代つて出張せられることとなつた。然し征討の師は、將に我が四境に迫らんとする時で飽くまで外國と戦を續けるのは得策にあらずとの論があつて、結局一旦外國と和議した上防長二州一致幕軍と抗戦すると云ふ事に一決した。そこで、使節を派遣して和を講じた。

我が藩では、幕府に對し、種々謝罪の手を盡しつゝあつたが、若し幕府が聞き入れず、妄に討入る場合には上下奮つて血戦し、不幸にして負ければ、防長の士民一同城を枕に討死と云ふ主意であつた。處が三十六藩の兵は、日を刻して防長に討ち入ると云ふ事で、藩政府の幕府に對する政策は愈々急迫を告げて來た。時に世臣中に、一種の異論が起つた。それは禁門に向つて發砲するやうな亂暴な事をして征討の師を向けられたのであるから、謝罪せねばならぬ、従つて政府の人々は責を引いて引退し十分恭順謹慎を表し謝罪せねばならぬ、反抗するは名義に於て相濟まぬと云ふのであつた。政府の役人も、恐れ入つて居る時であるから、政府も動搖し、前政府員は辭表を提出して謹慎した。

其の後正俗兩派議論が戦はされ、吉川監物公が其の裁決の役に當られたが、公は寧ろ恭順論者だから、政權は漸々恭順派に移り、麻田は責任を一身に引受けて自殺し、清水清太郎も采邑に引込み、忠正公は、元治元年十月三日忠愛公は四日に歸萩せられた。

十一月に幕府大目付永井主水正等は尾張總督に先つて廣島に來り、長州の罪を糾問する、其の應接には、吉川監物が當られた。其の結果、益田福原國司三太夫は切腹し、宍戸、中村、佐久間、竹内は斬罪に處せられ、更に五卿引渡、大膳父子

に寺院蟄居等を命じ、其の實行を見たる上師を引還すと云ふ事になつた。其れから殆ど松陰門下で統率して居る諸隊即ち正義黨と恭順派(俗論黨)との間が揉め正義派はもとより屈せなかつたが、吉川監物が廣島に行き、一々命令を實行したから軍をお返しなさいと求めたので、尾張總督は、元治二年正月四日に廣島を引き揚げた。

之で第一回の征長事件は濟んだ、それから高杉晋作が卒先して兵を擧げ恭順派と戦ひ、連戦連勝の勢であつて、恭順黨は、孤城落日の有様となつたを機とし、恭順黨の役人を退け、諸隊追討の兵を止め、國論の一致を圖る爲めに、顯れたのが鎮靜會議員と稱する萩の士族の者で、總數が後には二百にも登つたものである。それが七十餘人城に登り忠正公に意見を申し上げ、改革と人材登用を進言した。

當時萩の状態は俗論政府に反對して居たもので、麥の黒穂と撰鋒隊のやつは勢を揃へて出る計りと俗論まで流行し、大谷玉江松本の要口へ出張して居る士族でも始めから恭順派に反抗する人が多かつた有様。

諸隊が後に勝つた時は、萩の城下の者は男女共大喜びであつたと、余の母から聞いた事がある。

それから俗論黨は罷免し、前政府員を用ゐると云ふ風に改革が行はれ、忠正公父

子は長府清末兩候及家老以下の人々を集め、朝廷へ忠勤、幕府へ信義、祖先へ孝道、尤も時あつて孝道も忠義のためには犠牲に供する事がある故に、天倫第一の忠節を遵守すれば、信義孝道随つて相立つ、依つて大義を何處迄も推通すと云ふ國是に確定せられ、元治二年二月二十一日忠正公は、支藩主及諸臣を萩城に會し、嚴肅な臨時先靈祭を舉行し、神前に告文を捧げ、斷然決意を表白せられた。此の式は、二十二日から二十四日に至つた。

長州再討令

それから幕府は長州再討の令を發し、將軍進發と決し、慶應元年五月江戸城を發し大阪城を牙營として征討の事の指揮をする。十一月十六日廣島で宍戸備後助を呼出し、糾問を始めた。二年二月八日老中小笠原壹岐守が廣島に來て長州の十萬石を削り、公父子を蟄居、興丸に世嗣をさせ、益田、福原、國司の家は斷絶と云ふ裁許狀を渡さうとしたが、備後助は、病氣と云つて斷つた。其處で、宍戸と小田村素太郎を捕へ、網乗物に乗せて松平安藝守に引渡し、慶應二年六月五日を期として、防長の四境へ、撃込めと進軍の令を傳へた。

六月七日に、上の關に、幕府の軍艦一艘來て其の沿岸を砲撃し、八日に、蒸氣船二艘和船十隻を引て來て、大島郡の由宇を砲撃して、女子二名を殺した。そこで檄（長州は恭順謹慎の意を表して居るに無法にも村落を抄掠し、婦女子を殺したは、奸賊等か聰明を擁護して無名の師を起したのである防長士民一致して之を討拂ひ闕下へ罷出で、歎願するより外仕方がない云）を諸藩に傳へ、愈々戦を開き、大島郡、藝州方面、石州方面、小倉方面に戦ひ、何れも連戦連捷に歸して痛快を極めた。それから幕府の方では幕兵の敗報が來るので、驚いて止戦談判を開かんと議が出る更に將軍は薨じ小倉城は落ちたと云ふ報知があつたので、慶喜は勝安房を以て止戦談判を申込み慶應二年九月二日宮島大願寺で、會見、而して長州では、結局幕府の大故を利用し、兵を弄するを好むものでない、幕府が出兵したから之に應じただけである、幕府兵を引けば、尾撃する處はないと云ふ事で、勝は歸つた。これで四境の戦争は全く長州の大勝に歸したのである。

思ふに三百年來築き上げた幕府の權勢に三十六藩と云ふ大勢を加へ防長の四境に討入ると云ふ事は聲だけ聞いてもぞつとする。それに、他藩から一兵の援もなく、見事幕軍を大破したのは實に人力とは思へない。蓋し其の目的が尊王の大義にあつた事と輝元公以來藩の主従が約三百年間苦心慘澹養ひ來た力に外ならない。而て此戦に於ける長幕兩軍の勝敗は、實に天下の興廢、運命の決する所、若し長州敗る

か天下の諸侯は、忽ち佐幕主義を實行し、佛蘭西其他の外人は、必ず幕府を助け幕府は益々其を逞ふする事疑なく、幕軍敗る、か勤王的討幕の説俄に四方より起り王政復古の基礎を固め得るのであつた之を以て、此戦捷は、實に後の討幕及王政復古の大前提戦であつた。若し夫れ此の戦にして破んか、二州の滅亡は、固より忍ぶべきも、王政復古を如何せん。

此の戦捷に至る以前、薩長の士は内々往來して居たが此の戦捷により公然使者の交換をなし、且英國とも公然の關係を結ぶ事になつた。

これより先き長薩の仲が悪かつたが坂本龍馬の周旋で融和が出来進んで長薩聯合で王政復古を圖ると云ふ約束が慶應二年正月廿一日に成立し又當時佛は徳川氏を助けて諸大名を押付け覇權を鞏固にして日本の政度の統一を圖る方針であつたから高杉は長薩英會盟を主張し遂に右の如く薩と親み慶應二年の十二月廿九日英提督「キング」と忠正公父子會見に成つたそこで長薩英の三角同盟のようなものが出来たのである。

それから眞の目的即ち王政を復古するには、是非戦争に依り一旦幕府を叩き破らねば根本の改革は出来ないと云ふので、長薩藝三藩聯合で、出兵の内談が出来上つた。

そして慶應三年十月十四日に忠正公父子の官位復舊の内達其の翌日討幕の密勅が下つた。而して同年十二月九日公然忠正公父子及末家の官位を復し、入京を差許

された。其の後王政復古の大號令が發布され、薩長聯合で、討幕の勅を奉じ、錦の御旗を翻して、伏見、鳥羽を始めとして、關東、北越、奥羽、蝦夷各地長薩主力となつて、幕府及佐幕黨を討ち平げた。其の愈々終つたのが明治二年五月であつた。

藩籍奉還

是れより先き木戸孝允は、忠正公の同意を得て薩土肥に説き、明治二年正月二十日四藩主から藩籍奉還の上書を奉り、六月に御許しがあつて、府藩縣の三治制度となり、明治四年七月十四日廢藩置縣となつた。こゝに於て王政復古の實が全く擧つたのである。

剩餘軍用金の献納

輝元公秀就公時代から、非常軍用貯金の積立が始まり其後綱廣公時代、一層軍用金の貯蓄を爲し重就公の時には、撫育金、穴藏金の貯が起り、政務の費には、一切使はしめず貯へ來つた。其中には、印子金、阿川砂金、金の水風爐、金の茶碗、同茶入、金むくの罌、天文銀等もあつて其貯蓄は莫大なもので、ヘルリ來航以來各種出兵、四境戦争、更に伏見、鳥羽、關東、北越、奥羽、蝦夷の戦争を終り、穴藏金は、尙ほ百萬兩残つて居、王政復古の時勢となれば、入用ない云ふので、内三十萬兩を残し七十萬兩（近時の價格に換ゆれば一千萬圓程になる）を朝廷へ献上せられた。

餘録

來萩せる他藩の勤王志士其他

梅田源次郎 若州小濱藩士梅田源次郎安政三年十二月二十二日來萩其の大阪を發する時頼三樹が送別の詩に

翹然去上萬里舟。不是魯運東海遊。鐵劍有聲鯨鰐伏。蓬窓坐雪下長州。

がある。梅田は先づ秋良敦之助を尋ね、更に坪井九右衛門に面會し、勤王事業に付ては長藩の外頼むべきものなきを述べ、更に種々説き立て、結局勤王の旗擧を爲すために物産交通の道を開き、京阪地方と氣脈を通する事となり、翌年正月十五日萩を出發して歸國した。それから其の親族大和高田の豪商村島長兵衛父子が長州の物産御用達となり、萩にも來た、而して、物品交通は坪井の罷役後も繼續して居たさうである。

廣瀬旭窓 安政五年春來た。明倫館席上の作がある。

關鐵之助 矢野長九郎（水戸藩）安政五年十二月來る。

大高又次郎（播州）平島武次郎（備中）安政六年正月來る。

原采蘋 安政六年八月中旬來る。

長光太郎（豊前彦山家來）萬延元年三月中旬來る。

阪本龍馬 文久二年正月十四日土州藩士阪本龍馬來萩二十三日出發。

中山忠光卿 文久三年三月二十日中山忠光卿京都を脱し、海に航し二十七日來萩。

東久世通禧及澤宣嘉卿 文久三年八月十八日他の五卿と共に西竄せられ其の後萩地に來り偶せられて居た。

其の他奥原晴湖女史も萩に來た。

洋學の研究始

西洋に眼を注ぎ出したのは嘉永六年ペルリノの來航より以前即ち正保年間で文化元年頃から一層外國の事物を取調べ其言葉其學問に及び和蘭流の書物を読み和蘭風の兵式理化學の研究等をしたものである。

最先の洋行者

萩藩では、神州固有の忠孝を体とし、洋夷功利の説を用とし、國威を海外に輝かすのが本意であつたから、一方に攘夷を行ひつゝ、一方さしづゝと藩士を洋行せしめたのである。

最先に洋行せんと企てし者は、吉田松陰で嘉永七年三月二十七日金子重輔と共に下田に赴き米艦に赴きしが米人拒んで其の目的を達する事が出来なかつた。其の後

山縣半藏 安政元年に蝦夷樺太視察の快舉を爲し

北條源藏 安政七年一月十九日幕府使節に隨ひ米國に赴き十一月二十二日歸萩したのが始めてあらう、其時

作つた有名な詩がある。

巨艦截波排海難。長風萬里氣正豪。無端身已入寒帶。月兔北奔南極高。

杉孫七郎 英佛其の外諸國の事情形勢制度器械等を視察且航海術修業の命を受け幕府使節に隨ひ文久元年十二月十九日出帆文久二年十二月歸朝更に

高杉晋作 は文久二年正月三日幕吏に隨ひ江戸を發し上海に

野村彌吉、伊藤俊輔、遠藤謹助、山尾庸三、志道聞太、文久三年五月十二日五ヶ年の暇を受け航海術修業を命ぜられ、英船キロセツキ號に搭し外遊の途に就いたのも、矢張洋行の始めと云つてよからう。廢藩に至るまで、洋行した者は百人餘に上つて居る。

萩地に於ける最初の蒸氣車運轉

萬延元年中島治平長崎にて蒸氣機械及小形の蒸氣車を購入蒸氣車は忠正公に献し文久元年四月朔日公の命で城中馬場に其の運轉をした、之が萩に於ける蒸氣車の運轉始である、又治平の買入れた蒸氣機械を治平の助に依り、北條源藏、新堀水車場で運轉し公の覽に供した。

中島治平名は聿徳、韓齋と号す、文政六年萩に生る。安政三年三十四歳の時、父三郎右衛門正貞の意を受け公許を得て、家業の朝鮮語及西洋語研究の爲め長崎に赴き、兩語を修め、蘭人に就て分拆術を究め、製鐵の事に及び、同四年英語を修め、同五年長崎留學を命ぜられ、海防に關する技術研究の爲め洋學を修め、其の後綿羊蓄殖羅紗織方羊毛染方を調査譯述し、或は鐵工局開創を建白し、或は分拆術國産毛織物鑛業硝石製造の獎勵國富に關する事を説明し、或は毛織物鑛業所反射爐水車機、織殿、硝石製造所及台場を視察し、寒暑鍼風兩鍼の製造法を調査し、寫眞術を譯述し、更に文久三年理學舍密學の振興を建議し、沈没せる軍艦壬戌丸を浮上からしめ、慶應元年製鐵上の諸研究火藥醫藥の製造通用金銀の分拆等を爲し、慶應二年二月八日舎密局總裁に任せられたもので、以上の外西洋理化學に最も心血を注いだ人である。

明治時代

明治九年十月二十六日前原一誠同志の士奥平謙輔、玉木正誼、横山俊彦、山田穎太郎、佐世一清、馬來木工等八十餘人と舊明倫館に會し、政見に關し上京、闕下に諫奏君側の姦を除かん事を謀り、先づ山口を襲撃せんと決議し、館門に殉國軍と榜した。同二十八日山口屯在の兵の知る所となり、戦は同三十一日萩に開かれ其の後十一月六日に至る迄繼續し、六日前原黨の兵潰散し、前原兄弟奥平馬來の五人捕へられて、變止む。其の間十月三十一日には、前原黨の兵、町家に火を放ち、小橋以南皆焼いた。此尙の變、官兵は山口及廣島の歩兵大阪砲兵で陸軍少將三浦梧樓廣島鎮臺司令長官に補せられ、其の指揮を爲し六日に本營を萩に置いた又海軍中佐有地品之允は、軍艦に依り、指月山背より、發砲し、汽船太平丸に搭乗せる大阪第十聯隊の一中隊は上陸の上、進撃した。

前原一誠は松陰先生の門人、夙に師の推重を受け、遂に師の志を繼ぎ、尊攘の義を立て、長藩政事堂に列し、馬關の戦戊辰會津の役に力を盡し、維新に於ける功勞多し。明治二年七月參議に任し、從四位に叙し、十二月兵部大輔に任せられた然るに木戸と意見合はず、在職十箇月にして、職を辭し、萩に歸つた其の後明倫館址に學舎を設け地方少年の爲め文武を講習せしめた。此の學舎を讀書場と云つて居た。

萩の光榮

御來萩遊ばされた 殿下

有栖川宮熾仁親王殿下

明治二十三年六月二十四日藩主齊房公正室貞操院の御墓參の爲め、御來萩、貞

操院は、熾仁親王殿下の祖父詔仁親王殿下と御兄弟である。

有栖川宮威仁親王殿下

小松宮依仁親王殿下

右 兩殿下共明治二十五年十月二十八日千代田艦寄港の際御上陸

梨本宮守正王殿下

明治三十二年三月十一日幹部演習の際御立奇、上野、國重政亮氏邸で、御中餐

を召された。

北白川宮大妃殿下

大正十三年五月廿八日御來萩殿下は藩主邦憲公の孫忠正公の姪にあたらせらる

流行謠

文久三年高杉晋作奇兵隊を編制す農商人の隊も其中に在り其間に流行せし謠左の如しといふ

二一 派作十露盤やめて、敵を二つに市勇隊、膺懲隊とて見下げてくれな、もこの天下も根は百姓、國をわざる猪武者をねらひそがすな狙撃隊、弱弱武士には骨がない、切られて煮られて辨當菜、隊の御方はいろはにはへこ明日はちりぬるをわかれり。

同じ頃 の 謠

淺くとも渡りかかれたる小瀬の川、締めて固めた關の戸を、なんぼ幕府の威權でも、通す心はないわいな。

幕府から長州縮を買ひに來た、現金賣の正義店切つちやうか、まけはせぬ、それに恐れて逃げてゆく宮城彦助の作といひ傳ふる

磨きあげたる劍の光かり雪か氷かしものせき

攘夷のまきの謠の中に

男なら御槍かつがせ御仲間をつけてせめて行きたつ下の關

關はヨイシヨコシヨで前田の沖に甘くやけますさつまいも

防長の太守功名の直言を題して將軍の夫體を嘲りたる大阪人の落書

ほんあぼだらべらぼうだあのうまけをしみ、間に合はん陳羽織はりこんだそん

美術工藝略史

萩地は勤 王事業に全力を傾注して文武を主とし、美術工藝の方面には力が廻り兼ねた。然し文武に關係ある藝術は、特筆すべきものがある、即ち刀、鐔、書畫、

がそれで、其の外にあつては陶器が主なるものであらう。

刀

長州刀で、萩住の刀工は、何れも慶長以後所謂新刀に屬するもので、其の主なもの、二王方清、清定、二王清實、藤原重太郎、清重、清長、二王清盈。

鐔

舊藩時代萩は、鐔を造るに最も巧で、長州鐔と云へば有名なものであつた。

享保の頃、良工河治友久、同友周があつた。鳳曆年間鐔工中井善助友恒と云ふ者無比の良工で世傳の刀法に新意を加へ、益々長門鐔の名聲を博した。其の他井上清高、岡部、綾部、五十部等の鐔工があつた。

書

書家として有名なものは、

▼草場中章 字は豹藏、通稱兵藏、居敬と号す。肥前松浦郡の人、或は來船清人の子とも云ふ元祿十五年萩に來る。▼草場允文、居敬の子、幼名小七郎後要人又平藏と改む。本氏柳田、元文三年五月草場家に入る。

▼草場大麓 允文の子、字は仁甫、幼名市郎後周藏と改む大麓は其の号。▼和田正清、通稱孫四郎晚年梅翁と号す、寶曆十年没す。▼山縣英、字は、子繁、通稱俊平、鶴江と号す。天明八年重就公に徵せらる。▼山

縣墨僊、字は貞文、通稱慎平、藩命に依り、山縣英の遺跡を襲く。

畫

雲谷派で

▼雲谷等顔、幼名直治、通稱治兵衛、梶原源太景季の後裔、藩主輝元公に愛せらる。雪舟の畫脈四世となり雲谷を氏とした。慶長十六年法橋に叙せらる。▼同等益、幼名元直、幼名宮法師、等顔の二男、寛永三年法橋に叙せらる。▼同等興、初名就直、幼名千代壽丸、後圖書に改む。等益の長男、寛文七年法眼に進む。▼同等璠、等興の弟、初竹右衛門と稱し、文海と号す。延寶三年法眼に進む。▼全等鶴、幼名千代壽、江山と号す。▼三谷盛直、通稱仁右衛門、初め杉原太郎右衛門と稱す、備後神邊城主杉原豊後守理興の弟、慶長年中萩に來り、輝元公より祿を受け、氏を三谷と改む。畫を等顔に學び、鷹に巧であつた。▼三谷重清、通稱清兵衛、畫名等休盛直の子。▲雲谷等の、初名元明幼名於亦丸、等顔の孫、一家を立つ。▼同等省、初名直信、通稱平七郎、等爾の子、法橋に叙す、子等直、儒家となり、氏を繁澤に改む。▼同等哲、等益の第三子、一家を立つ。法眼に進む。▼同等宅、等屋の二男、一家を立つ、法橋に叙す。▼同等作、等屋の三男、一家を立つ、法橋に叙す。▼津森等爲、茂兵衛と稱す、等璠の弟子。▼栗栖等信、六兵衛と稱す、等璠の弟子。▼生駒等壽、名は勝政、幼名金十郎、後市郎兵衛更に市之允と改む。寛文六年始て藩に仕ふ。▼長富等珍、通稱左兵衛大津郡豊原の人、畫を雲谷等宏に學び、文祿十二年藩主より祿を受く。▼有馬喜三太、熊毛宍戸氏の家人、畫を雲谷等爾の子等達に學ぶ、兩國の山岳原野村里島嶼の形を糊造し、彩色を施し、郡村名を記した土型を製した。狩野派で

▼栗栖探叔、初め野口源二郎と稱す、相模國三浦郡津久井村中野の人、狩野探信に畫を學び、等鶴給領の内六十石を分ちて源二郎に與へ、分地末家とす。依て雲谷氏を冒し、後栗栖探叔守尙と改む。▼大樂朴水、名常樹初村田平右衛門と稱す、狩野永信に學ぶ、藩主吉就公より俸を受く。▼大樂探玄、朴水の子法橋に叙す。▼吉山常房、幼名萬作後友之進と改む、朴水の弟子、命に依り、防長産物を寫生す。▼吉山允憲、通稱松之助、常房の養子。▼狩野察信、永徳の後裔、如雲と号す、法橋に叙す。▼狩野榮州、察信の子、名俊信、氏を長澤と改む。▼狩野松隣、察信の子、父の遺跡を襲く。

鎮南嶺畫風に屬するもの

▼佐々木縮往、字は沕眞、通稱、平太夫、經學文章の餘暇、明人の筆蹟に法り、機軸を出して一家を爲す。▼張方平、通稱半藏鮭翁天然と号す。縮往の門人。▼井上親明、幼名權之助、後稱五左衛門更に武兵衛と改む。縮往の門人筆力雄壯豪邁狂畫多く又土偶を作る工であつた。

四條派で

▼森公肅、寛齊と稱し、桃溪又晚山と号す、天性濃厚、畫名海内に傳ふ。夙に尊 王の志あり 王政維新の業に盡せる所が多い。

海僊風として

▲磯西涯、宗四郎と稱し、師古と号す。嚴正忠直、家資饒ならざるも秋毫畫を售り、利を貪るの念なし。▼松浦知新、松洞と号す、西涯に畫を學び、松下村塾に文教の感化を受く。松洞曰く畫人は世に益するの畫を作るべし余は忠臣孝子烈婦義僕の輩を弘く海内に訪ふて其肖像を描かんことを國事に奔走して没す。

文人畫で

▲林晴、字は不蓮又愚公、通稱真人、百非、如是、百是、太平山人等の号あり。温厚忠直兵學に通し、禪學を好み、山水畫に巧であつた。嘗て吉田松陰に兵學を授けた事がある。門人中名高き者は、
 ▲石川瓊洲、名は復通稱復藏、▼伊藤匪石、名は亮通稱貞兵衛▼林停雲、名は茂、通稱與一兵衛、▼佐伯圭山、名は做通稱驪八郎の四名。
 現代では

▲高島北海、文人畫脈特に山水に巧、現時長府に住む。▼松林桂月、幽谷に學ぶ、現時南齋の重鎮。

著作

萩出身の人の著作は古來少くない、其中著作者として全國に有名なのは近松門左衛門であらう、萩平安古に生れ、後大津郡深川に移り、更に九州大阪に出て、著作したものと云ふことである。

陶器

萩焼の起り 其創始の、年月は詳でないが、今を距る四百年前即ち永正年間に始まつたこの説が真に近いやうだ。當時の作品は質緻密で、釉色白赤を帯びて、軟滑點茶用茶碗を主として、製したやうである。
 名稱 高麗左衛門によつて創始せられたものを萩焼と言ひ、三輪休雪の流を汲めるものを松本焼と云ひて、區別を立て、居たこの説もあるも、何れも他所では萩焼、萩では松本焼と唱へて居る。
 坂高麗左衛門 朝鮮の陶工、李敬と云ふ者、朝鮮征伐の時、毛利公の道案内となつたもので、毛利公凱旋に際し、李敬を伴ひ歸られ、名を高麗左衛門と稱せしめられ、萩松本に家屋敷を給せられた、高麗左衛門此に陶窯を築き、朝鮮草登の陶法に倣ひ、茶碗、香盒、花瓶、盞、盆の類を作つた。其質は緻密ならず、釉色淡薄なる白黄である。當時點茶の道大に行はれたので、其茶碗は尤も多く世に珍重せられた。左工門の作品、

殊に茶碗類は割高臺と唱へ、臺輪いんぎんに一ヶ所又は二三ヶ所の缺所あるのが常である。
 高麗左工門は氏を坂と稱し、号を韓峯山又は入唐山といふ。作品には無銘を常とするが時に号を款することもある。第二代は坂助八忠季、第三代坂新兵衛忠順、第四代坂新兵衛忠方、第五代坂助八忠遠、第六代坂新兵衛忠清、第七代坂助八忠三、第八代坂高麗左工門忠陶、第九代高麗左衛門、第十代高麗左工門に至つた。而て古來坂を本窯と稱し其他を脇窯と稱す。

三輪休雪 大和三輪の人、各地遊歴の末、寛文三年萩に來り樂燒陶器を作る、其技精妙、藩主之を愛し、命じて種々の陶器を作らせられた、全年陶器職に任じ、家祿を給し通稱彌兵衛を改めて休雪と名けしめられた初代休雪の後、二代彌平と云ふ者、坂氏へ神文を爲し、弟子となり、三代忠兵衛、四代休雪に至り、陶業に改良を加へ、彫付形物を作つた、五代勘七六代兩藏七代源左工門八代泥介九代雪堂に至つて居る。
 林半六 萩焼の一派を立てた人で、元毛利公の家臣佐伯某の次男であつたが、性來燒物細工を好み、坂三代目に神文を爲し、弟子となつた、後氏を林と改め、多くの名作を出した、其から林家一派を萩焼に立てた。
 山村松庵 深川焼の創始者、高麗左工門の弟子となり、陶法を學びて、技に精しく、茶入師として毛利氏に抱へられ、大津郡湯本に移り、各種の茶入を作つて居たが、後故ありて知行を召し上げられ暫時にして廢絶坂倉萬助 坂家の弟子、深川焼の中興で、松庵の廢てた窯跡で築窯し、數代繼續して今日に及んだ。

鬼萩

萩焼の一種に鬼萩といふものがある。質粗にして、釉は漆白色、一種の雅致を具へ世の珍賞を受けて居る、今も現に作りつゝある。

東光寺焼 明治十四年五月毛利氏藩士田中實長、信一、熊野虎安、大玉保重、三輪泥介等の結社に係るもので、椿東東光寺境内に窯を築き、東光寺山及小畑の磁土を用て、粗製白磁を作つて居たが、今は廢して居る小田焼

山下權輔 文政五年元肥前の國吉古十郎の起せるを山下權七受繼來りしものなるが、明治の初年に至り廢した。

兼田重五郎 天保三年元近藤半平と云ふ者當地に來り工場を設けたに始まり當時埴田焼と稱して居た。其後文政三年三月舊藩産物方にて之を引受け天籠山と稱し其後天保十三年十一月兼田三左工門藩廳より拂下を受けたもので近來に至り中絶せる志都岐焼の再興を計り天籠山萩志都岐焼と稱へ來つた。

泉流山 天保年間暫く中止して居たが元治二年大賀幾介再興し明治三十五年郡司拾二老之を引繼ぎ更に近年に至り吉賀要作引受け坂、及三輪と同質の陶器を造つて居る。

岡田淳輔 元祖平田仙八の起せるを明治七年四月引受け今日に至つて居る。

織物

舊藩時代には天下一般の衣服調度は概ね京阪若は原産地に仰ぎ萩町の工業は所謂家庭工業に過ぎなかつたやうであるが町名に絹機屋町と云ふのがあり、元祿中此に織殿を設け絹織の職人を置かれたと云ふ、近來絹織物工場も設置せられ漸く盛ならんとして居る。

竹細工 豊富で質のよい當地産の竹で作つた竹細工品は現今當地の一名産で各地より頗る歡迎せられて居る

人物

勤王烈士

人物は、誠に多く、其氏名丈けでも數ふるに堪へない。且つ無名のものも少からず、以下記載するものは、其一部に過ぎない。

□村田四郎左衛門 後織部と改む名は清風、贈正四位

□吉田寅次郎 名は矩方、字義郷、松陰、二十一回猛士と号す、通稱初大次郎、贈正四位

□益田右衛門介 初名は兼施、後親施、幼稱幾三郎、後越中、次に彈正、右衛門介と改む。元治元年十一月十一日賜死、年三十二贈正四位

辭世 今更になにあやしまん空蟬の よきもあじきも名の變る世に

□福原越後 名は元儗、翠崖と号す、元治元年十一月十二日賜死年五十贈正四位

辭世 苦しきは絶る我身の夕煙 空にたつ名はすてかてにする

□國司信濃 名は親相、初熊之助と稱す元治元年十一月十一日賜死年二十四贈正四位

辭世 よしやよし世を去るこても我心 御國のために猶盡さはや

□周布政之助 名、兼翼、字は公輔と号し、後麻田公輔と改稱、自殺年四十二、年贈正四位

失題 欲振國力立皇基。大厦將傾一木支。舉世滔々走名利。至誠只有鬼神知。

□清水清太郎 名親知、葭堂と号す、元治元年十二月二十五日賜死年二十二、贈正四位

◎十一烈士(以下十一名)

□竹内正兵衛 初清記、名は勝愛、号は竹叢、元治元年十一月十二日刑死年四十一、贈正四位

辭世 武士の露と消ゆく枯野かな 咲もまたしほむる時か秋の花

□中村九郎 初め道太郎、後九郎兵衛と稱す、名は清旭、白水山人と号す。全上日刑死年三十八贈正四位

絶命詞 皇道在攘夷。守之死不辭。

□佐久間佐兵衛 中村清旭の弟、初赤川淡水又は直次郎と稱し、名は義濟、思齊と号す、全上日刑死年三十二、贈正四位

辭世 今ははや言の葉草も夜の霜に 消ゆく身にはなりにけるかな

□尖戸左馬介 初め山三郎後九郎兵衛と稱し、更に左馬介と改む、名は眞激、全上日刑死年六十一贈正四位

辭世 人は死す時死せざれば 死するにまさる耻ありと

世の諺もよそならで 迫る我身をいかにせむ

□渡邊内藏太 名は暢、介亭と号す、幼名久之助、後廣輔と稱す、元治元年十二月十九日刑死年二十九贈正四位。

絶命詩 人間行路盡風波。一死酬君豈有他。姦吏不知買生心。流涕奈此此國家一何。

□檜崎彌八郎 名は清義、節菴と号す、全上日刑死年二十八贈正四位。

辭世 日出之邦事三義方。不レ飢不レ凍送三星霜。今宵一死酬三明聖。二十八年更覺レ長。

□山田亦介 幼字卯七郎、名は公章、愛山又含章齋と号す、全上日刑死年五十六贈正四位

散る時は散も芳野の山櫻 花にたこへし武士の身は

□大和國之助 初め武之進、後彌八郎と稱す、名は直利、全上日刑死年三十贈正四位

辭世 國のため世のため何か惜からん 君にさゝぐるやまこ心を

□前田孫右衛門 初め岩助といふ、名は利濟、宇致遠、号陸山、全上日刑死年四十七贈正四位

絶命詩 一死始レ始豈敢辭。官居半世值滄時。酬レ君心事何須レ辯。只有青天白日知

□松島剛藏 瑞益と號す、名は久誠、字は有文、韓峯と号す。全上日刑死年四十贈正四位

辭世 君のため盡す心の直なるは 空行くかみ(一書に月や)やひこり知らん

□毛利登人 名貞武、後單に武と改む幼字、左門又小兵衛と稱し、次に五郎左衛門と改め、更に登人と稱す

有所、在壘、芹田、主靜庵等の号あり、全上日刑死年四十四贈正四位

辭世 梓弓引てかへさぬ武士の 正しき道に入るそうれしき

□高杉晋作 名は春風、字暢夫、東行と号す、天保十年八月二十日殺に生る、病死時年二十九贈正四位

□久坂義助 名は通武字は實甫、秋湖又江月齋と号す、自刃、年二十六贈正四位

大君の御馬の口をさり直し 芳野の奥にさくらかりせん

□來島又兵衛 名は政久、戦死贈正四位

□寺島忠三郎 名、昌昭、字子大、刀山又斃不休齋と号す。自刃年二十二贈正四位

□入江九一 初杉藏、名は弘毅、字は子遠、戦死年二十七贈正四位

□山田宇右衛門 名は頼毅、贈正四位

□時山直八 名は養直、号は白水山人、戦死贈正四位

□浦鞆負 名は元襄、贈正四位

□御堀耕助 名は直方、初め大田市之進と稱す、贈正四位

- 吉田稔磨 初め榮太郎、名は秀實、幕黨に襲はれて斃る年二十四贈從四位
- 杉山松介 名は律義、寒翠に號、會津勢に襲はれ疵を受けて死す年二十七贈從四位
- 來原良藏 通稱、盛吉、後良藏と改む。割腹贈從四位
- 河上彌一郎 名は正義、自刃年二十一贈從四位
- 有吉熊次郎 名は良明、字子德自刃年二十二贈正五位
- 松浦龜太郎 自殺年二十六贈正五位
- 金子重輔 獄死二十五贈正五位
- 香川半助 暗殺年三十五贈正五位
- 冷泉五郎 全上年二十五贈正五位
- 櫻井三木三 全上年三十六贈正五位
- 土屋矢之介 名は振、字松如、蕭海、贈正五位
- 玉木彦介 名は正弘、戰死年二十五贈正五位
- 藤村太郎 名は稻彦戰死年二十八贈正五位
- 石川厚狭介 初、山平、名は正臣、戰死贈正五位
- 平野光次郎 戰死、年二十四贈正五位
- 駒井政五郎 名は忠仲、戰死年二十九贈正五位
- 伊藤百合五郎 名恒徳、割腹時年十九贈正五位
- 藤村英次郎 名、稔彦、贈從五位

□ 大見又太郎 贈從五位

明治維新功勞者

▲ 廣澤真臣 通稱、初め季之進、金吾又藤右衛門、後兵助。天保四年十二月萩に生る割客の毒刃に斃る。年二十九贈正三位 ▲ 木戸孝允も桂小五郎贈從一位 ▲ 山田顯義も市之丞正二位に叙し、伯爵を授けらる ▲ 品川彌二郎名は日孜念佛庵主と號す、天保十四年閏九月二十九日萩に生る、子爵正二位勳一等其他 ▲ 伊藤博文 ▲ 山縣有朋 ▲ 穴戸璣 ▲ 楯取素彦 ▲ 曾根荒助桂太郎 ▲ 杉孫七郎 ▲ 鳥尾小彌太 ▲ 三浦梧樓 ▲ 野村素介等指を屈するに違あらず。

國學者

▲ 安部春貞(元和八生元祿十一没)享年七十七、萩藩歌學の家、子孫その學を繼ぐ、吉川惟足の弟子 ▼ 國重政恒、溫故私記の著あり ▼ 靜間三積(明曆一一一萬延元)本居太平の弟子 ▼ 冷泉古風(享和元—安政元)閑雅自適高士の風あり、歌稿に石竹集あり、冷泉氏は大内氏以來の名家 ▼ 穴戸眞澂(文化元—元治元)左馬之助と稱す歌集に鳩の浮巢あり、大津郡風土注進案を編す又尊攘の志士なり ▼ 布施御墻(寛政十一—安政三)國典古記に精し、小郡風土注進案を編纂す ▼ 安部惟貞(寛政二—文久三)安部春貞の後裔 ▼ 近藤芳樹(享和元—明治一三)周防岩淵の人、天保十一年より萩に住す。後東京にて没す。明倫館の國學講師たり。國學に盡せし功績大なり ▼ 弘正方通稱平五郎 ▼ 安部眞貞(文政二—明治二六)安部惟貞の子、平田篤胤の弟子 ▼ 安部健臣(—明治二)眞貞の弟、明倫館國學の助教なり ▼ 坂時存(延寶七—寶曆九)能吏の稱あり歌を善くす ▼ 勝間田盛稔(享和元—明治一三)澗翁と號す後山口に移りて住す ▼ 近藤清石(天保四—大正五)考證に長じ國史に精し。

儒者

▼山田原欽(寛文五—元祿六)伊藤坦庵に學ぶ江戸に在りて其の名諸候に知らる▼小倉尙齋(延寶五—元久二)明倫館學頭、明倫館創業に就て功あり▼山縣良齋諱は長白周南の父▼山縣周南(貞享四—寶曆三)物徂徠の門人又國史に通ず▼佐々木縮往(慶安二—享保一九)經學に通じ又書を善くす▼佐々木龍原(寛政一一)通稱逸平▼永田政純(寛文十一—寶曆三)國史に通ず▼瀧鶴臺(寶永六—安永二年)縣門三傑の一人又服部南郭に學ぶ▼林東溟(寶永四—安永九)縣門三傑の一人晚年江戸に住す▼和智東郊(元祿一五—明和二)縣門三傑の一人詩文を以て名あり▼山根華陽(元祿六—明和八)明倫館祭酒▼小田村村山(元祿一五—明和三)徂徠の門人▼小倉郵門(元祿一五—安永五)明倫館祭酒▼津田東陽(元祿一四—寶曆四)明倫館祭酒▼田坂瀾山瀾山集あり▼仲子岐陽(享保五—明和二)山根南溟(寛政七没)明倫館學頭▼村田清風(天明三—安政二)識見卓拔羽賀臺御狩を以て名あり▼山縣太華(天明元—慶應二)明倫館祭酒國史編纂の著あり▼中村華獄(天保七没)明倫館祭酒、儒學の外史學にも通ず▼平田清溪(明治一二没)▼中村牛莊(天明三—明治二)明倫館祭酒詩書を以て名あり▼小倉遜齋(文化二—明治十一)明倫館祭酒▼内藤靜修(寶曆九—天保五)▼官暇漫吟の著あり▼楊井蘭洲、茶山、山陽に交り詩を以て著はる▼八木砂村(—天保十四)詩に名あり▼楊井三希(—萬延元)詩を以て名あり久しく江戸留守居役たり▼八谷梅頭(文化三—明治五)詩を以て名あり▼日野春露(寛政十—萬延元)醫を業とす詩を以て名あり▼北條秋航(文政五—明治一九)嚶鳴社を創立せり▼檜崎節庵(天保八—元治元)十一烈士の一人▼岡本栖雲(文化二—明治二)權九郎と稱す▼能美雪水(文政八—明治二三)▼土屋蕭海(文政二—元治元)文集に蕭海遺文あり、文章を以て鳴る▼吉田松陰(天保元

—安政六)勤王家たる事人の知る所なり□河野鴻陽(—安政元)詩を以て名あり□繁澤豐城(—文化三)明倫館祭酒中村雪樹(天保二—明治二三)教育に功あり贈従四位

醫者

醫者で洋學に貢獻せし者
▼能美洞庵好生館建設に効あり▲久坂ハ機蘭學に通じ兵制に及び慷慨の士なり又詩を能くす▼青木周弼(享和三—文久三)蘭人シーボルトに學ぶ毛利敬親公の侍醫となる贈従四位▼田原玄周好生館の教員▼烏田智庵其の祖は大内氏に屬し筑前烏田城に居る、其の著に萩古實未定之覺あり▼松村太仲蘭學に長じ久坂玄機と同時の人▼松島剛藏、坪井信道の門人、本藩の海軍に盡す所多し。等である。

寺僧

□石屏、龍藏寺の中興の高徳にして諱は子介、入唐せしこあり、元徳元年二月十四日僊化す□慧極東光寺の開山名は道明、木庵に師事し、三傑の一人なり。享保六年八月二十四日僊化す。

官衙公署

□萩區裁判所 豊浦郡を除く外、長門一圓を管轄として、明治九年五月八日開設、其後種々の變遷を経、阿武大津兩郡を管轄する區裁判所として、今日に至つた。
□阿武郡役所 元勘場のあつた所にある、明治十二年設置。
□萩警察署 明治五年五月十三日萩支廳に取締役を配したのが起て、全九年二月萩警察出張所を置き、全十年三月二日萩警察署と改めた、濱崎及西田町に巡查派出所がある。

□裁稅務署 明治二十二年七月山口縣收稅部裁出張所設置、阿武郡一圓管轄、全二十三年四月山口縣裁直稅分署山口縣裁間稅分署を改稱、全二十九年十一月官制令定に依り、裁稅務署設置、大正十三年十一月深川稅務署廢止の結果、阿武大津兩郡を管轄するに至つた。

□萩郵便局 明治四年十一月一日開設、名稱萩郵便局、等級三等、全十一年一月一日電信事務開始、全二十五年四月一日裁郵便電信局を改め、全三十六年四月一日裁郵便局を改稱、全三十九年八月十六日特定三等局に昇格、全四十三年三月十六日特設電話開始、大正五年七月一日普通電話に変更、全十二年二月二十六日二等局に昇格。

□濱崎郵便局 明治三十八年四月一日開設、大正二年三月十一日電信電話事務開始。

□橋本郵便局 大正五年三月二十一日開始。

□越ヶ濱郵便局 大正八年六月十一日開始、大正十二年八月二十一日電信電話事務開始。

□山口縣土木出張所 阿武郡役所構内にある。

□門司稅關裁監視所

□萩町役場 明治二十一年市町村制實施の際舊萩町役場として設定、大正十二年四月一日舊萩町舊樺東舊山田村を合併した爲め、廣き管轄を有する萩町役場を爲つた。萩町舎敷地は菊屋剛十郎氏寄附したものである。□六島村役場事務取扱所 萩町の北海に散在する六つの島は、舊藩時代御船藏司配の下に屬して、維新前には大島櫃島羽島尾島相島五ヶ島に各庄屋を置き肥島は安政年間の開拓で、羽島庄屋の支配に屬して居た。云ふ明治維新後大小區制を定められたとき、古萩戸長役場の管轄となり、山口縣第二十大區第八小區に屬した。明治十三年區制廢止各島に戸長を置くに至り大島に大島戸長役場を置き、五ヶ島戸長役場事務取扱所を萩町

に設け、全十七年六島を合し、大島外五ヶ島戸長役場事務取扱所を萩町濱崎に置き、全二十一年市町村制實施の際六島村と改稱。依て六島村役場事務取扱所となる。

學校及圖書館（中等學校）

▼山口縣立萩中學校 長藩學校明倫館の系脈を受けた、萩文學寮が明治五年に改稱して興つた萩中學に起源し、其の後幾多の變遷を経て明治三十二年九月一日山口縣立萩中學校として創立、同年十月十八日開校式を行ひ今日に至る。本校は、教育上の機會均等を主義とし、有爲の青年に對しては、在校中更に卒業後大學を終るまで給費の一大特色を有する。

▼萩町立萩商業學校 大正六年五月五日授業開始、入學資格は尋常小學卒業、修業年限五ヶ年、徵兵令第十三條に依る認可を得て居る。久原房之助氏は本校々舎新築工費三萬八千圓を寄附した。

▼山口縣立萩高等女學校明治四十五年四月阿武郡立實科高等女學校開設、大正九年四月組織を變更し、本科、實科、補習科を併置し、山口縣萩高等女學校と改稱。同十二年四月縣に移管し山口縣立萩高等女學校と改稱。同十三年四月補習科を廢した。女子に須要な高等普通教育を施し、温良貞淑の婦女を養成するを以て教育

方針として居る。本校創設の際久原文子より三萬圓、後擴張費として久原清子より二萬六千圓寄附せり。

▼私立萩婦人會修善女學校 明治二十三年二月佛教信者團體修善講の創立に係る修善女學校に起り、其の後萩婦人會の事業として、擴張以て今日の隆盛を致した本校は人格を中心とし、技藝熟達を主とするを特色として居る。

實業補習學校

- ▼萩町立萩實業補習學校 萩商業學校内に附置
- ▼萩町立椿東實業補習學校 椿東小學校内に附置。
- ▼萩町立越ヶ濱實業補習學校 越ヶ濱小學校内に附置。
- ▼萩町立椿西實業補習學校 椿西小學校内に附置。
- ▼萩町立山田實業補習學校 白水小學校内に附置。
- ▼萩町立木間實業補習學校 木間小學校内に附置。

小學校

- ▼明倫尋常高等小學校 明治五年冬開きし新堀小學が起源で、其の後多くの變遷を経、同二十年四月一日明倫尋常小學校を開き、高等科を併置し、更に屢々改革して今日に至つたものである。
- ▼椿東尋常高等小學校 明治六年二月設立の松本小學校が起りて明治二十年四月一日椿東尋常小學校となり、

高等小學校を併置、全二十六年二月十三日椿東尋常高等小學校となつた。

- ▼越ヶ濱尋常高等小學校 明治三十二年四月一日開校。
- ▼椿西尋常高等小學校 學制發布により設立せる大屋小學椿町小學が起りて明治十九年五月四日椿西小學校となり變遷を経て今日に至つた。

幼稚園

- ▼白水尋常高等小學校 明治六年二月創設の玉江小學校に始る。
- ▼木間尋常高等小學校 玉江小學校の分校として設置せられたのが起りて明治三十三年五月獨立した。
- ▼双葉幼稚園 大正九年四月二十一日創設。

圖書館

- ▼山口縣立萩圖書館 明治三十四年一月三十日郡立萩圖書館として開館大正十三年四月一日縣に移つた。本館は明木村瀧口吉良萩町菊屋剛十郎兩氏か本館建物を新築して寄附したに本づく。
- ▼萩町立明倫圖書館 明治四十三年八月二日私立明倫文庫として起り、同四十五年四月一日萩町立に改まる
- ▼私立南園文庫 萩高等女學校内にある。
- ▼萩町立椿東圖書館 大正六年九月四日設立。
- ▼萩町立椿西圖書館 大正五年五月十九日開設。
- ▼萩町立越ヶ濱圖書館 大正十二年三月三十一日開設。
- ▼萩町立山田圖書館 大正十二年三月開設。

傳習所

▼萩工業傳習所 萩町の管理に屬し、明倫小學構内に在る。各種美術竹細工の傳習を爲すを、目的として居る。

會及組合

○阿武郡教育會○阿武郡農會○阿武郡產牛蓄産組合○阿武郡有限責任購買組合聯合會○有限責任一三購買組合以上何れも阿武郡内にある。

銀行及會社

▼株式會社萩銀行 明治三十年四月の創立、大正十一年大坂藤田平太郎頭取となる。本行は、防長銀行と共に全國稀に見る健實且つ信用あるもの。
▼株式會社防長銀行 明治三十二年九月三十日創立、大正十一年藤田平太郎頭取となる。
▼株式會社百十銀行萩支店 第一百國立銀行が大藏省爲替方并に山口地方稅爲替方を命ぜられ、郡役所内に大藏省爲替方地方稅爲替方の出張所を設置せるに始り、幾多の變遷を経、明治三十五年十一月株式會社百十銀行萩出張所を設け、一般銀行業務をも開始し、大正三年二月萩支店と改稱せるものである。
▼萩製絲株式會社 大正八年十一月十三日開業せるもので賀田金三郎の愛郷心から出來たのである。
其他萩疏水土地株式會社防長自働車株式會社防長商事株式會社萩電燈株式會社萩製材株式會社等がある。

演劇と活動寫眞

明和二年始て、芝居興行が土原弘法寺馬場で行はれ、文化十三年の秋より、歌舞伎からくり人形などの芝居筒屋賑はひ、文政十四年に止められ、維新後堀内、樺金谷天神社附近、瓦町、唐樋に劇場が出來其後雜賀下濱崎にも出來て、一時は唐樋、雜賀下、濱崎の三劇場の隆盛を見たが、今日は劇場としては、住吉座が存するのみ。
○住吉座、濱崎町にある○永樂座雜賀下にある元劇場であつたが、大正八年日活系の常設活動寫眞館となつた○黄金館、江向にあるマキノキネマ系の常設館○巴城館吉田町にある松竹キネマ及び帝キネマの常設活動寫眞館。

玉突

玉突は二三所ある。

産物

木材 上古阿武郡の産物として、世に聞へたのは木材で、今も松杉が最も多量である。

竹 は質に於て、量に於て誇るべき當地の一大産物である。
樹苗 當地は樹苗培養に好適の土質であるから各種山林樹苗桑苗家樹苗庭園木等が培養せられ、漸次盛大に赴きつゝある。

木炭 又量及質に於て、誇りのものである。
水産 水産物は、昔から産額多大で、乾物は、國外に輸出せし量も少なくはな

つた。文化四年六月幕吏羽倉權九郎廻浦控に長煎海鼠干鮑鱧鱈一萬斤内四千七百四十六斤濱崎とあつて、これは主に長崎に廻送して外商に賣渡すものであつた。其他舊藩の物産附立に鱈鱧阿武郡萩産とあるやうに、海産物は今も昔と同じく盛で萩町第一位の産物である。

夏密柑 長州夏密柑の栽培は、其創始審かでない、或は大比日を以て原産地とも云ひ或は萩町に古來から存在したとも云ふ。而して文化初年江向村檜崎十郎兵衛と云ふ人大津郡仙崎柑浦の大比の知人から果實數個を贈られ、其の種子を播きたるを始めとし、天保年間杉彦兵衛と云ふ人杉孫七郎氏の先代大津郡より苗木二本を求め、一は自家庭園に栽へ、一は堀内兒玉惣兵衛に寄贈した。惣兵衛の嗣子其美味を賞し、之を敬親公に献した處公大に賞し、其蕃殖を奨勵せられた。それから有志の人漸次接樹栽培して夥多の苗木を外に輸出すると同時に、果實の販路擴張に力め、今日の如き萩の一大特産物として長州本場の名を天下に擅にするに至つたと云ふ事である

名 物

▼萩焼(前述)

▼竹細工品(前述)

▼雲丹 味と質、天下無比。

▼生魚 荒磯育ちて其の肉が緊張し味がよい特に鯛は豊富で、味又最もよい。

▼鮎 阿武川鮎と云へば有名なもので、其の形其の味共に無類。

▼萩蒲鉾 天下無敵質がよく味がよく長持てがする。

▼罐詰 各種海産物の罐詰。

▼鯛の粕漬

▼果實 では本場の夏密柑。

▼菓子 各種夏密柑皮製の菓子、おやき、魚肉製の菓子は特に當地の自慢もの。

▼蜂蜜 當地の蜂蜜は夏密柑の花の香りがして風味掬すべきものがある。

交 通

由來萩町は僻陬の地と目し交通上顧みられず、愈々不便を餘儀なくせられて居たが、世界交通の今日から見れば、内地と滿鮮地との交通に於ては、最良の要津で、此点は下關門司よりも遙かに優越して居る。従つて、將來は海陸共交通の焦点たるべき特性を有するものである。

鐵道 二三十年前より、待ちに待ちたる鐵道は、大正十四年四月三日開通の光榮に接し、町民の歡喜察するに餘あり。ものゝ成るは成るの日に成るにあらず、從來幾多の人の努力と犠牲が今日の開通を見るに至つたものである。四月三日開通の線路は長門線中正明市萩間であるが、厚狹正明市間の鐵道と連接して居るから山陽線と接續した譯、而て山陰線小濱萩間の開通も遠からざるべく、又小郡萩間の開通も遠くあつてはならぬものである。

萩驛に三つの驛がある。

玉江驛 山田區玉江にある小驛で、頗る眺望がよい。

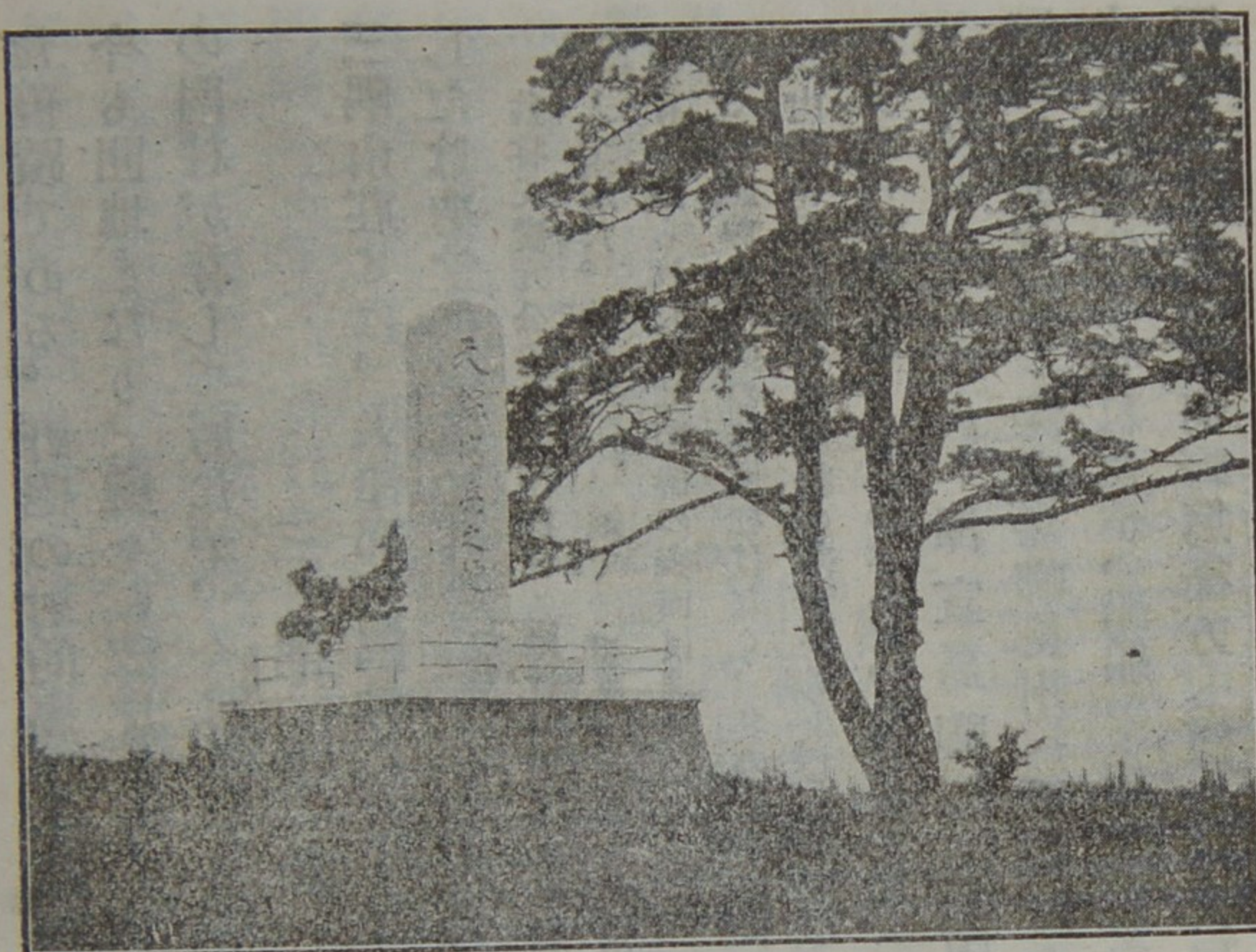
萩驛 大字椿區にある。之れが萩の中央驛である。(工事中)

東萩驛 椿東香川津にある、港に接近した驛である。

瀛船 堺大阪間航行の瀛船及仙崎方面行の瀛船がある。

自働車 乗合自働車の開始は縣下に於ける魁。

現在左の線路間の乗合自働車がある。
 ○萩小郡間、明木、繪堂、長登、大田、綾木、長田、湯口、小郡。○萩山口間、明木、佐々並、山口。○萩江崎間、大井、奈古、木與、宇田、須佐、江崎。○萩三谷間、福井、砂堂、廣瀬、大山、銅、生雲、三谷。



羽賀の臺

外 胞

史 蹟

羽賀の臺

萩を去る一里餘の東、福川村内にある廣漠たる平原で、松櫨雜木があり登るに従ひ山畑連り地勢五段に分れ、五段に接して、小高き所を物見ヶ平、東端の最高き巔は二つに分れ、東を俵かネと云ひ、西を矢筈山と云ふ。矢筈山と物見ヶ平との中間にある、嶺を、御陣屋と云ふ。此の臺、北面日本海の漂渺を臨み、西方、指月山の雄姿を望み、東方及南方は山脈相連る。

此の地は昔忠正公時代大操練の行はれ

た舊蹟である。野砲の射的場は御陣所より東、俵かネの南に當る所で、着弾點は今も凹地となり、處々に破片があると云ふ事である。明治十四五年頃迄は御陣口の門柱が存して居たが、今はないと云ふ事である。

三隅山莊

三隅山莊とは、大津郡三隅村にある。村田清風翁の舊宅の一つで翁が子弟を薰陶した尊聖堂は、僅に其の跡を存する又遺愛の松及木戸孝允の清風松の碑がある。

翁嘗て廣元公の墓所を探せる時江戸から松苗二本を持歸り其の一を萩平安古の舊宅の庭内に植へ愛撫して居た。翁の没後、萩では清風松と稱して居た、明治初年木戸孝允其の松の側に碑を建て其の松の保存を圖られた、其の碑の表面は清風松の三字、裏面は翁の徳を頌した短文と七絶一首を刻したものであつた處が今は其の清風松はなく、其の石碑は後年萩から移されたものか此の山莊にあるのである。此の山莊の松は萩の清風松の落實から生じた小松を翁が晩年移植されたものだ云ふ。又庭内に楠公梅と云ふのがある、此は翁が楠公の墓側の實を拾ひ來つて植たものと云ふ事である。

澤宣嘉卿の遺蹟

河野篤衛寓居 澤宣嘉卿長州へ下向せられた時、春川權之助と變名し、萩の沖なる大島に詫住せられたが、船舶の交通頻繁な爲め、慶應元年二月二十六日から五月十四日まで大井村河野篤衛方へ假りに寓居せられた。座所は同家の表座敷であつた。

弘誓寺寓居 慶應元年五月十五日同村字本郷弘誓寺に移られた。卿の座所は同寺の隱居所で本堂の半部を近侍の居所としてあつた、其の後萩の小畑に寓せられたのである。卿は書畫に巧で、當時需に依り揮毫せられたものが、萩地及大井の人に保存されてある。

名勝

長門峽(名勝地として指定)

長門峽は、吉田松陰が、松下村塾記に、松下之爲_レ邑南帶_二大川_一川之源。溪間數十里。人莫_二能窮_一。と云へるもので實に萩に注ぐ阿武川の流域である。阿武川は、長州第一の大川で、本流は流程十八里、其の源は阿武郡嘉年村に發し、徳佐地福篠生雲川上の各村を流れ萩町に達する。篠生村内御堂原と云ふ所で、支流篠目川を併せ、峽容を下ること四里にして川上村高瀬に至る、其の間の奇勝が長門峽の主景で、別に支景三つがある、一は阿武川の支流生雲川の景で生雲溪と云ふ、二は同支流金郷の景で金郷溪と云ひ、三は同支流佐々並川の景で、漣溪と云ふ。本支兩流を合すると奇勝絶景が約七里に亘る。更に本流の下即ち高瀬より萩に至る四里の間を舟で下るを阿武川下りと稱す。而して此の四里の間は、長門峽

の延長で全然趣を異にした景勝が、連続して居る、又高瀬より約五六丁にして佐々連洞ある、長門峽の奇勝に更に花を添へて居る。

本流中名稱ある勝景は、丁字川、千瀑洞口、榎ヶ淵、舟入廣滑、和留瀬、龍宮大瀑、龍宮淵、湯の瀬、柄崎口、金郷溪口、牛若山、蟹瀬瀑布、大小天狗岩、烏帽子岩、獅子岩、金郷溪口、切籠、切窓、重屏岩、魚取郷、鰐石、高瀬。支流生雲溪で名稱あるものは、杣淵、杣淵の瀑布、暗淵、飛渡瀑布の四景で、支流金郷溪で名稱あるものは、金松岩、猿溪瀑布の兩景で、支流連溪中名稱あるものは、金時岩、隅淵、下魚切、上魚切であるが本支流共に各名稱ある外のものも雖も勝景は連続的であるから右名稱外の處も雖も決して凡景ではない。



長門峽

墨畫か一の墨色で、千變の妙ある如く、長門峽は、木、水、岩で萬化の奇を盡し更に墨畫に凡非凡の別ある如く、長門峽が耶馬溪、寒霞溪、妙義山其他諸所に在る佳景と其の撰を異にし、獨り絶勝の稱を擅にして居るに景趣が單調に失するものであるが、長門峽は、夫等のものと異り、(一)樹木が豊

特色



長門峽龍宮淵

る。筆は目に及ばぬ、其の特色と思ふ所だけを摘んで見る。絶景と稱せらるゝものでも、多くは樹木水に乏しく岩石に缺け、更に

富、(二)水も豊富、(三)岩石は頗る太く、屋大のものが多く、質は石英粗面岩で、崩るゝの危険なく、色合が薄黒で氣持がよい、(四)樹木の配合、水の變化、岩石の形容布置の景趣、善を盡し美を盡し、頗る奇抜、故に其の山峯、絶壁、崖巖、溪床点石、瀑布、深潭、清流、奔湍の如きも、月並を抜く事正に千萬歩。(五)景趣は勇大且つ豪壯而も部分的に絶美なると同時に、全体的に、絶勝である、(六)一步は一步毎に趣を異にし、延長七里の間、或は放膽或は細心、一点一劃の妙を誤らず、寸尺の凡景なく、造化の妙技は、愈々出て愈美に、倦怠なく、駄作なく、首尾一貫、(七)神秘的幽玄的氣持が顯はれて人間界の氣持がない、(八)美術、哲學、人道、の極致が窺はれる。

佐々連鐘乳洞

萩町の東南川上村高瀬の北十八町許福川村佐々連の北にある。他の洞穴に見ることの出来ない特徴を有し、頗る美麗なものである。嘗て帝國大學教授理學博士神保小虎氏は調査の上、鐘乳洞として組織立つて發達せる点に於て、稀有のもので學術上好箇の研究資料なりと激賞し、左の特色をあげた。

(一)白色義麗なる鐘乳石、石筍多きこと(二)石灰岩裂渠の壯大(三)鐘乳石に木



洞 連 々 佐

根の發育せること(四)煙突穴の發達著しきこと(五)石灰華の豊富なること(六)鐘乳石の彎曲せること(七)石灰岩浸蝕せられ鐘乳石群の如き美觀を呈せること(八)狭き間を通して更に廣き室に出づるところ多きこと。

本洞には左の三洞がある。

觀音窟 長二町幅廣き所は、七間、高さ高き所五間
其の中名あるものは、踊場かれつき堂、千疊敷、大
鷲、涼風坂、上雲梯(北海氏命名)金柱、荷梯、大吹
流、花御殿、笥岩、白龍窟、見返峠、數寄屋、第二
上雲梯、法螺貝、兜岩、維摩石、叢雲天井(神保博士
命名)前殿水晶殿(北海氏命名)奥殿(同上)人形御殿
佐々連洞 長さ六町巾廣き所五間高さ十五間其の中
名ある名勝は、大すたれ、大睡瓜、仁王門、仁王坂
天岩戸、天蓋、蜂巢大井、三尖塔、蟠龍窟、大煙突

白かれ廊下、群玉床、荷葉廊下、泥中の玉、浮彫天井、龍角石、普賢石、第一石門、第二石門、夫婦池、鳳尾岩、鳳翼岩、大雪溪、洞内アルプス、第三石門、眼鏡、天井、三福門北、大練塀、集福峠、水郷、迷宮瀧見観音窟、長さ十三間の小洞、頗る美観のもの。

阿武川下り

阿武川下りとは上述の如く長門峽の下流、高瀬より萩に至る迄の間を舟で下るを謂ふのである。阿武川の絶勝は決して特に附したる名稱の長門峽丈けで盡るものではない。長門峽の盡る所、即ち高瀬から萩迄の間は所謂長門峽と趣を異にした佳景が連続して居る、若し舟に依て之を下らんか、奇岩怪石の突出する所、水之に戯れ、或は樹木鬱蒼たる下、深潭の静かなるを走り、左右の山峯は或は近く、或は遠く、舟は水に従て、曲線を描き、又直線を描き、或は竹林を望み、或は茅屋を眺め、かくして幾度となく、山迫り水窮りては展開する毎に山高く水長く一回は一回毎に風光を新にし、一舉手一投足の勞だになく、水意に随ひ、山心に應じて、千變萬化の絶景を弄しつゝ、史蹟名勝多き萩町に着くのである。其の痛快さは、たとふるにもはないのである。

探勝方法

長門峽の探勝は、下流より上流に遡るのが最もよい、そうして、單に探勝道のみから觀賞するのでは、峽の眞景を味ふ事は出来ない、或は溪に下り、或は岩上に登り採して、各方面から觀察するのが最もよい。特に往々長門峽驛から二里許下つて、跡へ引返す人があるが、それでは長門峽の眞味は逆も分らぬ。長門峽の第一勝景は金郷溪口金郷瀑布、又切籠切窓であり且つ前に云つた通り阿武川下りを試みねば話にならぬ。更に又長門峽の眞味は、生雲溪漣溪をも見なければ、充分でない。それを氣車で素通するやうに味ひもせず、急行するのは決して眞趣が分るものではない。

四 大鐘乳洞

瀧穴 美禰郡秋吉臺の南麓にあつて天下稀有の一大鐘乳洞である、洞口より普通探勝者の終点とせる所迄凡そ六百間洞口高さ約二十米突幅六米突廣庭と稱す所は天井の高約十三米突幅六七十米突、洞内、山あり谷あり溪流あり、溪流は奇岩怪石の起伏せる間を縫うて瀧となり、瀧となり、潭となり、淵には小舟を浮べ、溪には橋を架し、以て探勝の便に供してある。又數多の鐘乳石、石筍等美絶快絶を極めて居る。

中尾洞 美禰郡共和村大字青景字中尾中尾山の絶頂にある、延長約三丁洞内名ある名勝五十有餘、鐘乳石、石柱、石筍等奇を盡し美を極む。大正十年三月三日探險せられ同

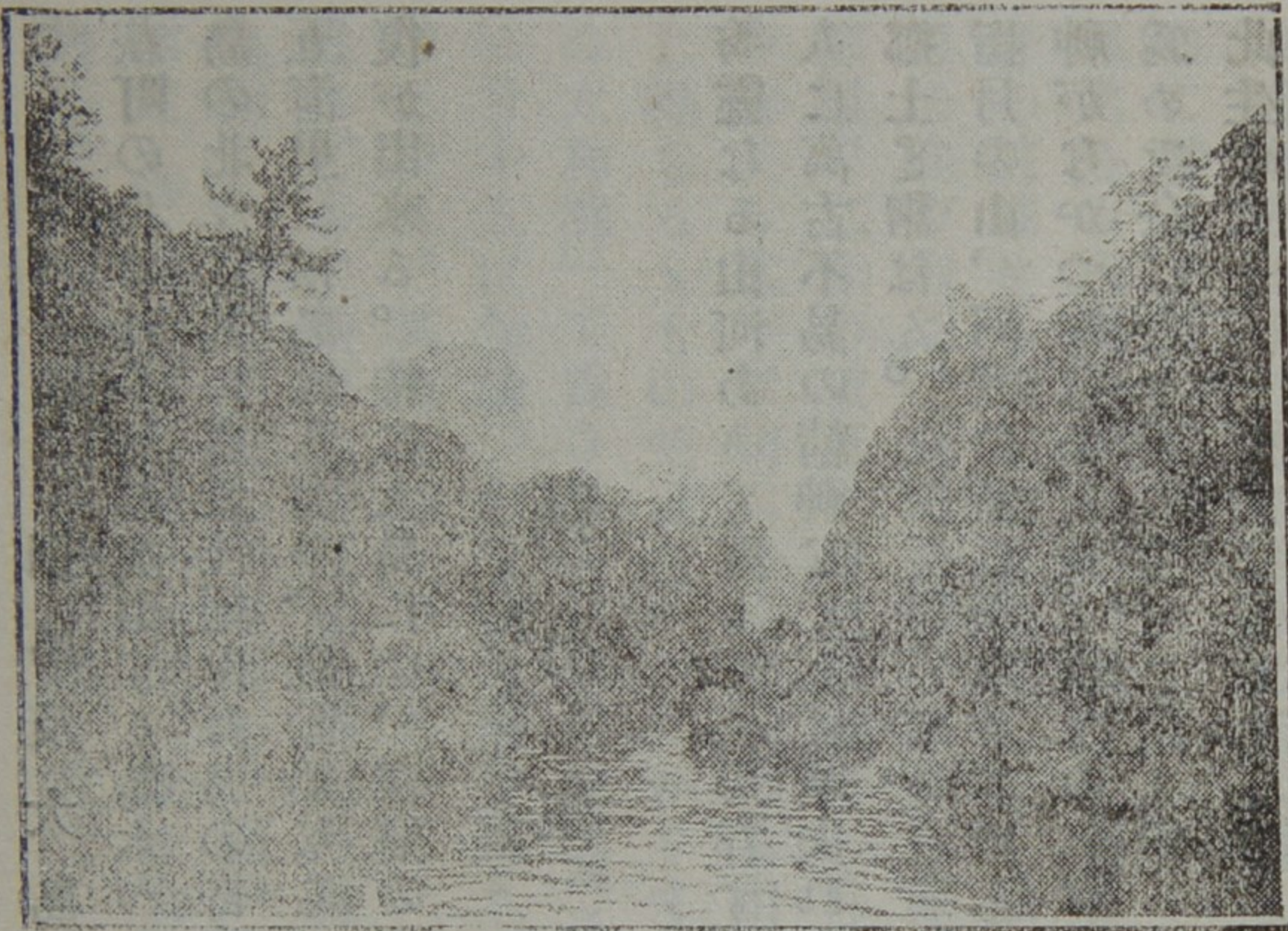
十二年三月八日天然物として指定されたものである。

景清穴 往古より有名で、美禰郡赤郷村佐山にある、猪



出臺を南より北に貫通し、長さ十四丁天井の高き所、十一間、幅の廣き所二十間に及で居る、名稱ある奇勝が九十七ヶ所ある。

大正洞 同郡赤郷村佐山にある、大正十年一月五日に發見されたと云ふ事、幅



は狭き所一間、廣き所十五間天井の高き所は五間乃至六間奥行八丁洞内百有七ヶ所の奇勝がある。

青海島

青海島は、仙崎の北日本海に突出する島で、其周圍七里餘、全島山岳連亘し、其の北岸は石英粗面岩の山骨を露出し、或は千仞の絶壁を爲し、或は數十丈の洞窟をなし、其餘勢の走る所、奇巖となり怪礁となり、雄大且つ豪壯の大奇觀を爲して居る。勝景中の主なるものは

鼻ぐり岩、笏岬、平家岩、白旗、觀音洞、門、蛇岩、石門、横道の洞穴、大門小門、長濱、壁岩、瀨藪、十六羅漢、釣井瀨、島見門、糸引瀧、高崖、夫婦岩、重巖、烏帽子岩、佛岩、屏風岩、松島、猿江り、帆留の口。

相島及大島

萩町の北、日本海に突出する島六つある、之を六島村と云ふ。其中、大島及相島の北岸は共に風景佳絶青海島の奇勝に勝ること數等である。萩を距る大島は、五海里、相島は八海里、發動船ならば萩より、大島は二時間、相島は四時間で往復が出来る。特に大島には、澤郷の遺跡がある。

萩の生命

秀靈なる山河ありと雖も、人の存するなくんば唯山河、人の存するありと雖も、人に萬古不易の精神なくんば唯夫れ動物の棲息地のみ、何ぞ國家と謂はん、何ぞ郷土と謂はん。

指月の山、阿武の流は美なりと雖も、眉目秀麗の人は多しと雖も、萬古不易の精神がなかつたなら、萩と稱するには足りない。萩の萩たる所は實に此精神あるが爲めで余は之を萩の生命と謂ふ。

此生命は一人一代の特有にあらず、過去、現在及無窮の將來に亘り貫通する一体

の活物である。之を至誠と云ふ固より可なり、然れども之を義と云ふ事の明快なるに若かず。

輝元公の八州を堵して、遺孤を輔けんとし、忠正公の二州を堵して尊王の爲め幕府と抗戦せられしは言ふ迄もなく長井次郎左衛門等の殉死、山田原欽の諫死、吉田松陰の刑死、麻田公輔、來原良藏、久坂玄瑞、寺島忠三郎其他數多志士の自刎割腹、二孝の凍死、皆之れ義にあらざるはなし。而して萩の生命たる義は、學者の解する文字章句にあらず、即ち山陽の如く象山の如く、見識及び文章を以て安じ得らるゝものではない。「かくすればかくなるものと知りながらやむに止まれぬ大和魂」で爲さざるに忍びず、爲さざる能はざるものである。之を以て千辛萬苦に甘するは勿論、山を抜き海を覆し、天地を振動するのである。松陰に於て、東行に於て、其他皆然りである。

然れども、萩の生命は暴虎憑河の勇、輕舉盲動の愚にあらず。仁、智、信、禮其他総てに於て明透し、徹底し、而かも益々努めて息まないものである。神社佛堂を創建し、神を敬し祖を崇び、世は太平に鼾睡するの時、學館を開設して文武を振興し、其學を勸むる所、獨り武士に止まらず、百姓町人に及び、藩主自ら粗衣粗

食に甘じ、儉政を施し、非常軍用貯蓄を起し、天下に率先して歐洲の文武を研究し、人材を登用し言路を洞開し、其他衛生に産業に工業に治水に遺漏なく間隙なかりしが如きが其れである。特に開國進取の始に當り松陰の「國体と云は、神州は神州の体あり。異國は異國の体あり。異國の書を讀めば、兎角異國の事のみを善と思ひ。我國をば却つて賤みて異國を羨む様に成行くこと。學者の通患にて。是れ神州の体は。異國の体と異なる譯を知らぬ故也」と言へるが如き、是れ義の眞髓、萩町生命の根本で千萬の犠牲も始めて光輝ある所以である。而して當時他藩主の多くが徳川に對する信に重きを置き若くは其威に恐れて、爲す所なく、又幕臣及び多くの他藩士が幕府及藩主にのみ義を盡すを知つて、大義を閑却せしものと大に異り、藩の主従は大義を第一とし且つ藩士は藩主に對する信義を一日も忘れなかつた。久坂、寺島等の雪冤運動來原麻田、清水の引責自殺切腹は之が爲めである。

此の如く萩の生命が義であるから多數の志士は、悉く學者でありながら原欽も清風も松陰も其他も學者として働かず一々義に働いた。其筆に走り、舌に鳴る處は寸言尺語と雖も悉く義の逆りで、鬼神を泣かしむるの慨がある。

唯に學者のみならず、畫家に於ても、百非の如く、寛齊の如く、西涯の如く、松洞の如く、又多くの醫師に於て、悉く大義の爲めに動きしな。

又輝元公以來の貯蓄も富まんが爲めの貯蓄でなく。大義の爲めの貯蓄であつたから王政復古後殘金百萬兩の内七十萬兩を献金せられた。

兵も義にあつて利にないから幕府が再征長に敗れた時、敢て之を尾撃せず、討幕に就ても他藩に功を讓る事を念とした。更に其初尊王攘夷に當り自他の區別なく志を同ふする者は他藩の士と雖も之を援け、進で他藩の志士と共に議し飽迄公明正大であつた。

更に又萩の生命は、普遍的である、君に忠、親に孝、兄弟に友、朋友に信其他總てに對し善ならざるはなし、で彼の原欽、松陰は勿論、前原一誠來原良藏吉田稔磨其他悉く孝悌の人であつた。

更に又萩の生命は萬古一体のものであるから各自巳の失敗は悲觀せず七生滅賊の確信を以て欣々然として、死に就き戦死するも斬殺さるゝも秋毫怨む所なかりしなり。是れ大義は、死より重ければなり。義は必ず貫き得べきを信すればなり。松陰は言ふに及ばず其他の志士又悉く然り今一二を掲ぐれば、

清水清太郎は勤王の士而かも君命を以て切腹を命ぜられし時、ゆあみして身を清め淨衣をつけ、たゞしく座をしめ紙押のべて、古道照ニ顔色一の五文字を筆太に書き、東に向つて再拜し、物しこやかに刃をとり其弟爲之進と召使の者難波傳兵衛に向ひ天道もし主君の家に、祚を降さざる事の有ん時は命にかけて報ゆべしとすは清太郎が弟にあらじ臣にあらじと遺言し來原良藏は藩論が開國から攘夷に變つた時自ら君意を取失ひ國論を誤解したと云ふので實父母養父母女房並に二人の子供もあつたか振棄て、腹を切つた。其時養父母への遺書には「斯る仕儀に爲つたのは嗚呼嘆きでございませうか苟も武士と生れたものであるから人に後れを取つて逃げ走り見苦しき様したらんよりはセメテものこと、御諦めを願ふ」とあり又其子に對しては「幼少と雖も忠孝の心懸け第一に候、兎角侍は死に後れざるが肝要に候」と遺書した。

又周布政之助は忠正公父子三條公等の冤を雪ぐ運動は不同意であつたが其運動の結果起つた禁門の變の責任は却つて、自ら引受け、八十歳以上の老母があり夫人あり二人の子供もあつたが自殺した。其子供への遺書には忠孝を第一にせよと云ふことがあつた其他の志士も悉くこう云ふ風であつた。

以上述べたる萩の生命の源を考ふに蓋し萩府開創の輝元公の義に出で、輝元公は更に祖父元就公に繼ぎ、元就公は又更に其祖先から繼承せるものである。

而て毛利家は實に天穗日命より出づることは前述の如し舍人親王が大化の詔文惟神我子應治故寄と宣るを惟神者隨ニ神道ニ亦自有ニ神道と注せられた如く我國は神の國で神の道に源を汲まれたものである。

謹で惟るに

天祖天照太神、皇孫に勅して、芦原の千五百秋の瑞穂の國は我子孫可レ王之地也宜汝皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與ニ天壤ニ無窮者矣と宣ひ三種の神器を授け玉ふた、特に

天祖寶鏡を持ち玉ひ皇孫に授て祝て吾兒視ニ此寶鏡當猶視レ我可ニ與同殿共ニ牀以爲ニ齋鏡と宣ふた、是れ祭祀の道、孝敬の義の起で、祭祀孝敬は實に天神に通する所以で獨り 聖子神孫の遵奉し給ふのみでなく臣民の遵奉せねはならぬのである。従つて 皇道か神道であり臣道が義即ち至誠であるのは此に其源がある。

而て神道なるものは完全無缺のものであるから、獨り國內臣民の恩澤に浴するのみでなく、漸次世界各国も其德輝に浴するものである、然るに、我國を以て軍國主義と云つて、懼れるのは全くの誤りで、實は理想の國体である。國家である。而て神州の道は、支那や西洋の論議言説の國と異り「天地位焉萬物育焉」と云ふか如く「生々化育」と云ふか如く、實行の國で文字に多くの重積なき如く我萩の生命も又實に「義」の實行にあつて文字に華やかになかつたのである。あるものは悉く

義の權化である。所謂學者の玩弄文字にあらず。右の如く萩の生命は、實に我國の神道に淵源するもので、松陰の正氣天地に塞ると言へる正氣即ち神州の正氣で至正至大至健至剛而して不易不息のもので、千萬年の前より千萬年の後に亘り、滅せざる宇宙間唯一のものである。然れども正氣時に顯れざる事あり、顯る、必らず人に依て顯る、維新後萩町に正氣の顯れざる事又久しい哉。嗚呼今後の清風たり松陰たり東行たり立瑞たる者果して何人か。

（御賛助順）
 瀧口吉良、八道彌七、山田喜八、岡田誠道、松田善衛、渡邊好延、平瀬太平、岡乙治郎、菊屋孫輔、賀田以武、岩田博藏、高村茂太郎、齋藤彦一、故小倉信恭、林安次郎、國重政亮、大岡興一郎、藤田組、前原昌一、北野右一、吉田潤一、末岡周介、大津友太郎、末武清、平野斌

感謝

本書發行に就き御賛助下さつた左記閣下並に各位の御厚志を謹んで感謝致します。

又本書編輯に關し安藤紀一氏、河野通毅氏、居田泰輔氏、藤本瀧江氏の御教示を辱ふした事を感謝致します。

大正十四年三月廿六日印刷
 全 年四月三日再版發行

不許
 複製

山口縣阿武郡萩町江向
 編輯兼 發行所 栗屋芳亮
 全縣全郡全町西田町
 印刷人 荒瀬徳治
 今縣全郡全町江向
 發行所 日本太郎社
 全縣全郡全町西田町
 印刷所 信清舎印刷所
 電話二八二番

定價金五拾錢
 郵稅貳錢

130p
 18cm

案内廣告

〔辨護士醫師其他實業家案内は以下に登載する廣告に譲り別に記事を掲げず〕

光榮摘書

- | | | |
|--------------|--------------------------|----------|
| 一、銀盃 下賜 | 有栖川宮殿下工場臺覽ノ際 | 明治二十三年 |
| 一、皇太子殿下御買上 | 山口町へ行啓ノ際 | 明治四十一年四月 |
| 一、宮内省御買上 | 於東京大正博覽會 | 大正三年七月 |
| 一、同 上 | 於大典記念京都博覽會 | 大正四年十一月 |
| 一、今上陛下御買上 | 九州大演習御還幸ノ御途次
防府安在所ニ於テ | 大正五年十一月 |
| 一、皇后陛下御買上 | 香椎御參宮ノ際防府ニ於テ | 大正十一年三月 |
| 一、宮内省御買上 | 於平和記念東京博覽會 | 大正十一年八月 |
| 一、萩町献上品トシテ選定 | 攝政宮殿下御成婚奉祝品トシテ | 大正十三年一月 |
| 一、北白川宮家御買上 | 大妃殿下萩町行啓ノ際 | 大正十三年五月 |
| 一、萩町献上品トシテ選定 | 秩父宮殿下山口町へ行啓ノ際 | 大正十四年三月 |

山口縣献上品製作被命及數回
萩町献上品

萩燒本窯元 坂 高麗左衛門

萩町松本

吉田初三郎先生著 萩名所圖繪 定價貳拾五錢
 吉田健堂先生著 長門峽名所圖繪 定價貳拾五錢
 最山健堂先生著 長門峽記行 定價
 萩新刊萩新地圖 (史蹟挿入) 定價
 萩名所舊蹟繪端書 各種

山口縣萩西田町
 含英書院 藤川東輔

電話 福岡二三三四番
 電話 九二二番

書籍并二樂器類
 理化學器具類
 筆墨外文具類
 繪葉書大取種類
 諸雜誌

山口縣萩東田町
 白銀日新堂

電話 第八十四番
 振替口座大阪三七九三番

内外砂糖
 メリケン粉
 雜穀卸商

岡 德三郎
 山口縣萩濱崎町
 電話 六三番

片栗物風物
 松ヤ菓子類
 種菓類
 掛物類
 其外燒物一切

山口縣萩濱崎町
 萩製菓工場
 岡 德三郎
 電話 六三番

萩唐樋町

寫真 村田寫真館

電話七十九番

萩江向

御料理 うれ之野

電話一七〇番

山口縣萩町

石版印刷
 活版印刷
 諸印彫刻
 株式會社 萩響海館
 電話一八番

創立明治二十一年

商標 **ス**

各國外果實園藝同業組合指定問屋
 内果青 外實物
 本場萩 外部輸送部
 萩橋本町
 末永光藏商店
 長振替電話 番壹拾參話電長
 關与替電話 番五九〇一
 (ス)ハ又(スネカ)略電

玩小雜
具物貨
卸商

藤山清太郎商店

長門國萩熊谷町堺町角

清酒
大黒正宗
別製菊の露
銘酒翁草
釀造元

大黒屋酒場

萩唐樋町
電話七〇番

一 番 確 實 な 店

和洋雜貨
各種金物
養蠶用具
夏密柑問屋

三 山 中 三 吉 商 店

電話三七番
振替下關四〇七番
電略(マヤ)又(三マヤ)

萩町新堀

玉木病院

電話二三八〇番

診療科目

内科、外科、皮膚病、花柳病科
産婦人科、レントゲン科

美術書畫骨董商

御不用品高價買入

山口縣萩西田町角

北村尚古堂

電話一九八番

御家用品 本質品



米味

酢噌

製造元

萩別院横町

松村商店

表具商
屏風

重枝好古堂

萩町今古萩

森玉堂

書畫骨董商
煎茶抹品

潰金銀高價買入

池田常吉

電話七十五番
萩町熊谷町

萩濱崎町
劇場
住吉座

電話二二二番
中村興行部

長門萩東田町
諸紙文具
商石川支店

電話一七一七番
振替大阪四〇二八番
店主出羽百合助

萩東田町五一
時計、蓄音器、貴金屬、眼鏡、指輪、装身具
佐伯時計店

電話二四八番
振替關八九四番
私書函萩局七番

御嫁入道具 卸小賣
並各國名産漆器

萩熊谷町

品川庄藏商店

長門峽下り川舟波止場本旅館の側
萩一の眺望のよい御旅館

萩驛通り橋本大橋きは

富田事巴橋館本店

電話二六番

四季眺望佳絶の

萩橋本町

料理部 富月亭支店

電話二六番

活版印刷

株式會社



萩印刷所

萩東田町 電話三九

株式會社
萩東田町
山口實業銀行萩支店

電話七番

濱崎派出所

電話二二番

ミシン販賣
並ニ修理
附屬品一切
洋服和服
洋服刺繡
其他一切

シンガー裁縫機械會社

萩支店

附屬萩シンガー裁縫學校

山口縣萩町西田町

京表具

掛物 金屏風 額面 其他一切

彩霞堂

中島桂一

萩町濱崎新町



山口縣萩町別院前

小原吳服店

振替口座ノ關二三八二番
電話略十〇七番



山口縣萩上五間町角

令島屋吳服店

電話一六〇番

山口縣萩町
株式會社
防長銀行

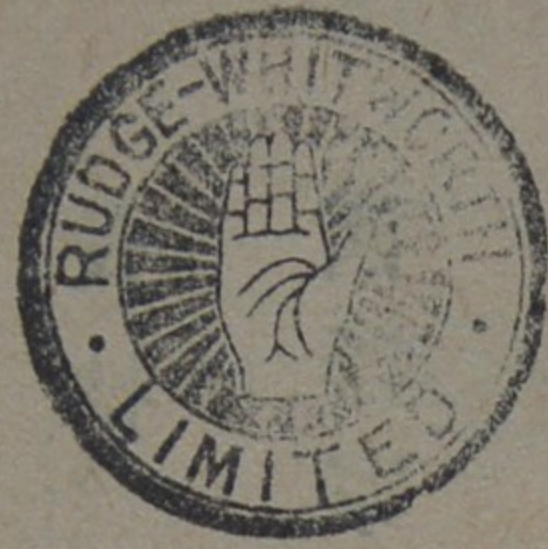
振替貯金口座
大阪關西
電話略號
長二番

山口縣阿武郡萩町

株式會社 萩銀行

電話特長三番

ラーヂハみよしへ



代理店

志都岐自轉車
志都岐タイヤ
發賣元

三好自轉車店

萩東田町
電話三九番

松竹キネマ、帝キネ、二社共營

巴城キネマ株式會社

模範
常設 **巴城館**

館主 佐伯清一

萩吉田町新縣道通

貴金屬、高等雜貨
 婦人小間物、簞笥
 長持、嫁入道具
 西洋家具、ウハ車

萩東町
 八木雜貨店
 電話八十八番

當地ノ原産
 大羽鯉の粕肥料
 ハ專業ニ扱
 ヒ居リマス



山口縣萩松本
 吉村善行

電話二二三六番
 又(ヨ)三六番
 振替五關五四六八番

西田町
 有田ドラック商會

山口縣阿武郡萩町大字古萩町
 資本金拾貳萬五千圓



萩製材株式會社

取締役社長 末永光藏
 主要業務

製材製函及製品販賣
 据付機械種類

一 帶 鋸
 一 丸 鋸
 一 原 動力
 一 蒸 氣 鍋 六 十 馬 力
 一 二 臺
 一 臺

工場ハ萩町の中央に位し水陸の便最もよく能率の優秀と價格の低廉なるを主眼とし本社の使命を全ふ可致候
 追て御要求により夜業にも從業可致候

見島丸 毎日二回航海ス

午前十時午後三時解出帆

萩町 濱崎町

航路 黄波戸、仙崎、澤江、通、萩間

見島汽船萩支店

電話長二〇八番

正明市驛 鐵道省公認見島運送店ト連絡ス

明木 縣下一圓貸切及乗合

山田

萩

明木自動車商會
大陽自動車商會

明木、萩、萩、奈古間、定期乗合
小畑 越ヶ濱 大井 奈古

萩唐樋町公會堂前
電話二一九番

銘酒玉椿釀造元 唐物屋

電話六二番
萩西田町

萩町土原

一 内外科
村上醫院

電話二四六番

技術の粹！

西田町

Ⓣ 竹原洋服店

電話一〇一〇番
振替 關西五二四七番
福岡一〇五七二番

價格の廉！

サンエス萬年筆特約販賣店

和洋諸品
學校用品
運動用品
事務用品
椅子テーブル

商 住永治郎吉

山口縣萩瓦町
電話七一〇番

優良清酒

於各博覽會
品評會優等賞金牌受領

菱山正宗

萩瓦町

釀造元 山田酒造場

電話二三八番

石油、輕油、揮發油

萩町濱崎町

島本梅三郎商店

電話一八七番

マキノ高級寫真上映

活動常設 黃金館

萩町江向

貸切自動車

金谷、越ヶ濱間
平安古、松本間 乗合

萩東田町

巴自動車商會

電話二六五番

萩焼本窯元

不走庵

三輪雪堂

萩町松本

醫用藥種并ニ器械
諸賣藥洋酒滋養藥品
學校用理化學器械及消毒藥
販賣

津田藥舖

萩東田町
電話八十六番
私書函九番

明治生命保險株式會社
明治火災保險株式會社
萩代理店

疊表類
販賣
中村善次郎

山口縣萩町御許町
電話五拾四番
振替口座五關六七三七番

書畫古董商

桃花堂
上田彦助

萩御許町十日市角

長州萩町新川

正宗
萩の錦
中村酒場

電話百三十七番

大正八年一月開館

活動
常設
永樂座

電話二六〇番

各種新聞特約販賣

帝國生命保險株式會社萩代理店

大阪毎日新聞大賣捌

書籍
雜誌
八木六百館

萩西田町
電話一六九番

業營切貸合乘

定期乗合營業線路
 道路ハ至ッテ安全
 乗車賃金低廉
 各線路數回ノ往復發車
 貸切自動車賃安價



縣下定期乗合自動車の親玉は

防長自動車

山口縣萩町唐樋町
 防長自動車株式會社
 電話萩二一八番

山陽線小郡驛構内
 防長自動車小郡出張所
 電話小郡二二番

山口線山口驛構内
 防長自動車山口停留所
 電話山口一一九番

萩線萩驛
 防長自動車萩驛出張所
 電話萩九九番

眼科専門

萩町北古萩一番地

村田眼科醫院

電話二〇四番

耳鼻咽喉科
 氣管食道科

萩町吉田町

齋藤醫院

電話一七三番

岡山醫學士 齋藤壽福

營業科目

漁業 石油 造船 修理 機械 諸工 器具 賣買



長州萩町新川
 萩山波組

鐵工業部
 鐵工業部
 鐵工業部

電話(ヨコ)又ハ(ヤマ) 七三番

陸用瓦斯
 石油エンジン
 石工器具
 專門製作
 工器具賣

TRAD MARK



原鐵工所

長門萩町御許
 電話二一八番
 略(ラハ)又ハ(ハ)

原造船鐵工部

長門萩町新川

業開日三十月一十年八正大

東 椿 町 萩

社 會 式 株 絲 製 萩

番 五 四 話 電
番 五 三 二

高級履物製造販賣

湯 淺 履 物 店

萩西田町米屋町角

辯護士

高尾伊太郎
萩町江向

辯護士

永見直之進
萩町川島

出張所 萩區裁判所前

新築落成
病室完備
入院隨意

萩唐樋町

横 山 病 院

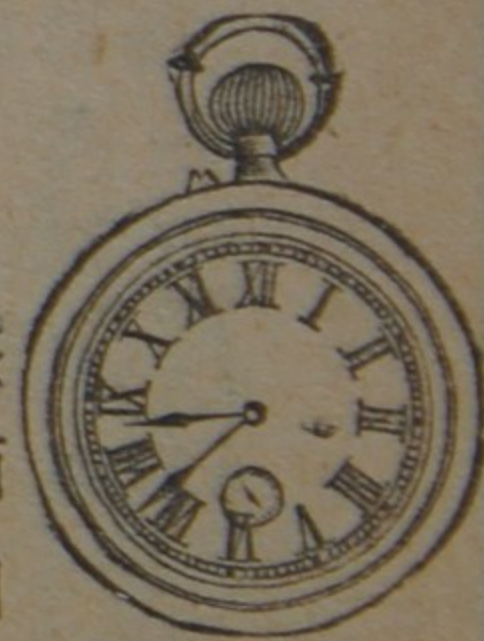
電話一〇八番

院長 横山岱亮

診 療 課 目

内科、小兒科、皮花科、泌尿
生殖器科、性病科
外科、レントゲン科

各科専門醫員擔當



萩西田町

有 治 商 店

電話八十九番

時計、貴金屬
舶來雜貨

諸 看 板
硝子着金文字
シン子ウ看板
ヘンキ塗

村 山 看 板 製 作 所

萩町唐樋町

萩電燈株式會社

萩町 江向
電話 一六四番

有價証券現物問屋
建築材料
室內裝飾
小野田
セメント
一手販賣

萩唐樋町
防長商事
株式會社
電話 特長 二二一番
長 二二五番

昔から名高ひ
効力本位の
補血強壯劑
家傳
歸命丹
製劑本舖
ふじや劑壽堂
長門萩東田町
振替 關四八六九番

海產物
委託商
茶
中福運送店

長門萩濱崎町
鐵道貨物百般事業
防長自動車株式會社特約店
內外輸出入貨物取扱店
萩實業會特約店
店主 中村福次郎
持圖電話 百四十三番
電話 (ヤマナ) 又ハ(ナ)
振替 關二一九〇番

風月堂

本店 瓦町
支店 東田町
電話 三三四番

海產物販賣業
井三 諸罐詰製造

食料品部

萩濱崎町

大 齋藤五郎作

電話四四番

萩西田町
信清舍印刷所
荒瀨德治

辯護士

津田又次

事務所 萩町土原十日市
出張所 萩町米屋町下

辯護士

武田次郎

本宅 萩町土原馬場ノ町
出張所 萩町米屋町下

安價ニシテ確實

萩町新川

柴田履物店

友榮製
正榮友

大丸商會

萩町椿町四ツ角
電話二十三番

清酒醬油釀造

肥料販賣

萩唐樋町

御料理 高大亭

電話六五番

萩唐樋町

御旅館 大阪屋

電話五八番

萩東田町

御料理 梅月亭

電話一三一番

萩西田町

諸新聞販賣
陶磁器販賣
藤谷巴城館

安くて
便利な
文化的



山口縣萩町

鑛泉浴場

階上休憩所

鶴の湯

別世界

電話一八四番

株式會社 山口縣萩町

百十銀行萩支店

電話長一〇番

世界無類の名稱を有し

世界無比の名利超越の新聞

大正七年一月創刊

日本太郎

立至誠住絶對

言論即實踐

商品性を排し公益性に立脚す

山口縣阿武郡萩町江向

發行所

日本太郎社

電話二八二番

泉流山萩焼

山口縣萩前小畑泉流山窯元

吉賀大雅堂

窯元は雁島橋より縣道通を東北へ五六町眺望佳絶の所に在り

萩の名産

高雅

優秀

長門峽燒窯元

長門峽燒 大雅堂 吉賀要作

山口縣阿武郡生雲村枋崎

